



外科調室記

ヤ 9
1130



ヤ
1130

石塚氏主

91-2060



改補外科調寶記序



史古蹟聖人萬物を育いく

天工之法て民生を救仁術を

ほごこして百病の天孽を除る

道を教養ふ外瘡此科も中

其ひくあり今此書を中算

本朝諸氏百家此靈秘を授

萃一おう以常て用と奇驗

外科

何る膏丸丹を載て救民お治の
 一卷として漢語を和訓
 假名字を以て但詞をつ
 こし祢がはくハ遠境山野の人
 知志免人の
 るめあり文明好手輕設
 甚る事ふ久ハ幸甚
 一

改補外科調實記

目錄

諸腫瘡圖	八丁
癰疽總論	十六丁
同治法辨論	十九丁
腦疽之論	三十丁
乳癰乳岩	三十四
肺癰肺痿	三十九

外科

心瘡

心経はぬちのあひまづ
蜂巣瘡と云

四十一

脇瘡

むらぎのトクヒキト
らゝまづ

四十二

胃口瘡

らぬくむのらにづ

四十三

腸瘡

かぐとこのちくまづ

四十四

腹瘡

マねら又はの内いづ

四十五

臍瘡

へそぬらゝいづ

四十六

腎瘡

まろごごまづ

四十七

懸瘡

いんせんといづ
みのとにいづ

四十九

囊瘡

ふくらまづ

五十一

疔瘡

五十四

風毒風腫風毒腫

六十一

附骨疽

つともしなるけいづ

六十四

脱疽

附鶴膝風
疔のふ脚背癰もいふ
足乃ゆびまづ者なり

六十九

石疽

足のうかるとまづ
尻りまにまづなり

七十二

鬚疽

西乃こいんまづなり

七十三

癰疽

いづとち定らぬ人も
多し手足のゆびまづ

七十五

石榴疽 いぢはきいづるなり 七十七

龍泉疽 うららびるいづるなり 七十七

虎鬚疽 トくらびるいづるなり 七十七

多骨疽 ちちりゆう骨づるなり 七十九

甲疽 代指いづる手足のゆいれ
甲又生とうなり 七十九

天蛇頭 手何乃ゆいぬのせら
いづるなり 八十

瘰癧 くび乃まりいづる也 八十一

咽喉 のどれやまひなり 八十四

癭瘤 こぶ乃こことなり 八十六

流注 救おかくいづる所さご
まらざるなり 九十

痔瘻 七種あり 九十二

脱肛 ちろごぬけいづるなり 九十六

下疳 くしこもさくに記と 九十六

便毒 便瘻ともいふことなり 九十七

楊梅瘡 さうかさ乃こことなり
さうぞくくもいづる 九十八

翻花瘡 おろしひかいなるてま
生じらるなり 百三

鼻痔

鼻痔内痔俗名

百四

内痔

口内上腮生じり

百五

口舌瘡

口中舌みづり

百五

牙齒瘡

きばたやまひ

百七

疥癩

かぶれ病

百九

頭瘡

かぶれ病

百十

耳瘡

かぶれ病

百十二

骨槽風

かぶれ病

百十三

鷺掌風

かぶれ病

百十四

臙瘡

かぶれ病

百十五

脚跟瘡

かぶれ病

百十

嵌甲瘡

かぶれ病

百十九

下疳

かぶれ病

百十九

婦人陰瘡

かぶれ病

百廿一

婦人脚了

かぶれ病

百廿三

癩發

かぶれ病

百廿四

蝸牛瘡 くわいとうそう 手足を生とするなり てあしをうまるとなるなり 百廿五

疥癬瘡 せひせんそう いせんのことなり いせんのことなり 百廿五

癩風 らいふう 黒くまざる白くまると くろくまざるしろくまると 百廿七

風癩 たいり 又血風瘡とつふなり またけつふうそうとつふなり 百廿八

湯火傷 やけど 湯やけ火やけどもよ かゆあけひやけどもよ 百廿九

跌撲打傷 こつかくとうき うち身れことなり うちみれことなり 百三十

破傷風 さしやうふう うら身切 うらみきり ロウふうをいふなり 百三十一

頭瘡 づかさう いしらにづらもろ止 いしらにづらもろとど 百三十三

面瘡 めんそう いかにづらなり いかにづらなり 百三十五

丹毒 たんどく くそれことなり くそれことなり 百三十六

漆瘡 しつそう うばしまけなり うばしまけなり 百三十八

小兒軟節 せうにえにせつ 子どもれと糸なり こどもれいといと 百三十九

小兒遺毒 せうにえいどく たりがとれいなり たりがとれいなり 百三十九

小兒痘風瘡 せうにえとうふうそう やらとれとつなり やらとれとつなり 百三十九

小兒胎毒 せうにえたいどく いしらむらられなり いしらむらられなり づらもろりなり 百四十

小兒鴛口瘡 せうにえこんこうそう ちんちんなり ちんちんなり 百四十一

小兒痘癰 かうきうれりなり 百四十一

小兒痘疹 かうきうれりなり 百四十二

小兒葡萄疫 ふぶどうそとふぶどうれりなり 百四十三

小兒諸腫物 一よるちり 百四十四

失榮 のとくびうまどい 百四十五

唇風 下らびるふらびる 百四十六

結核痰核 のとくびうれりなり 百四十七

銳毒天疽 耳れりろ一寸三分 百四十八

腦漏 つひくそるあかく 百四十九

枯筋箭 腫物より筋へりなり 百五十

癰瘡 かうきうれりなり 百五十一

眼丹 まがいらよいつるちり 百五十二

肺風粉刺 さまにこまうらるもの 百五十三

酒皸鼻 さくらいよるもの 百五十四

合谷疔 大ゆびのいこいこ 百五十五

中毒 りろくれ毒れり合 百五十六

魚鳥骨鯁 なやてしつとよわりの
たたらとぬくくさる 百五十四

咬傷 むしけごものよめま
きさるぬつふ 百五十四

急救 頓死乃ふかろ 百五十五

金瘡 きつとす此事かろ 百五十七

頭痲 百六十四

胸痲 百六十五

金瘡禁好物 百六十七

諸腫物禁好物 百七十

腫物灸針とる方 百七十三

敷藥粉藥 百七十四

洗藥 百七十七

諸流家傳之膏藥之方 百七十七

阿蘭陀膏藥之方 百八十四

諸藥種油之取様 百九十四

目錄 終

○諸腫瘡之圖 百一十一種

○ 顔面の部

佛頂疽治方は疔疽といふなり

腦頂疽は生じざるなり

透腦疽はたへの上發瘰癧は生じざるなり

治方は疔疽といふなり

眼疽 眼瞖 龍泉



疔疽再此何さ生じざるなり
治方は疔疽といふなり

一 風尾疽目のるいふく生じざるなり

後腦疽再此生じざるなり

治方は疔疽といふなり

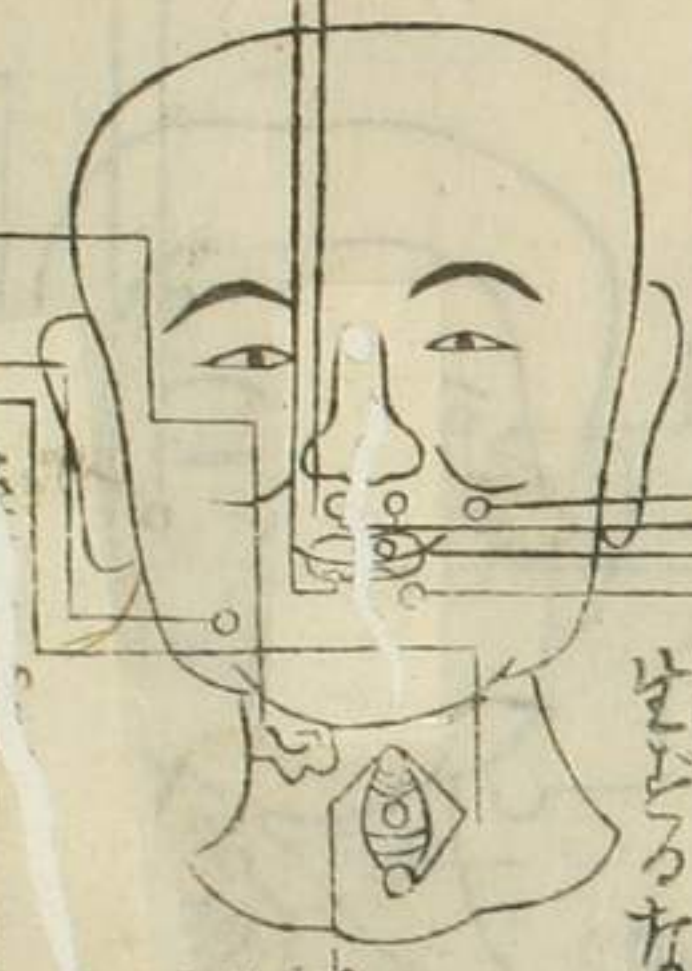
額疔腫より治方は疔疽といふなり

鼻痔は生じざるなり

内瘻は生じざるなり

破れの中やぶるなり

生じざるなり



喉の上下に生じざるなり

急膿治方は疔といふなり

失榮百死生じざるなり

疔疽再此何さ生じざるなり

治方は疔疽といふなり

トキ

黄水疽既面耳頂... 骨擗同耳の若牙膿頂... 疔毒の毒...

疔毒

疔毒の面... 馬刀瘡治方の瘰癧...



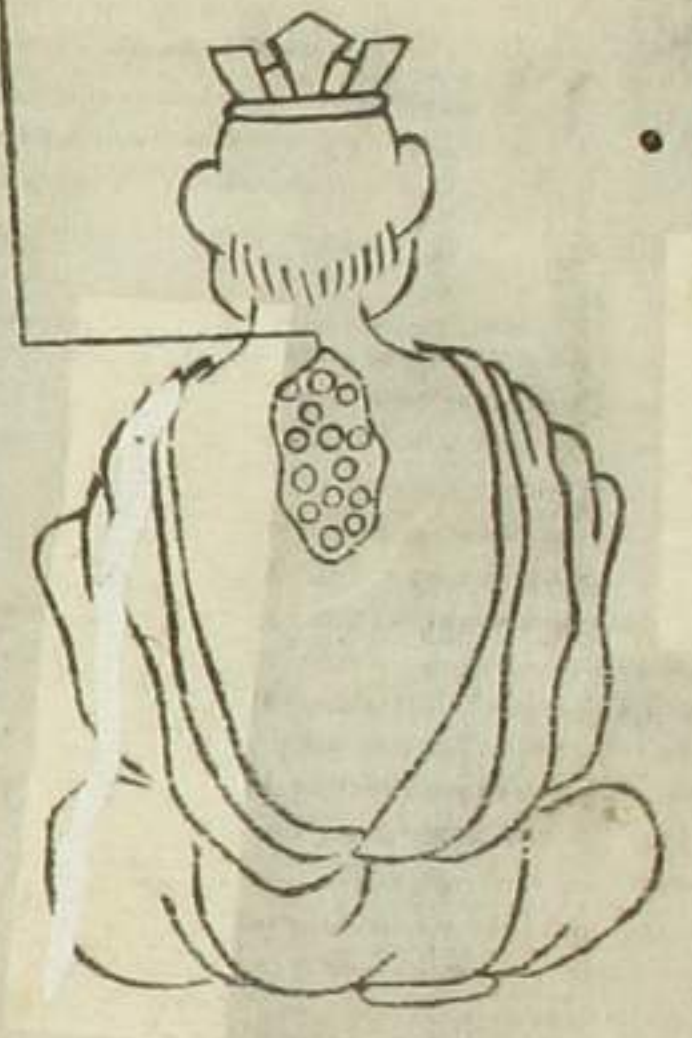
乳刺の粟粒... 酒酸鼻... 血痣... 黒子... 瘰癧... 結核...

梳毒の身... 白屑風癬... 瘰癧... 腦漏... 風癩...



疔毒の頂... 疔毒の身... 疔毒の腦... 疔毒の耳...

○持れ部
ことなり出
○持れ部の
ことなり出



脾の
運子



公の
ひん



右の
胸の

脊
左の
天
肩



公

○腎の部

腎

腎瘻 右に骨の下馬瘻といふ
腎瘻のらうとくして痛く色も赤

腎瘻 右に骨の下馬瘻といふ
腎瘻のらうとくして痛く色も赤
顔口瘻 尾骨の下の骨の穴に
瘻の穴に骨の下の骨の穴に
腎瘻 右に骨の下馬瘻といふ

瘻毒の門の内から瘻の穴
瘻の穴に骨の下の骨の穴に
瘻の穴に骨の下の骨の穴に
瘻の穴に骨の下の骨の穴に
瘻の穴に骨の下の骨の穴に

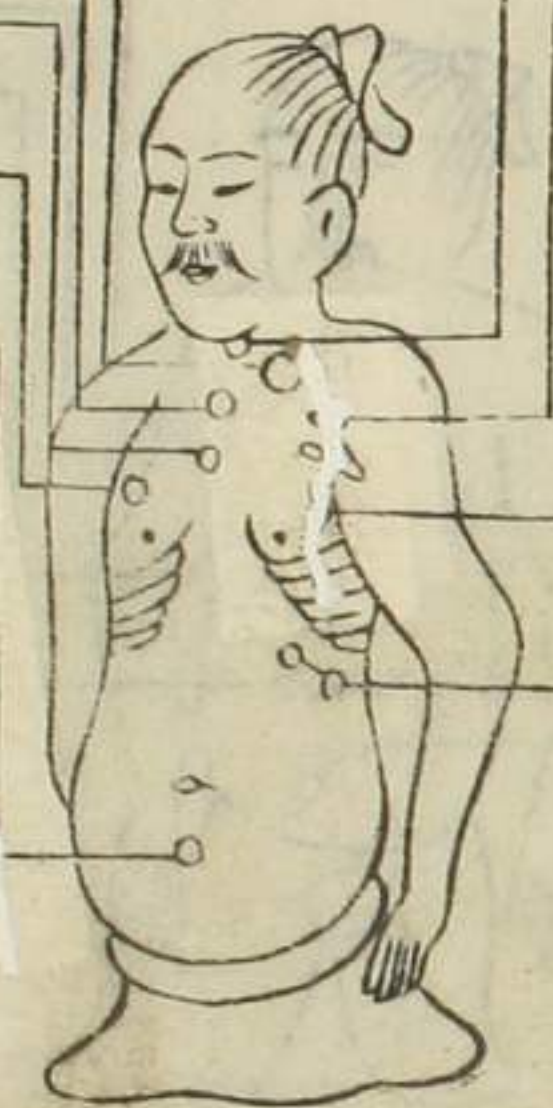


○胸の部

瘻 瘻の穴に骨の下の骨の穴に
瘻の穴に骨の下の骨の穴に
瘻の穴に骨の下の骨の穴に
瘻の穴に骨の下の骨の穴に
瘻の穴に骨の下の骨の穴に

瘻の穴に骨の下の骨の穴に
瘻の穴に骨の下の骨の穴に
瘻の穴に骨の下の骨の穴に
瘻の穴に骨の下の骨の穴に
瘻の穴に骨の下の骨の穴に

瘻の穴に骨の下の骨の穴に
瘻の穴に骨の下の骨の穴に
瘻の穴に骨の下の骨の穴に
瘻の穴に骨の下の骨の穴に
瘻の穴に骨の下の骨の穴に
瘻の穴に骨の下の骨の穴に
瘻の穴に骨の下の骨の穴に
瘻の穴に骨の下の骨の穴に
瘻の穴に骨の下の骨の穴に
瘻の穴に骨の下の骨の穴に



毒の治方瘡といふなり

治はるるなり

入面瘡といふなり

鼻面瘡

凍瘡



前

穿眼瘡

附陰瘡

瘡毒の毒を治すなり

附背瘡腹足よす

蝮牛瘡



後

脚眼瘡

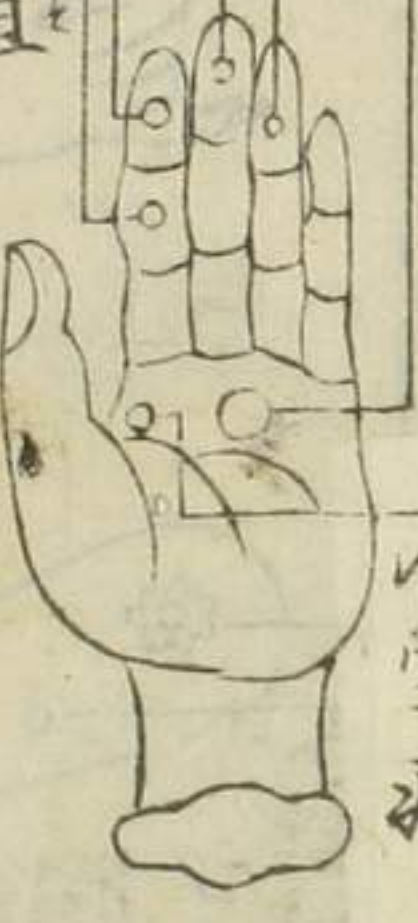
牛程瘡

嵌甲瘡といふなり

夫蛇咬の蛇の咬つて

代指

瘡の毒なくも此内に生じ



魚肚治方代指といふなり

紅糸疔といふなり

たらしまらつて

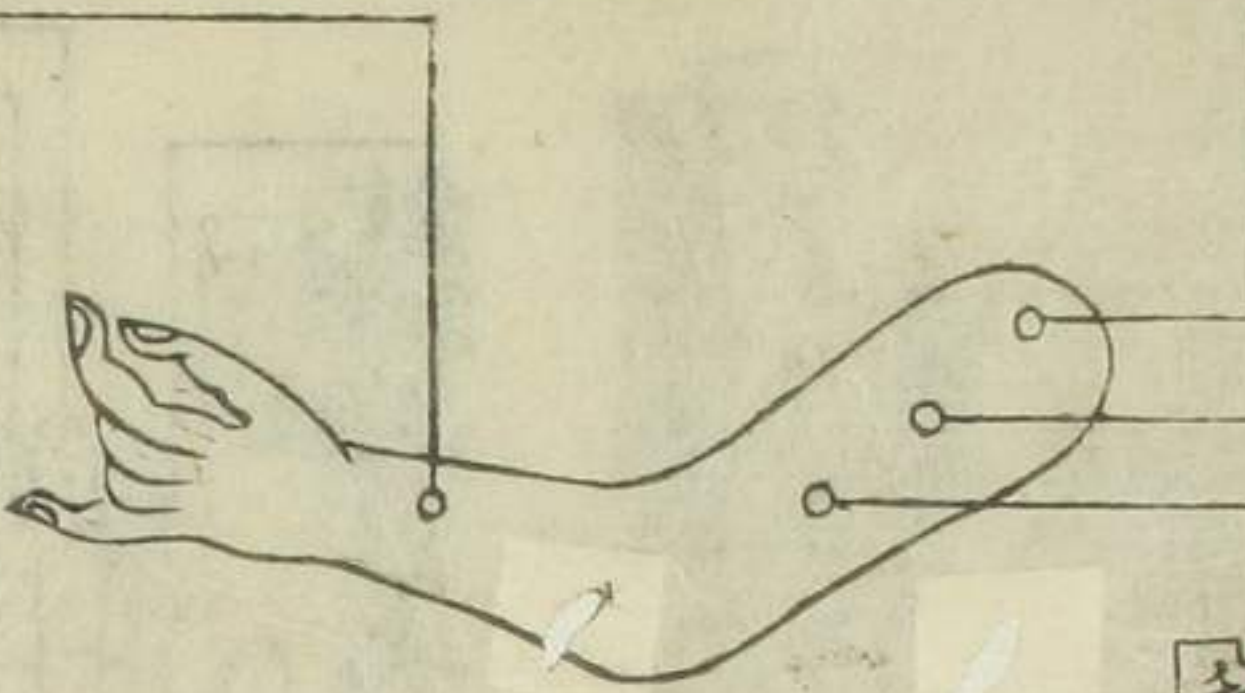


甲

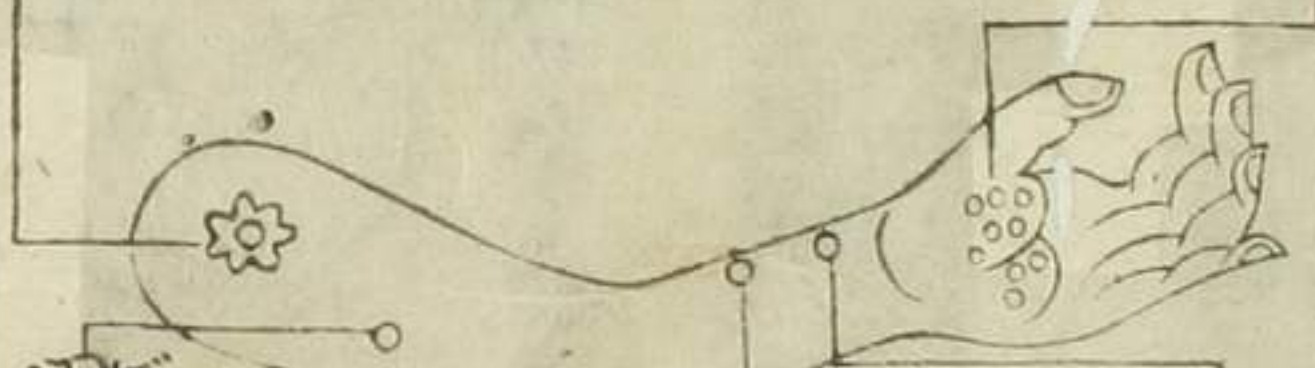
瘡毒の毒を治すなり

甲瘡の毒を治すなり

膝痛の治方
膠痛の治方
樂痛の治方
治方と痛



膝痛の治方



腰膝痛の治方

膝痛の治方

腕痛の治方
肘痛の治方
手痛の治方
指痛の治方

膝痛の治方
膠痛の治方
樂痛の治方
治方と痛



膝痛の治方

脚痛の治方

○小児の部

痘風疹やとうれを
 既疹又胎毒もくはひる



遺毒

我口瘡
 葡萄痘

胎漏胎毒既に出る

軟節

丹毒赤黄白
 三つあり

壳瘡



痘瘡疔
 痘癰

○癰疽總論

癰疽の毒氣血の勝者と要を内外
 の因濕熱滯り純陽の色赤く潰て
 治りやと一純陰の色黒く腫てか
 たきあく牛皮のごとくちと痛すべ
 又半陽半陰の症あり腫るも似て腫
 るも似て疼す赤も似て赤く
 潰たりやと一潰るも是の某を
 用いて陽症よりか合時生へ風を
 さへはさめ痒も多し氣をばとさ
 らぬ痛も多し湿の腫食とばはら
 ば寒熱をばらり虚瘡の色白く熱
 瘡の色赤くと痛たり菜毒あり
 時石れくくと痛ます外感

外種
熱毒を發するもの飲食は忌み
て腫痛は甚しく脈浮
して邪氣表にあり托裏を
少く汗表邪散して愈め内傷
飲食積毒の起る腫毒常に達口湯
き脈沉實小して邪氣裏にあり急
に寒冷の蒸を用ひては然らざるも
虚損房勞爵氣小やうる者
邪氣經にありて表裏に
汗をのぞき脾胃を補ひてより
内發初起は灸して妙なり熱毒
半やうる膿も已は熱やうる鍼は
癰疽痛を止毒とやうるわうる
瘡の斂らす必と又開くなら洗て

よく毒をくひ氣血を活し膏
茶と張て風寒に破らざるやう
まへ又無名腫癰瘰癧あり
無名腫癰瘰癧にありず疽にあり腫
物乃出やう惡瘡の起る或瘰癧或ハ
痛甚し癰瘰癧瘰癧ハ濶る一すよ
る二寸にありは瘰癧とす二寸より五
寸小なるは瘰癧とす五寸より一尺い
たるは疽とす一尺より二尺にありは
竟体疽とすいまだ潰すして色紫
黒となりて堅し既潰てくは陷
と岩のごとくかなるは瘰癧とす四方小
ちら有て牛の唇のごとく黒く硬し瘰
とす頭やう色紅なるは瘰癧とす腫

グと癰う沈と潰ると疽と外
は出るを外發と腸胃に伏する
と内疽と癰の癰疽より輕し
癰癰癰の癰は治し
傳に曰癰は浮して腫淺し疽は
堅く深く痛きは癰は腑より
根とさし腫はかり疽は臟より
根とさし發ふかり癰は年月を
經てづるあり故に若き人より
出どとさし癰は口々ありとさし
大略といふ大癰といふ頭のほり
に出てさしなりとさし潤廣くさ
て紫色と頭はさびのおと成る
有て底ささく痒きものなりと

この癰も大きければと連癰と
云内股或は莖から出る者あり
いばさし陰分に發ふものなり背
癰と云は背にいで肩癰は肩より
づる粟癰といふ崩の下或は股乃
付きは出る者なり蟲癰と云は
手足は出る立癰と云は臍のほり
に出る束癰と云は膝のほり出
る又外股はづる元癰と云は頭は
出のかり此外の癰はづる輕き
ものかりすべて癰の皮は薄し疽の
皮は厚くして深きものなり陽症
の腫大にして瘡の色赤らふるは
色にき痛きはよく寒ければ熱氣

傷寒のふと有て瘡のいきりひさ
こめくくくるるの陽症なり發熱疼
痛して病人らるしむの瘡のうほを
するやかり世俗いととし医者いた
るれどもみやとく愈やとたゆこ
よ潰て口あけ熱さあつみ止なり
陰症の初發は瘡ともちほど粟粒
のおとくはと腫ど赤からず痛と
た熱氣あつて瘡の形少あこ
あつたるやふて心くるき事も
あり七八日のら身そびまきたる
やふて腫あがれども高うす瘡の
根ひろがりちまうどころても膿
もたう食なりがごとく寒く一節

心忙々たり又瘡乃上にきぬときを
くらやうはうすくあるもあつらみひ
出るるくさく起卧もなりがさ言
と音うらうらしてはうす瘡の色紫
は黒く有て面の色は青く黄なり
軒高くひらりどひ口渴き舌こい
ふ此症の前ふれし純陰の症なり
きりて大事なり多分の治がじ
療治はみ膏茶とくはせ口あけ
て膿いて百よ一も生ふ事あるべし
○瘡疽治方辨論
瘡疽大小を按て痛じぬの病ふ
か少し按て痛じぬの病あはし
按てころ陥てすこりのぶと

ふりたるものいふところあるなり又按て上
下熱せざるもの膿なり熱甚き
もの膿ありとちる急よやうる
血あり根もやぶるなり破るふい
灸と用也べし必鍼と用也なり
灸とともる法は頂以上を除き瘡の
大小にあはざるべし艾の大きは大蒜を
錢三文程の厚さに切瘡の頂上
敷て其上に灸とべし灸三壯つ
して蒜を取のちべしとめて灸
とると痛むは皮骨痛とやそ
痒との来まですもべしり又灸
て痛まると痛とるものあるも
灸とべし若灸とると痛も痒も

曾てたれんども蒜とて直灸
すべし陰瘡日數十ヶ所あり大蒜
とほきたらぬ瘡の上はひろげ
ちげちね其上に灸とべし大蒜やぶ
るべし取るかり痛をおゆると
しとほ是火氣裏み入ていふと
あるかり深き処は是好肉なり灸
はくきし利ありちるも禁灸の
病ありと有頭の陽ふして陰なき
所凡瘡とる生とるいふこと
亢陽極熱の故なり若ふとひ灸
とる時毒氣さくふして反て大
に腫あがり其上痰を發せばく
らむ死せん面は生とる疔瘡も

のどし又腎俞穴とて兩腰脊
にも生じりあり此穴は出子瘰癧
の多く腎水の多しにきこる人乃
房勞の志なりこもる灸をとり
べ火うそその源とさうんめりわら
内外渴て昏悶して死するなり凡
瘰癧と云ふ膿たる時よく潰と
たる潰とさるう浅う深きと見え
鍼すべし先瘡の腫あがりたる高下
を見て其腫たる高下を針を入る
かくれとくさたすまは何方ぬ
鍼しするあははらなり若腫高く
てやまらうもの血脈は發せら
かる腫下して堅きもの筋脈は發

するかる肉の色かつこるもの骨
に付なり未潰さる小針をこもる
氣血外へ泄て膿こもる歩潰た
るに針をせざれば府潰るこもる
くかりて瘡の口たさめりかこし若
腫高き小針と浅くとれ内の膿へ
でどして及て血りる者なり腫下
又針をこもるとさる内膿へつ
まも肉とやぶるなり元氣の虚した
るもの先補して後潰さる針とる
時諸症たのぼく退くならん針を
とらん禁穴五あり背中のかう骨
なきは喉笛肝た此外動脈打脈
とよぶる腫の高さははら

て平肉二分斗も入る針をこま
りてはれてたらしむば五穴に禁
も苦ゆす凡癰疽の膿をぬきて
後外とてふ孔ありてり大膿の
べきふ膿すくくき瘡のなほ腐
肉ありて塗まざる内肉又膜のや
いへはるゆ出るたる熊手まて
腐肉とまきむく二寸も切されば
たのばく血出て膿うくらがる
膿の色は黄小して赤なるがなり
その膿日々に多く出ると輕し少
いありし癰疽をぬきて膿つて
きた針をあへ杉原紙をこまふは
て生白散といはるうけてさへ込三

日も膿をひくぐは是を膿はき
ある時ハ仙人膏太乙膏ハ愈
べ膿くくひひの青膏丹凡と必
加て付まば一夜のうらふ潰てさる也
丹凡ハかるが少く加べ多く入
ては痛まはる瘡の上やちて膿と
まぬ出したる青膏とさるて仙人
膏と付べ膿ぬけて後陥くも也
其時粉茶といはるうけて上は膏茶
と貼べのうけ一日一度茶と
貼あやかり但初發のうけはよく
痛まば正茶と用ゆは癰疽は
潰きたる茶筒とて膿をぬくべ茶
風をあてぬやふとるから先りの膏

茶とさうして洗茶と用也。やまらう縮
きれを以て洗茶を瘡の上にとけ
孔乃肉入手とからくして捺き内膿
腐肉宿膿湯とさうしてづる瘡乃
内さうらうくもさうしてさうして洗
たうやうらう縮とたみて七重八
重にして瘡の上とれりて両手を
軽くねらうと有て縮とあてり
二度かど取えてやうかぬと洗ひ
按とて四五度ふ及べば爽々成なり
て症とさうして膏茶を敷べ

○洗茶の方

乳香 没茶各五 野菊 這草花
煙艸各一 山飯來 十五 燒耐 一

右水一升五合入て五合いせんとはり
滓をさうしてぐんまわて処て腫物
とあつひ水氣とさうして茶付やうの
さうさうして内茶の腫物とさうして膿と
さうしてやうい用也。瘡疽とさう
みん冬いたき火う炭火とたさうに置き
寒氣を去病人とさうしてさうかして
夏の明ふき所と身とさうしてさうして
風を入らうとさうして風をさうして侵
やと一瘡疽潰とさうして前に痛とほ
さうして熱毒とさうして解毒湯の類と用也
苦膿と痛ひの膿を排ひ膿とれて
痛ひの針をとさうして潰て膿出て後
痛ひの虚とさうして八物湯と黄芪と

加へて補ふ又則に行きて穢氣に争ふ
て痛むものには乳香白芷芍薬桂類
を加へてやわらぐべし風寒にむさう
めい方風桂枝の類加へて温め散ど
べし渴くことなまらぐべきもの氣血
の虚かり人参黄芪めて氣を補ひ
當飯地黄めて血を養ふべし又泄
瀉するに寒冷に因て脾をやわらぐ
六君子湯に砂仁の類を加ふべし又
脾虚下陷するものには補中益氣湯
を用ゆべし吐瀉するものには腎脈虚
する者かろくす死を瘡疽大小便
通ぜざるもの熱毒臟に入故に通茶
と用ゆべし又伏熱面赤く便通せざ

ふに邪火經にありと汗して發せど
潰て後氣虚血涸し便通せざらば十
全大補湯と治と若老人と嘔し
不食せば參苓白朮真らと補ふべし
陽虚の疝みあやほつて寒冷を服し
外邪にれと久しと發熱頭痛し腹
痛泄瀉逆白汗盜汗せば急よ托
裏温中湯を用ひ後に六君子湯に附子
と加ふ或は生姜桂枝を加ふ甚しきもの
は當飯黄芪を加へ人参白朮を倍し
大服にして用ひ生姜附子一倍して用
手足おぼろすて用ゆべし凡頭上よ
瘡を生せば托裏消毒散と用ゆべし
かろくす針灸すべからず初發よ若灸

せむ大蒜をきき冬冬く艾くちひさか
う。又癭疽諸腫物赤く腫ぬる
もの。皮色のほろぬ物も口れちれぬ
るあり。さすく代ちるふは薄き紙を
ねら。腫物の大ふして瘡の上にかき
て見よ。口れ腫熱はよれゆまらや
紙うらまら。のかりとれと口れは
其腫針とも灸ともとる。

○某方

仙人膏 松脂十 甘草粉油にほ

けてせんぬのふて 鹿茸一 仙人草汁

右松脂をやき物入仙人草汁を

より湯煎よしてふりたき

こしかとれさる。松脂の正直と又や

きおに入さる。右の胡麻の油よ
て移り合せ竹をくめて水の口へ入
てかかんと見てよくとれりやあけて
さゆと時鹿茸の粉をへよくかきこ
はせてゆら又仙人草の汁を膏
葉の青くかりまてあへる。

太乙膏 玄參 白芷 當飯
肉桂 赤芍薬 生地黃 大黃
木鼈子各二 阿魏三 輕粉四 槐枝
柳枝各三 血餘一 黃丹四 乳香
沒薬各三 右槐枝柳枝の胡麻油
五斤の中に入せんと。殘十味の粉めて
油の内に入布の袋をこし渣とさる
文火とせん。血餘乳香沒薬と後

小入て又煉て烟ほきて黄丹と加る
又方 玄參 白芷 當皈 肉桂
大黃 赤芍 茶 生地黄 各一

右胡麻の油二斤半まじひす夏あつ三日
冬ふゆ十日秋あき七日かり注りやうを銅
鍋かま入漫火ゆるとせんと茶枯か黒くな
りたる時とき石いしとて渣くずをとりて黄丹
十二両と入桃ももの杜つとて手てとてあすよ
くくくくに合せ水みづとてみま玉
とある軟やわかすす硬かたかぬやふゆるは
青膏 唐蠟たうろう 青世せい比ひ若じやく汁
胡麻油こまあぶら 甘草粉かんさう 鹿角粉ろかく 粉こな 各おのづか三
先ま蠟ろうとやき物もの入炭すすの火かとてころろ
とたきよくとける時とき甘草かんさうを入

其後鹿角粉ろかくを入こて胡麻の油を
入こてゆり合あせけりてめて一ちづづ水みづの
中ちゆうへいままといげんと見みるべしなる
とあるいままといげんと見みるべしなる
とありと守まもりる春はる夏なつの油あぶらを煮かくくと
ゆるべし秋冬あきの油あぶらを少すこしとて
煉あべし油かがんんたた時ときやきのあいあ
けてたたをの汁じゆうを入いふも色いろ青あおく
なるがとあい汁じゆうを入いふも色いろ青あおく
入こ後のちでんどどばば色いろかまるも赤あかるもこ
・膿うみとせくささかさんとややららに
丹たん凡ふん車しゃ粉こなを加かへて付つけて痛いたむもと
正ただ夜よをくし膿と排んとかりるも白しろ
凡ふん光こう明めい朱しゆと加かへ腫物もの痛いたむものく乳にゅう香かう

浸茶金銀花タカハを加タカハ愈さんと思タカハを
靈天蓋榆白皮蛇骨タカハと加タカハ肉を
くくタカハ起さんと思タカハ馬タカハ人根タカハと少
如タカハ腫物タカハ痒タカハくば生白散タカハとタカハうタカハけ上
に膏タカハ茶タカハを付タカハべ腫タカハてタカハうタカハぬるタカハまは
虎皮袋角タカハを少タカハうタカハけ其上タカハふが
やくタカハと付タカハべ腫物タカハ熱タカハせば蛇骨タカハ石膏タカハ
と加タカハふタカハるタカハ

生白散 瓜大生たし膿くろくろ光明朱
右二味合しれし色真紅のごとし膿を
去破ふてて成る針のめとれんみひ
移うけ又膿ある腫物は膏茶の
下い移うけてよ急所の腫物は
とやがる時は巴豆れ油と丹との押合は

セロと思ふ所にぬり其上に膏茶を
とうて半日をとくべ膿いるこ
うはざるあまは用いず方にはは
ひれ皮を取て右れ茶と付蓋を
してよ

下茶 野菊四雌黄三

右二味細末いて湯を一度に用
此茶用て後風をひくぬやうにとくべ一
癰疽腐皮と切ぬ血づる血止ま
は杉原紙に光明朱と巴豆れ油を
てこれ右の杉原にぬりけ陰干し
けこれをことげて付ふなる其上
に茶乃にけや前のおとくあはせも
止まる時は蝦蟇いき巴豆五平明凡三
分

右三色黒やきふして其粉を腫物

の内くすりするころへうりけるなり

洗芥 荷葉 藤胞 忍冬

車前 藜 石菖 桑

寶膏 杉葉 木瓜 槐

井柳 蕎麥藁

右等分せんと洗ふなり

又方 葱根 艾葉 甘草

右三味せんト用ゆ

消毒飲 防風 荊芥 羌活

獨活 柴胡 薄荷 連翹

桔梗 枳殼 川芎

白茯苓 前胡 金銀花 甘草

右十四味生姜三片枣一ツ入せんト用

大便結するは礞石大黃を加へ熱

甚しく痛はよく黄芩黃連乳香

沒薬を加へ上焦あるふは白芷下

焦にあるは桔梗甘草を去る牛膝

黄栢を加へ痰あるふは半夏陳皮を

加へ此薬万腫物諸の風症あるに用

腫物初てたる頭痛寒熱痛

又痛まぬ或腫物出づるも

皮肉筋腫物とかわらんと思つ此薬

數服用ゆべし其症なく有腫て

或ハ散或ハ腫出て其者ハ勝て

計ハ必ず壯かる人ハ一夜一日

に五服で老人ハ二三服で用べし

邪毒表へいで又内よはよく裏へ

補斗

きたるは此茶とやうてわいして
 表よりできたるは此茶とやう
 て元氣を調へ血を治する薬を用
 八珍湯 八物湯 當飯 白芍薬
 熟地黄 人参 白朮 茯苓 各
 甘草少 姜朮を入煎服と
 右葉癩疽氣血虚するもの或は
 とより氣血虚弱なるもの或は
 治と

六君子湯 脾胃と補益痰と
 化湿とさるれ妙劑なり
 人参 白朮 茯苓 陳皮
 半夏 各等 甘草少
 補中益氣湯 人参 白朮

甘草 各等 當飯 陳皮 五
 升麻 柴胡 各 黄芩 五分
 右生姜朮と入せんと用也
 十全大補湯 氣血とも虚し
 寒さるもの下元の氣おとろふもの
 當飯 川芎 白芍薬
 熟地黄 人参 白朮 茯苓
 甘草 黄芪 各多 肉桂 甘草 各少

右煎し用也
 托裏温中湯 附子 乾姜
 羌活 益智 丁香 沉香 木香
 茴香 陳皮 各一 甘草 二 乾姜 三
 右生姜と入せんと用此茶の癩疽陽
 虚寒と腸鳴急に痛大便泄

或飢逆とる治と

荊防敗毒散 癰疽諸の瘡毒

乃初發惡寒發熱甚しく頭痛

傷寒に似たる治と

防風 荊芥 羌活 獨活

柴胡 前胡 薄荷 連翹

桔梗 枳殼 川芎 茯苓

金銀各一分 甘草少 生姜入煎

消毒飲

牛蒡子 荊芥 甘草各二

參苓白朮散

人參 白朮 茯苓 砂仁 山茱

藿香 陳皮 乾姜 蓮肉 訶子

肉豆蔻 甘草

五香連翹湯 膿出後腫物愈

血氣れとら冷ふる葉た多く

の脈沈細虚弱の者手足を食

とほざる者はける者によ

篇竹根 沈香大 連翹中 升麻大

桑寄生 丁香中 獨活小 桔梗中

木通小 乳香小 木香中 大黃小

甘草 麝香少

右十四味丸散とは又いり出

藥小してより煎茶うり出乃時ハ

鹿麝香をさるべし

尤補中益氣湯を用やると膿出

て後或ハ痛之又痛ま守不食一色

悪く熱のさしひき有て力なく

たびま老若男女乃腫物病中よ
る病後すぞ此業かくべからん

○腦疽論

凡腦疽ハ俗に對口といふ腫るる所
同ドからず其源二有濕熱と受け
外より感ぜらるゝの輕一五藏にむす
ぶも内より發するもの重一又其
源五有●心ハ血をほそぐる故に心
胸いさきより入て安かれば火さうん
にして頂上行寒水たうりて腫を
なす也肝ハ筋をほそぐるゆゑ
惱怒て肝とやぶる肝とやぶる時
ハ血脉とこり筋ふさがるて腫と
かな故に頂はよく痛て堪がらぬ

すぞ潰とざる前腫物の色紫
黒と有て堅く腫はびこり破て血
水と流し或ハ痛て膿かゝ此症ハ
肝氣より發するものなり脾ハ肌肉
とほそぐる故に思慮ふくして脾
とやぶる日々に損と飲食胃を損
ト中腕ふさがる氣やぶるす肉裏
に逆して腫をかゝる皮肉くるといふ
も内にて潰すとす口舌のり不食
手足痒し此証脾氣ハ傷より發と
するものなり肺ハ皮毛とほそぐる肺
やぶる時ハ毛孔ふさがる氣經絡は結
びとて腫をかゝる形瘦色淡くう
るひたかく皮膚どしと黄水流き氣

あつく痰を生じ嗽さるんまづ此症
 肺氣やれせうなるなり腎骨
 髓をばさるる腎やぶるこたれ相
 火たりる津液もたれ形やせ声よ
 り腫物乃色むくさたまらる有
 脈なるで數ふく口くもた湯水
 をこのむ此症の腎氣乃皆やうと
 せうくまりのなり

凡治方の腫物の上は大蒜を敷て
 灸すべし百會に發するもの四方赤
 く腫てかき耳にけりなる寒熱あ
 るて痛はやく急に治せざれば毒血
 肉入膿水頭中よりいで逆痰たこ
 つて治しがたし凡頭後生するもの

ハ瘡の口上にひひ根に蜂の巣は
 孔あり蜂窠發と云高く腫あがり
 治しやじ急に托裏散を升麻桔梗
 と加へべし腫て痛とたり口渴さ
 るもの水と好む者ハ痰火濕熱を
 除く茶と加へべし活命散或ハ黄
 連消毒散に天瓜粉と加へべし熱湯
 と好む腎虚の証とす托裏消毒散
 托裏益氣湯と用ゆべし
 八十余歳の女大頭癭と發と初ハ粟
 粒のくはと大椎より前頂までくはり
 外治ハ仕方の先下地ハ砂糖と膏
 茶を搥れ油とやわらうみこたぬる蓋
 膏ハ百合草膏茶と大略愈肉の

二十歳より上の男百會に腦癰發し耳
 の根は腐腦蓋の諸匠死瘡を
 とるるは療どるは鉛の粉麒麟竭の
 粉没薬の粉右三色を腐たる内へい
 上へチヤン膏とるに數日して愈
 ○茶方

白玉萬能膏一名チヤン膏

チヤン百目 蠟 五十 麒麟竭 杉脂 三
 阿仙菜 三 白砂糖 一ウキ 三 松脂 三
 胡麻油 五 右れ油とチヤン脂と入れ入
 煎しころろ其後茶を入れて移るる
 蠟へ入てかざんと見はべし此外瘰癧
 腫たる腫物により良冬く沈るる腫

物上よりあふふより久きころりみはは
 瘡毒のさへ痛むふより腫物温る

秘傳万能膏 蠟 八十 松脂 三百
 チヤン百目 胡麻油 七合 右油とせんト

チヤンとろろ松脂と入れける時
 蠟を食とかんて見て布とくこた也

托裏散 人參 氣虚の人 黄芩
 各二 白朮 陳皮 當皈 茯苓

熟地黄 芍薬 各一 甘草 一
 托裏消毒散 人參 黄芩 制

當皈 酒 川芎 芍薬 白朮 各
 甘草 連翹 茯苓 白芷

金銀花 各七 右れ茶ハ胃氣よるく

外科

三十三

潰し散を或潰し或
らし又腐肉をさし新肉を生じ
妙也腫あり引く痛く黄連を
加ふ頭痛發熱とるもの邪氣表小
あり羌活と加ふ發熱して水との
大便結とる内熱あり人參當飯
白朮とさして大黃と加ふ

托裏益氣湯一切の腫物血氣内

傷を治と 白朮ニ 人參

茯苓 貝母 陳皮 香附子

芍薬 當飯 熟地黄 桔梗

甘草各五 右煎服

活命散 穿山甲 蛤粉を入黄

乳香 甘草節 防風 没薬

赤芍薬 白芷 當飯各一

天瓜粉 貝母各八 金銀花

陳皮各三 皂刺黄色い

右一劑酒一椀と入て瓶入口と封して

いきの出ぬやうにして炭火とせ粗

とろり食の前後は用や上戸ハ二三杯

のこす

黄連救苦湯 一切の腫物と色

て出する時是を用いて毒汗と發と

ふまよ

葛根 柴胡 赤芍薬 川芎

當飯 連翹 桔梗 黄芩

羌活 防風 金銀花 甘艸

右十三味等分煎服と

○乳癰乳瘡 婦人の乳

凡乳癰ハ厚味ヲ食シ或ハ氣鬱結
して胃火乳房ノ上ニ乳汁濁リ
凝テ核トナリ腫子メナリ或ハ
肝經ノ氣滯リ乳孔ニ塞リテ痛
テ甚ク久クニ時ハ乳岩トナリ乳
岩ハ百死一生ノ症ナリ先乳頭腫
痛マハ葱ノ白根ト熱灰ト入レ
テモよく慰ベシみろに針とく
ずり乳房をやや初ニ蒜と敷
て灸とるも有・膿妊婦ノ乳病
と内吹とハ先鹿角を粉小して酒
ニ多く用ゆべし・乳の子有婦人
ノ乳病と外吹とハ百齒霜

即乳ノ丸ト雄黄を衣ト七粒用ベ
汗出て愈若汗ハでんバ又七粒用ベ
神効あり・又方深乃上の微塵と
酢トミケル又生地黃乃汁を
けてとるハ妙也・乳風ハ水魚
ノ焼ニ榆白皮同各粉小して水
付テ・乳草ハ赤白仁を粉小して藍
汁ト付テ妙ナリ又水魚ハ腸を其
まろて付テもよし・産後ハ児
ノ口氣に吹きて乳汁通セバ腫痛ハ
手ヲとりみろハ乳と出シ天南星
とセンド温めて付テナリ・見乳
ノ疔ハ乳汁とこから腫痛に
人ハ吃セテ通ゼザレバ癰トナリ

外科

三十五

乳頭腫物つづると妒乳とわらう黄
連胡粉膏と付へし。乳頭破と裂
け或は乳と吹に血かまればあつかり
裂開きおほく痛入し丁香散を用。
凡乳核久しく内は脹て痛く外腫て堅
く手もほろれぬと乳癭といひます
瓜蒞湯を用也或は潰れんとて兩乳
の間は瘡つづるとは内托升麻湯とを
小潰れとるふ十宣散益氣湯の類
と用也へし。乳核其子の大きぬく
痛まず痒みならず五七年して外腫
て紫色に黒く内ややく潰れたら
を乳癌といふ潰れたる汁いで膿流
まじ瘡の口より付てあつて次第に

口廣くわらてかき山石穴を見やう
かり四半以後は婦人の治り物下
て大事の症かり氣血とら盡て死
と治方へ白百合草の油一五 椰子油一五
白蠟見合ふ 右の菜やうふかや乃
ぎ煉合せ乳より付て毎日付へし乳
房れかゝる次第にやうふかり南
濁水のうみ乳汁はなつていそ愈也
一女蓮乳癭つづる常の乳癭の如く口
開きてややくいあんとして蓮房れやうみ
穴の痒がる白膏菜に鉛の粉を全
く煉まてはくべし次第に肉生して
愈かば愈膏菜と赤膏とほけて
全く功を得たり。四十をうの女乳

癌と患ふ切發かゝる有りて次第に
大ふかり一身苦く五三年もかゝる
こゝに此腫物やぶれて愈うこゝに血
熱をさへし結核の解散の劑と用て
療と此症と見誤る膿たると針と
とをいへ忽ち死と口を破らざるやうに
て血熱をさへし痛とやち氣順環とる
やうにして石膏葉又ハ粉葉たぐは油
とととまゝのぐり・乳癌の症ハ十
六味流氣飲ハ單青皮湯と用也且
虚とるもの清肝解鬱湯と用也年
久しき乳の下に穴あけ膿つる乳頭
を裂きよるハ秋の末の茹乃花と陰
干ハと胡麻油とととれてはる或ハ

秋茄子の裂け開たるハ陰干して霜
とほ粉めて水とてとれたけは・乳
核ハ牛皮膠を火ととれた腫の赤不
とふ青き絹切と切てひろげ付て立処
にさしあう・乳癌結核ありとほよく
痛を散ハ熱毒をさへしハ蒲公英
酒を用也・乳癌とやと後石れとく
硬とくらとさるふは陳皮半夏右二
味粉のて丸と青黛と衣と菱膏
花をせん飲とるは三四十粒用の酒と
てのともは・男子の乳病ハ腎虚ハ
血といき上よめぐらす痰ととこり核と
生す凡兩乳腫ふもの十六味流氣飲
と用也左の乳痛ハ八珍湯ハ山梔

子牡丹皮を加(或)清肝解鬱湯を
のんに風熱ある龍胆を炒て五分加り
不食のころ多き胸脇の頭痛
小便赤るる六君子湯小川芎當飯
柴胡山梔子を加り潰た痛は
十全大補湯と用也

○某方

牛房子湯 乳癰乳疔乳疔等か
はる腫痛古き新き
潰さるる用也
陳皮 牛房子 黄芩 山梔子
金銀花 瓜蒌根 皂針 連翹
天瓜粉 桑白皮 甘艸 柴胡
青皮 右生姜二片酒一盃入也

ト用也

瓜蒌湯 乳癰はま潰さるる小は
瓜蒌 當飯 甘草 乳香
没薬各一 右水と酒と等分して常
の如くせんト用也

内托升麻湯

葛根 升麻
連翹各五分 黄芩 當飯 炙甘草
鼠粘子五分 肉桂二分 黄栢二分

右水二杯に酒一杯入せんト用也

十宣散

一名内補散
人參 當飯 甘艸 粉炙川芎
黄芩 塩制あり 防風 厚朴 炙甘草
硬桔梗 白芷 肉桂
右粉にて酒と用也

十六味流氣飲 川芎 當飯

芍藥 防風 人參 黃芪 木香

肉桂 桔梗 白芷 枳殼 厚朴

烏藥 紫蘇 枳殼 甘草 各等

清肝解鬱湯 陳皮 白芍藥

川芎 當飯 生地黃 半夏

香附子 各八 青皮 遠志 茯神

貝母 蘇葉 桔梗 各六 甘草

山梔子 木通 各四 生姜 三片 入

黃連 胡粉 粉膏 黃連 二兩 末

胡粉 水銀 一兩 同研 吹入血乾

右皮につみりて熟し和合して傳

丁香散 乳頭破裂或ハ兒乳と

用也 丁香 一味と末とて付

乾バ津唾に調て付不

蒲公英酒 蒲公英 忍冬藤

右二味對て白水酒と入煎ト查を

去り此と飲其查と搗爛し患處

白膏 百八十三丁ゆふ出

單青皮湯 青皮 一味 煎ト服

赤膏 百八十三丁ゆふ出

○肺痿肺癰

肺痿ハ年久く咳嗽を熱極して

肺火かゝりて甚しき時ハ腐腫て膿

血となり癰となる先ハ知る症也

問茶に黃豆根を粉にし水と飲し

問茶に黃豆根を粉にし水と飲し

問茶に黃豆根を粉にし水と飲し

問茶に黃豆根を粉にし水と飲し

ひろくろの肺癆なる飲てうけざる
 の癆にあらず。肺痿は寸口の脈數少
 て實咳をげく出寒熱自汗とるは
 知母茯苓湯。麥門冬とて用ゆ
 又脈微緊なるはいまも膿ありず緊數
 なるは膿ありとるべし脈短めて濇な
 るもの生る浮大なるは死と。年久し
 く肺焦て咳甚しく口咽かまきて胸痛
 と膿血を吐くに梗米粥のどくたるは
 死と麥冬平肺飲と用べし。すてに癆
 とならんとすうは紫苑散。金銀花
 と加へ生姜と入せんと用ゆ。火氣さ
 かり入參平肺散と丸茶と。二合
 下とす。り膿ありて息ほひ腥く

てかりへけき嗽膿水を吐めよ
 消膿飲を用ゆ。り咽痛ひよめい
 甘桔湯と用大便結とるめ太乙
 膏と丸とて白湯ふて用ゆ。又
 胸と脇の間に腫物れ口開咳とる
 にあざひて膿いつる者は大氣血と
 補ふる血れを以め梅豆湯を
 用ゆ。咳やはど胸中痛痰に血は
 膿出痰の白ひとさる肺癆かる付
 菜の方小麻仁。野菊花少ころの
 南蛮柿。白角豆。右五味粉
 焼酎とそりやれと煉合を麻
 の實油十五入てう煉合を胸乃痛
 び服にほぐべし

○ 藥方

知母茯苓湯 知母 五味子

人參 薄荷 半夏 麥門冬

柴胡 白木 欬冬 桔梗

白芷 黃芩 茯苓 炙甘草

兩川芎 阿膠 右生姜七入

食後に用也 紫苑散 紫苑 知母 貝母 各一

人參 桔梗 茯苓 阿膠

甘草 五味子 右生姜八煎服

人參 平肺飲 桑白皮 知母 七

甘草 地骨皮 陳皮 五味子

粉茯苓 青皮 人參 天門冬

略 右生姜八煎服 膿血あり癰とわんとしてすのふ

紫苑と加ふ 消腫飲 天南星 生地黃

知母 貝母 阿膠 川芎 白朮

白芷 桑白皮 甘草 天門冬

射干 桔梗 薄荷 杏仁 半夏

紫蘊 防風 右生姜七片烏梅

一入せんと用也 甘桔湯 桔梗 甘草 陳皮

川芎 黃芩 柴胡 玄參 各六

羌活 升麻 葱白 一本煎服

梅豆湯 大に氣血を補ふ

黑豆 烏梅 薏苡仁 水で煮

阿膠 蒲黃と入るべしとて用也

大乙膏 廿五丁り出

心癰 兩乳の間より

凡心癰といふは兩の乳の真中に出る豆粒の赤く三四日にたると早く療治せざれば腹に入れて十日の間に死する症也外へ出ると治しやと内へ出ると治しやと此症小便澀ふもの清心散大便結せば内固清心散を用べし。若胸乳の上に出るとは心火の熱也急に治さざれば又心の上の穴あはれは糸のたつるとす。心漏といふ鹿茸毛附子つみま塩花石せき分粉ぶんぷん束肉そくにくを丸まと空心に服とべし

茶方

清心散 遠志 赤茯苓

赤芍薬 生地黄 麥門冬

知母 甘草 右姜東せうかうとう入煎

内固清心散 辰砂 茯苓

人參 雄黄 麝香 白豆蔻

菉豆 皂角 朴硝 甘草

右等分細末と蜜湯と一錢と

送下と

○腸癰 腸の下

凡腸癰はかゝる肝氣肝火盛に虚中熱ある小因て發する也先を梔子清肝湯より誤て熱劑を用ひば虚熱とたそけて内をやぶる瓜蒞

外科

四十一

湯なるは鬱と散と火と下とや
にすべしとてに瘧とたうたるは托
裏消毒散に青皮香附子と加ふ膿
ある針して口と開て付菜すべしとて
なぐ針をふくさして内膜とやう
へりす腫物やぶきて後八珍湯と牡
丹皮山茱萸澤瀉を如上虚したる小
へ十全大補湯と用外治は太乙膏置
しごとく腎水をうるすやうすべしとて
もそ後たは汁とて出て内葉相應
とぬ者へ死症と知べし

○菜方

梔子清肝湯 牛房子 柴胡
川芎 芍薬 石膏 當飯 黄芩

山梔子 牡丹皮 黄連 甘草

右生姜三片入煎下服と

瓜蒌湯 乳癭門と出 世八丁と出

托裏消毒散 世三丁と出

八珍湯 世八丁と出

十全大補湯 世九丁と出

太乙膏 世五丁と出

○胃口瘧 乳の上胸

凡胃口瘧は寒氣よれとて熱胃口
にありたり寒熱このやうす肉腐て
氣とてある故に胃脈沉細ふして陽
氣上にわがす寒熱たうして初發は
瘧の如し咳出或は膿血を吐かう
若脈洪數なる膿ある急に排べし

或の脈違緊なるの瘀血を下し菜
と用ひべし治方大なる癰疽に同し專
ら大射干湯と用ひ若痰ふさがる者の
甘桔湯を用ひ大便通じがたる者の
太乙膏と丸と用ひべし若小便
通せぬ又脹滿のごとく不食とるふ
は三仁湯又膿出て後不食せば補
中益氣湯と用ひべし

○菜方

大射干湯 射干 山臈子
赤茯苓 升麻 各二 赤芍药 五ト
白朮 五ト 右水煎蜜少と地黄の汁
とと入用也
三仁湯 薏苡仁 五ト 冬瓜仁 二ト

桃仁 牡丹皮 各五分 右煎し用也

甘桔湯 四十二下り出

太乙膏 廿五下り出

補中益氣湯 廿八下り出

○腸癰 小腹臍のあうり出る

凡腸癰の湿熱瘀血皆小腸に流し入
て小腹重くはるこれを按せば痛と
有小便淋病のごとく或は汗出さむけ
たら腹腫ふやうに絞ぐるごとくと鳴
甚しき臍のうぐら瘡出或は臍よ
り膿出又は大便秘下るから脈遅緊
なるいませ膿なり大黃湯と下
とぐし小腹痛と大便結し小便是
病のごとくなるもの加味大黃湯と

やりげ下とて... 腹中痛も張満不食小便とる
 に刺さる痛むは薏苡仁湯を用
 脈數ふそ外熱なく内はさう
 なく腹をうて按ば軟くあるは内虚
 て冷痰ありあるなりすと癥とる
 らは牡丹皮散を用や又穴の上の
 小便通せぬ膿の滞なり牡丹皮散
 して治す若膝より膿出て面色白
 くはるる者氣血の虚
 かり八珍湯、黄芩肉桂を加ふ膿
 下り脈より不食や十全大補湯或
 は八物湯を用べし此疝小腸の分に出
 たるは治さず大腸の分を生じ肛門

れちく出るは治しが肝門やふ
 るは死を潰て後膿腥して虚熱
 有て不食とるもの死をたむ
 腹癭の療治は同く玉紅膏と付べ

○茶方

大黃湯 大黃 朴硝各一
 牡丹皮 瓜蒌仁 桃仁各一
 右煎服と
 加味大黃湯 大黃 牡丹皮
 桃仁 澤瀉 車前子 茯苓
 朴硝 川芎 當歸 防己
 貝母各等 右煎服
 薏苡仁湯 薏苡仁 瓜蒌仁各二
 芍薬 牡丹皮 桃仁各二

右煎服

牡丹皮湯

人参 牡丹皮 天麻

白茯苓

黄耆 木香 當歸

川芎 肉桂

桃仁各三 薏苡仁

甘草各三

右煎食前に服

玉紅膏

百卒三下出

○腹癰

凡腹癰の膏を常以多く食一
或ハ七情の鬱火さるに脾虚一氣
こころり小腹痛てく身の色變ぜ
熱有て或ハ脈遲緊なるは膿る
一四君子湯に川芎白芷當歸を加
又ハ托裏散とす。●若腫やうふて
色赤く或ハ脈洪數なるハ陽症とて

膿たから托裏消毒散の膿あり
ても腫物潰へるハ氣血れ虚なり針
ふせてさるなり腫たぐ痛はよ
きハ邪氣を先活命飲と用ひを瘡
の上ハ大蒜を敷灸をして其毒氣を
去りて後ハ托裏散を用其氣を補
ふる治方癰疽の如し玉紅膏を
とす

○某方

四君子湯

人参 白朮 茯苓各三

甘草一

右生姜棗入煎服

此藥脾胃を補ひ又氣虚れ腫物血を
出し又吐血便血にうこく血とれさ
ひら乃妙方なり

托裏消毒散 卅三丁りふ出

活命飲 卅三丁りふ出

托裏散 卅三丁りふ出

玉紅膏 百九十三丁りふ出

○臍癰 臍の内

凡臍の上に瘡を生じたりら出でる
まらざるは枯凡 白龍骨

右二味を粉めて臍の上よりぬりて妙也

一男子臍のく腫て久し痛むに流

氣飲を用ひ針して口をのけ膿出る

四五ヶ月やはず後蒜と敷灸と

して五香連翹湯を用てよし

凡臍下癰は紅綿やきそ灰 黄牛糞

やきそ灰 乾胭脂 各半 腫物あらは上

ぬりて乾かすは胡麻の油とて

付るやう

○茶方

五香連翹湯 諸瘡初覺て二

日便厥逆咽喉塞寒熱とら以治

沈香 木香 麝香 桑寄生

連翹 射干 升麻 丁香

獨活 甘草 各 大黃 木通

乳香 各一 每服五匙水二盃と

八分に煎下温服を利するは度と

寸若利せざんば再ひ服すべし

○臀癰 足の内より右の方へ

凡臀癰は大腸膀胱經に生じ陰虛湿

瘡といふやう

熱の疔なり多血少氣といふも血の來
ふこもしかり初発に膿をかき去る物
腫物の上は蒜を敷て灸ととて次
は葱の白根をはききたらじ火めて
蒸て腫物の上を熨とて冷へ取
てとて膿とをこれ熟してやぶらざる
の針とて口をひくく膏菜の
太乙膏雞蓮膏を付べ。若膿と
るさんとせば内托羌活湯人參敗毒
散を湯用べ。若痛とほよく活
命飲。若腫かき痛むは托裏消毒
散。若内傷房事れ疔腫物左右に出
大小便通せざるは八物湯に黃芪車前
子牛膝小茴香などを加ふ

廿歳より上の男腎癰出初痛甚し
乳香没薬薑陸右三色粉ふして黑砂
糖とせん。其内ふ入てとれを蒸と痛
次第よやぬち膏と王子の黄乳
香を粉ふして板の上とよく押合と
付べ膿あると針をさすべ膿出て
愈も皮肉生とて後かきと付まへ愈
五十余の男初は疔の腫物のやうと
次第に大に腫と五日余にして色赤
痛はよく針をさし膿とぬき又其後
口ニのれ薄き血出てやほと治法を
白膏菜と下付上はチヤン膏を付
て全く愈也

醫痘とてハ醫癘よりハ初ハ粟粒
やふてこなるを痒し内ハ虫ありて抵
いたまら出菜ハ防風膏と付下

○菜方

防風膏 硫黄 旦凡各各酢と

加へ蟻と押合せ付てす

又方硫黄と粉め紙の上にいひろけ

てこは紙まねて紙継とて胡麻油

ふひは火とてぼく菜油とてす

又方 桃仁七 大風子一 硫黄 四分

右粉ふて胡麻油とてす

てす

雞連膏 雞蔓 蓮葉

青木葉各廿 右三味粉めて胡麻

の油一升とて煎て査とて油の内

へ松脂唐蠟黃丹各五 入火とゆくと

熬て膏菜に経るかり

内托羌活湯 羌活 黃柏各二

防風 當皈 藁本各一 肉桂 一五分

連翹 甘草 蒼朮各五 黃芪 湯水

一五分 陳皮 五ト

右水と酒と等分し入火とせんと食

前に用る

人參敗毒散 廿九丁りふち

活命飲 卅三丁りふち

托裏消毒散 卅三丁りふち

八物湯 廿八丁りふち

太乙膏 廿五丁ウホウ

千ヤン膏 卅二丁ウホウ

白膏 百十三丁ウホウ

○懸癰 陰前後より

凡懸癰は足の三陰虧損ト濕熱のりま
りて穀道の前陰囊の間に生じ区
死の甚しく痒く形は松子の如く後
蓮子のやうめて數日と桃李乃ごとく
赤く腫まやめきそやらまに破さる
後かろきハ漏とかり重き内はて死
と甚しきハ大小便此穴より出たり
初發濕熱とこわりて痛く小便さる
ふ活命飲に大黃と去して用。若膿
と潰へざるハ八物湯。若膿たるはきさふ

針して玉紅膏又ハ虎珀膏を付し
或ハ十四五日と甚しく腫て散りて
ハ托裏消毒散に穿山甲皂角刺と如
よのどく破るやろ。若腫高く光膿そ
破るハ急に針しては消毒飲と食
前に用朝ハ六味地黄丸晝より十全大
補湯又牡丹皮澤瀉を加へ用白。若血
虚の者ハ四物湯又人參白朮を加へ氣虚
の者ハ四君子湯小川芎當歸と加し
久く漏とかり者ハ八物湯に黃芪肉
桂と加し誤て寒冷と用はるる
門なる水と出痛く或ハ痒く或ハ血
と出すハ石硫黄五氷片一右二味と
末しすハ金銀花 蘄艾 花椒

槐花の四味をせんト是を洗ひ後石
粉菜をあらばし

○菜方

四物湯 當飯 熟地黄 芍薬 二

川芎 右煎服

六味地黄丸 地黄 山茱肉

山茱 各四 茯苓 牡丹皮 澤瀉 各三

右蜜丸空心鹽湯下と冬酒を

服とを

十全大補湯 廿九下り

八物湯 廿八下り

活命飲 卅三下り

托裏消毒散 卅三下り

消毒散 廿七下り

四君子湯 卅二下り

玉紅膏 百九十三下り

琥珀膏 琥珀 木鼈子

木通 肉桂 當飯 白芷

防風 松脂 朱砂 草麻子 各

丁香 木香 胡麻油 丹 十四

右の木通 肉桂 當飯 白芷

木鼈子 防風 草麻子 丁香

木香 九味と胡の油と七日に其

後でんと七絹せよくら 琥珀粉

松脂辰砂丹 右四味油と膏菜に

移るなり

膏菜れ方 唐土樟腦

龍腦 白蠟 油移り加減あり

總じて懸癰初發の療治痛と止ら散
そやふすべし温菜と付てうはる様
にせればかつていふによくなりて血
熱をあんにあり腐らして遂に治
かたなり

○囊癰 陰囊に生じ

凡囊癰腎癰の症は肝腎の二經に
屬し陰虛濕熱より發するなり小兒
ゆゑ又此症あり或は積或は虫氣又ハ風
より生ず其の治法はさびくふらして
總じて此症腫て潰後陰囊の内へ入
るハ大事なりやをほめて疝氣とほ
て熱菜を用ひて治法ハ陰を補
むハ濕熱とてさびくふらして又水疝と

皮膚の色光そ熱なく赤かす腫痛
時より陰囊の内へ水ありする針を
して水気をさるべし内菜ハ十全大補湯
に山茱萸菜黃牡丹皮澤瀉を加へ付菜
ハ太乙膏雞連膏などみ宜し
若陰囊腫て大小便通せざらば白芷
二兩 白朮 桑白皮 木通 各五
分 生薑湯にて二五分のほかりに用
ひべし小兒ハ五分なり又腫痛熱は
より膿はくそりのみハ滋陰内托散と
用ひ若膿潰へ皮をさし陰囊の内筋
ありて陰囊をさして腐て玉莖下
の皮囊より若くは玉莖半分のこ
ろに托裏散と破胡紙黃耆

五味子 兎絲子を加ふるハ補中
 益氣湯に人參 黃芪 當飯 白朮
 を加へ大氣血脾胃をときさるハ付
 茶は白蠟膏とほくべし十日余
 てもるべし陰莖れらても害な
 かりたり・陰囊の西きよハ蒼朮
 紫蘇乃せんトゆそあひてよう
 ・痒くしそ抓らうたましる
 つるふハ黃連 細茶 鳳凰窠と粉
 いて木油ふてこけてあうてよう
 ・腎囊に瘡を生トゆく後
 水を出してしつゝ川椒 蛇床
 子 荊芥 槐柳枝 茄根 右等分見
 ト其湯めて囊をいしあひて

後に硝の粉とゆるだし・陰囊
 兩方に瘡と生ト湿すそくるんぞ
 うゆるは牡蠣 黃丹 各一 枯礬 二
 右三味粉にしてぬるだし
 小兒れ外腎腫あは牡蠣 乾地
 龍 右粉めし唾とこけてほく
 熱くるあは王子の白とこけて腫
 たる所付ふ・又腫はみ熱あふハ蚯
 蚓の糞と甘草の汁とこきて付ふ
 菜方
 滋陰内托散 當飯 芍薬
 川芎 熟地黄 黄芪 各一五
 皂角刺 澤瀉 穿山甲 各五
 右煎ト用ゆ

外科

五十三

麒麟圓 付茶なり

麒麟竭 蕎麥粉 噌丹

茴香 芭蕉各五 黑豆 地黄各半

右つづれり割て水三升入て一升とせ

ト布してに査をさうて又煉はあ

げさる小蜜少入置馬糞をせ

其汁をこらて付る三日に一度

なま味曾して前陰とあひ幾度

付べし又此茶を大豆粒をど一日

三度芭蕉の根のせんと汁を

又洗茶 荷葉 車前子 温青

右等分せんと洗ふる

十全大補湯 廿九丁り

托裏散 廿三丁り

補中益氣湯 廿八丁り

太乙膏 廿五丁り

雞蓮膏 四十八丁り

○疔疽

凡疔疽の全く是飲食の毒氣よ

つて生じ或は自死する獸と食し

毒と中蘊で發するも有或は大風大

寒大暑大霧れ邪氣經絡に注り其

毒より發するもあり尤疔疽の外科の急

症から速ふして朝ふかうて夕を待

ざる有又三日五日乃至一月半月

して死るも有とく危急の症とある

べし内經小曰白疔は右の鼻に生じ赤

疔は舌根に生じ黄疔は口唇に生じ

外科

き目の下眼胞やうき米くみ出る
ひきなり痒くこまらうわらうこたひ
吐逆し手足ふる痛く寒くなり
熱くならひきまかりたう。肺經に發
する白及疔と云初泡のおく色
白し瘡の頭が根突ら破る脂水
流ま痒くくされやとく陷まやとく
重き腮損で咽焦ま肌熱し咳しそ
痰膿を吐鼻息急なり。腎經に
發する黒唇疔とて耳内胸腹腰
脇つづれ肉のやうなる所を生じ
初泡の下紫に黒く有毒皮肉に
とどろびて痛く骨小こころ重き手
足の色青く紫かりひびたりて氣

ちげと目瞼あつて出る以上五色五
疔といふ此外十三疔あり。一麻子疔
頭黍の如く少赤く痒く多し。二石
疔甚く色黒豆の如し。三雄
疔胞頭のぶく黄色よりて灸れり
蓋はるなり。五火疔前よりる。
六烟疔色黒く白斑なり。七は三十
六疔黒大豆のぶく四方赤し毎
日つげ出て十疔にかり三十六疔出
る者死す。八蛇眼疔瘡の頭黒く
皮浮て小豆のぶく。九塩膚疔大
匙のおく四方皆赤く。十水泉疔
大錢のこく中に錢孔有頭白くち
黒し。十一刀鎌疔とてひろがりて薙

の葉乃大さのおびく・十二に深瀝疔
肉黄虫外くら針をくても痛まず
黄から飛へ痛むかう・十三に牛狗疔
初へ胞のおびく・瓜どもやぶまじ

凡諸疔初へ上に膿少く有てさうて
とれ硬くともどかり發熱するあり
癰と同一事なり疔痕左にあれば左
半分かまはど其出する方の身をそく
ひのかり面は出するふい糸をぶら
心経より出る疔多きゆかり手足の
疔も寒熱かたぬえ糸をば寒熱
ありふい糸を糸といひ疔とみまら
針を剃刀で七瘡と十文字にたらし
て其中に古綿のやうなるもの有これを

す・其のわりの青膏を付ふ一夜
内悪肉さうて白筋あらば其肉を
そくみ切て又青膏を付ふかり毒肉
はよく丹凡を加て付るそれを腐
ふとに膏葉を付て愈とて疔を切
はとれそりれ其毒腹に入て死する
火疔へ切らうて後糸を青膏に白凡
丹凡を加てさうてさうて糸の青
椒散黒梅散を用ひてさうてさう
す遠くせよ宜し疔毒さうてもあ
へ糸粉葉をひきり其上に愈膏葉
をさうて俗に頸疔といふ別治る
五疔十三疔其外症のありと

いも但寒熱風濕虚實を見分て
專要なり ○秘傳の灸法は
之と頸よりけて前より乳の上順に
て端をそくして切其志を咽の骨よりけ
脊へほしちこれに骨の假を点して
又骨をそくしてみて両方へ五分づい
らきて点するから口傳の骨のきこを
灸と魚しこを頭面に出る症のい
き灸の妙法なり又手足疔の腫物
筋をわけて見て上の方と腫物より六
七寸上の方と灸とべし但二三壯を
宜し ○又熱甚しくて堪ひた冷
と方あり其方の桶のなかに輪を
穴をあけて桶をかけて腫物を
の物をあてて其上へ水をゆきあせ
る冷とかりかすの熱疔の付
白仁寒水石又石膏をなごかして
水とそり鳥の羽を度々ひく
内菜毒氣浅きは大黃升麻湯九珍
散かた宜し重きは大香連翹湯
を用べし凡疔疽の寒熱と見ま
ふに口傳有先青泥丹を付て見ふ
熱疔の頭よりくるくく冷疔の廻
りよりゆるくとれとゆるくかり

○菜方

追疔湯 此菜表疔多きなり
羌活 獨活 青皮 赤芍药
防風 黃連 細辛 甘草節

知母 大靛葉 升麻 山梔子

石膏 人中黃 麥門冬 木通 各一

右竹葉十枚燈心二十根入せんに用也

大便結せば大黃を加ふ此茶の針灸灸ら

として後裏に入れてしひひききと謔言と

つめ用也

東毒金蘘散 爵金 白芨

白斂 白芷 大黃 各四 黃栢 二

輕粉 五 菘豆 一 右細末とら酢めて

移う四方にわらわら夏に蜜を移り

てぬる也此茶の針灸灸して後餘毒を散

して腫るものに付る

塞金丹 明礬 四 黃丹 二

銀の釘匙とて火とゆりて

紫色にあらなる時腫物のほらりと針

めて破して唾を移りて切々付る

腫物をかぬやふとぐらひて潰

ふなる若潰るといふ人言 雄黃礬

砂 各五 粉けて付べし 十三疔を治る

事神のぞく

外治輕き者の蟾蛛を粉めて白麩

と黃丹をほせ移う合せ麥粒ほどに丸

針して腫物を破る其わく一粒入置

と妙なる重きものよは

提疔銃子 雄黃 朱砂 各一 青塩

砒霜 白丁香 輕粉 斑猫 五ト

蟾蛛 麝香 各一 革麻子 二十

右粉みして黃蠟をこらひて移り

梧子の大きにわらひし針を疔の頭を破りて粒を疔の上へ付る。又四方を針でさし血をいじり膏菜を付べし。

旋丁散 巴豆仁五 白姜蚕

輕粉 硃砂各三五 右粉めて用

此菜疔瘡手足生ト其いさひすじなれぬたまひよれ酢してあ菜と移り疔の上よめて紙で蓋して置内菜へ内托消毒散をこ用かれその疔よげらうりて出ふなり

青泥丹 鹿角 青麻 各々

右二味粉にして移りて付る也此燕

疔疽其外腫物寒熱を見ず時付ふなり膏菜へ太乙膏万能なり

青膏 廿五丁ゆふ

○風毒 附 風腫 風毒腫

風毒風腫風毒腫此三ツハ相似なるものなり。風毒の症は肉の厚き所は出るものなり。凡氣鬱より發して初は傷寒のぶくいて甚た頭痛發熱。後には腫物赤く色付て潰る也。此腫腹に出るとは忽ち死する也。風腫は尻又の腰或は外股へ出つ何事も肉の厚き所は出る者也其かから浮てはよく痛き存或は痒く色もはげなり

くもくかくちるく痛と久く病者也
 ●風毒腫の肩の節間に出る者也腫
 ぼりたの肩のほり或は足の節々
 出る其の初少く骨痛とて
 次第に腫まあがりて赤と付後
 こ潰ゆる者也●凡諸腫物に皮肉骨
 上中底の三つあまも別して風毒
 の浅深あり先初傷寒のどく寒熱
 頭痛とてあがりまなくつみて平々
 と腫る者には消毒飲を加減して日
 一夜に五貼ごう用ゆべし寒熱さ
 て痛一所はあがり高く成たり
 いよかかんて内茶を用五七日日
 に寒熱さうて大なる腫散とてし

中分ふ毒氣残る痛は先針とて
 血やうとも出しては四五日の内
 ぼりひのやう上平らうとも色ぼり
 は押てもるべし指のあて一度みり
 ながは膿あるやういふ針をさう
 膿とぬき其あふさうとて日小三度
 ぬきとぬきとさうかゆべし枚原を引
 きた其上に粉茶生白散といはるか
 けてまうのうらと茶と付てますべし
 大方に膿をぬきて後膏膏を付
 べし三日たして針口ひろく肉くわ
 べし其時愈膏茶を付べし風毒乃
 疔は灸大し悪し押茶を茶も早
 く付べし内茶の初發より判防敗

毒最時により加減とて一服出て後
十全内補散 黄芪 人參 湯と用也
前と云て風腫やく似たる疔み
てうろき者なり桂心と粉の南榆皮
と三分一粉めて加へ付へ内葉上と
同ド事なり。又風毒初發頭痛一
てたへさきん痛く止るべし下
葉を用也下葉の方 雌黄 野菊
冬七 右二味粉ふして湯と食前用
ゆ用いて後いへるやうにとへし是
と痛くはるる時へ野菊花 茨
花 這子草 大青葉 鹿燒草
角豆花 右六味又水三升入前
酢一升五合燒酎一升五合入此汁を

取木綿にひし朝夕二度で温たぬ
二反ものふかりあまるともわら
これに大葵葉 麻仁 野菊花
コロハ 茨花 大青葉 各等 大葵
根 右れ葉日に少く干手ふてよ
くのみさる水一升を合へ前ト
は免糊のやうに煮かちてチヤン高と
移り合せ付るなり其上を酢と水と
合せ少くあて免右の付葉の上より引
て木綿と巻く是とさうじりらる
するなり若うみ多る時針をさして
其うみとぬきあてかちやくと付る也
内葉より十全内補散 黄芪 人參 湯
に宜しきかり

三十余歳の男腹大腫二十日余に膿
 なる針をさすはうみやく色くすは血し二
 升余出て愈る風腫なり療方ハチヤン
 膏と付王子の黄に薑陸小麥れ粉
 を入て移り合付けうむなりこそ針とさ
 一膿出て愈膏葉を貼て治を
 五十余歳の男尻へ大腫大熱有て
 十二三日ふて膿じ腫物乃色紫なり
 針をさせば血はトとれ膿一升り出て
 十日り経て愈也是も風腫也此治
 療石膏小麥の粉と水と移り合せ
 四方をせれば初發よりチヤン膏を付け
 後に赤膏を付るなり
 四十八九才の男両足に初發熱甚

裂てうみ出る初發より治療
 愈ふこれハ風腫なり是ハ堅き
 チヤン膏と後ほで付るなり總して
 風毒の疔ハ膿となりたる時見え
 らハ深く針をさし急はうみとぬく
 時はあつらう膿のぼるこたへうみ
 こぼりかき

○ 葉方

十全内補散
 黄芩各一川芎
 防風 桔梗
 酒少入てせん用
 黄芪人参湯
 當飯 赤芍葉
 當飯 人参
 白芷 桂心
 厚朴各一甘草五

外科

地黄 川芎 人参 桂心 茯苓

麥門冬 黄芪 各三 遠志 五下 甘州一

右生姜壹分ツ入此二方の膿出後

は用ゆりなり

消毒飲 廿九丁ゆふ。

青膏 廿五丁ゆふ。

荆防敗毒散 廿九丁ゆふ。

赤膏 百八十三丁ゆふ。

○附骨疽 附 鶴膝風とれ股の間

凡附骨疽の氣射虚してよる人寒

湿れ邪氣骨小入て生じる疔なり或

夏秋夜氣をうけて伏し寒湿

りさる初發の寒けさら發熱

邪に似たり次第に臀股筋骨痛

して熱せば赤く寸痛と骨

る甚しき伸屈し難く

す日久くちと陰變とを陽とあり

熱甚しく肉さうて膿と

三因方に白虎龍尸歷節風乃

三つの相似たりといり白虎と

甚しくちて虎をこの嘴と骨

たらちちるるのりい各は龍

尸歷節風の白虎と比と

少し輕

此症初發古方に青皮甘草

せん下用の或は大蒜を敷灸

し七日を過て灸瘡の上

三稜の針

みて一寸をくして膿とぞふわり者い
 下なら火針とさして内と潰やさげど
 凡附骨疽の疔よりた人の尻の太肉は
 せかり小腹やもくろり又陰囊もを
 かつかり先の風毒腫は似たる者也
 但し風毒は皮肉の中はゆるゆる腫ゆる
 かり附骨疽は骨にほきこるゆるゆる
 腫ある事は初に風をひきこるゆるゆる寒
 熱ありていつらふ尤内股の筋骨痛を
 身ごとくすこかりかたし脚氣な
 どのやふも見ゆるゆるは菜らびひて此
 疔よたる事あり膿たのまこと口あさそ
 愈びて内外療治らひぬまじせの
 間こまらるる也初發より内葉と

用まばやがそ愈て疽にかりこは。此疔
 初發は寒熱ありて腫あがり腫と日
 のさふもなみみろふとれて身体手足
 赤らなりとらみ痛と骨にほくめい
 あり又腫所も熱せば赤かすうみ
 らたるもあはじ。口あはて後出るう
 ららるるして水れやうそ白ひくこく
 痛ももやます腫もひるす日々にやせれ
 とらへ食とほす口うるらやほらるあ
 り死とるかり此疔かた者い重いとふ
 とら治とるかり

○菜方

雷火神針法 艾葉三丁香五
 麝香ニ 右れ三味と合してのみやまら

け紙にはき指の太さのどく長五六寸
けで火とけけ火のある所と痛む上に二
三針を灸とく七日を過て火のあ
と大に腫あがりおのぼり効ありごと
内外より茶を用ひたり

秘傳の方 野菊花 這子草

小葵花 各三 大葵根 三 大青葉 二

右割とて水せんト查とさる

コロハの粉 小麻仁の粉

右ニ味細末して右の煎茶の汁にて胡
のかぐんに練合せ腫物の所とくさぐ
まおせ下入しヤン膏を錢わど
みのどて付上り右の煉茶と木綿は
けていふふもあせりて付べし腫あ

かりてうむわりこそ膿となりてひり
所とく見りけて針をとく一ツりま
てのちの常の瘡乃とく療治とく
煉茶を付る木綿は五六寸四方とく
一。又此症は湿と氣と惡血と三ツの
滯とて生す或ハ三四ヶ月又半年も
筋骨痛と後にはく痛と甚一ト
て膿なりてやぶる療治ハ段々前乃
ぞくしてうむまぞい膏茶二日に一度
ぞ付くうみて後針をじ惡血と膿
とこほりて洗ひ茶などするなり

洗ひ茶の方

芦薈 各三 沒薬 各三 青丹 凡五 韭實
六 阿仙茶 二 燒酎 十 百六

右より煮るるゆをせんと洗ふるり宛
ふくみ水にぎめて洗ふるり洗ふるり
よそ愈らうやくと付るわり

五積散 蒼朮ニ陳皮 桔梗

川芎 當皈 白芍薬各一 麻黄

枳殼 肉桂 乾姜 厚朴各四

白芷 半夏 甘草 茯苓各四

右より牛膝 紅花を加へ生姜三片入

せんと用ひ・頭痛惡寒・六葱頭を入

煎服し衣服を被蓋ひて汗をさそ

下部ありは木瓜防己牛膝と

加ふ此薬初發し寒熱痛と腫と

用て汗を發し寒と散して経絡と通

ト次に大防風湯を用ひて血と活し

濕を滲し虚を補ふなり

大防風湯 附子 牛膝各一

白朮 羌活 人参 防風

川芎各一五 黄芪 白芍 杜仲

熟地黄 甘草各五 右生姜八煎

ト用鶴膝風の疔にもよ

内托羌活湯 卑九丁りり

尻に出る瘰癧附骨疽に用ひ

内托芪柴湯 黄芪ニ柴胡一

羌活五 連翹一五 土瓜蔓 酒にてゆひ

當皈半 肉桂三 生地黃 黄栢各二

右水の三ふ酒を加へせんと用ひ内

膝内浮くるに

内托酒煎湯 黄芪 當皈各二

柴胡一五 肉桂五 大加子各 升麻各 黄柏各
甘草各五 右生姜二片酒を加へ

せんト用也 股の外外にせんト用也
附子八珍湯出年久く愈愈と房事房事
の後寒後寒とろけ腫腫まて塊塊を生生ト遍遍

身股膝身股膝ををせんト用也
參芪四物湯 鶴膝風鶴膝風の鶴鶴膝膝

ののとろけとろけして股足股足不不と膝膝ははみ
とろけたり是風邪是風邪ののとろけたり也治方

附骨疽附骨疽と同同芍薬芍薬 川芎川芎
熟地黄熟地黄 人参人参 黄芪黄芪 白朮白朮

香附子香附子 牛膝牛膝 杜仲杜仲 防風防風
羌活羌活 當飯當飯 甘草甘草 附子附子

右生姜二片入せんト用也
五積五積六六加散六加散寒熱寒熱とろけ五積

散散に人参人参敗毒散敗毒散と合合たり者者らり
獨活寄生湯 附骨疽附骨疽已已潰潰るも

ののみ用用ゆりたり 獨活獨活 杜仲杜仲
桑寄生桑寄生 牛膝牛膝 細辛細辛 人参人参

秦艽秦艽 茯苓茯苓 桂心桂心 防風防風 川芎川芎
各二芍薬各二芍薬 當飯當飯 生地黄生地黄 各三

甘草甘草 厘厘 生姜生姜 入煎入煎ト服服と
八珍湯八珍湯 膿潰膿潰て肌肉肌肉生生せざる者者カ

用用ゆりたり
○脱疽脱疽 疔疔ののれかり脚背脚背發發とも云

凡脱疽凡脱疽の酒食酒食厚味厚味脾脾ををやぶり房勞房勞
腎腎と損損ぶるがゆへにに渴渴て後患後患ひ

先患先患ひて後渴後渴とる瘡瘡かり足足或或は指指

此の病は手や指の肉の五の指潰
 つて脱する也又手或は指小もつら
 手はつら六趾節疔と云わたりは指
 の節腐る也わらさる筋ひきほ
 かり手足ともふ初は粟粒の如く
 なるもの出でやがてくさきうみづ
 汁へ出ても見たる脈はかたはるや
 なる少く腫て甚赤く後黒く
 びらる五つの指より次第に足の甲
 のわらさるのき痛くて湯火傷り
 しく鼻もむけがたなる臭気
 ありて脈はよく食もくさる氣色能
 人の治とて先は死一生の悪也
 若し色赤く痛くおぼはる潰也

此の治とて色黒く潰さるの治せ
 色赤きの湿毒盛なり先は蒜と
 て灸し内菜の活命飲托裏散
 十全大補湯加味八味丸をりらひ
 又色黒くして痛まざるは腎氣破
 して虚火盛なり也蒜をたれ灸
 し又十全大補湯加味八味丸を用
 時の毒氣上にあがらず生と保へ
 又重き疔はよく其筋を切らざる
 毒氣泄て死とすぬくは孫真
 人曰在肉則割在指則截と云此腫
 物を云なり
 脱疽は多く足指に生て手指に生
 ばはるは初は粟粒の如くなる

指の根を去りて灸すところの毒氣上にあがらず膿をかきこて膏茶をうるかり。又外治の生姜胡椒小麥粉右三味をすり合せ糊にけりて木綿に付てあぐら巻一日に一度づ付くゆるかり四五日ゆわ指のさねはのらの所を堅く四五分程けりて悪血をいじり其後太乙膏のちやん膏をいじりぬ。

茶方

解毒濟生湯 當皈 川芎 知母 黃栢 天瓜粉 金銀花 遠志 麥門冬 柴胡 黃芩

犀角 茯神 甘草 紅花 升麻 牛膝 童便 大麥粉 蜂蜜 茶のどくは紗の付ては右の茶と散

かき下し茶を用べし 下し茶の方 大黃 蕎麥粉 右二味蜜して丸用也 又方粘を黒焼いて朱右ぬの油

托裏大補湯 針灸して後膿たる

當皈 芍薬 川芎 熟地黄 人参 白朮 茯苓 甘草

防風 連翹 金銀花 黃芪各ホ

右煎し用也

補中益氣湯益氣湯 膿潰膿潰 元氣不足の
人々用也べし

五ツれ指たゞは次第に足の甲より上

火傷のおくは立居るはなは

陳皮をせんし其湯を足とひし

良久して甲肉をひきくは手

を軽く肉中の爪甲とさるる蛇退

條を黒焼めて雄黄四五 粉りて

かまうはひろうるべし腫物かひは朝

の油をそとれてはる其上に膏菜と

ふべし

一方 枯凡五 石膏五 輕粉

黃丹各三 右粉にして腫物を湯

であらひきよめ菜をぬふは

膏菜を付べし

活命飲世三丁り

托裏散世三丁り

十全大補湯世五丁り

大乙膏世五丁り

補中益氣湯世八丁り

○石疽足のらとせりては

石疽は寒氣の毒骨髓に伏し其腫物

と皮肉と同一やかるは痛て

きこし石れおくは此症は厚味と好

房勞と酒後との二は水を飲め

其邪濕内に入瘰癧又は瘀血と

其邪濕内に入瘰癧又は瘀血と

腫物 尻にいで多ふ内托着活
 湯と用ひ内股膝腫ひらぐりくをく
 あり内托柴湯 股の外あり
 内托酒煎湯又腫ひろ行歩痛
 とて骨あわらて大痛むふ
 黄連消毒散と用也 勞役食傷
 て右の股一面とて補中益氣湯
 鳩の糞を煨して粉ふてかまうてぬ
 若くは痛まば黄丹少く加へ桐油
 て秘つて付へ
 五十余歳の男右疽とて右の足背
 ようらふ腐やある初より足の裏痛
 じて甚し一年ほどに愈ふまでなり

ら愈ゆる口より筋のぶくなるもの出
 る一年半ほどく快氣と此腫物痛
 とほよやく急に瘡治なり多々の
 醫これ成療どらも更ふ其功なり
 ちるふチヤン膏に薰陸粉を押し合
 せて貼け又丁子肉桂の油をよぎ
 して膏茶付る度毎よめりて平
 愈せり

○茶方

- | | | | |
|-------|----|-----|----|
| 黄連消毒散 | 黄連 | 羌活 | 各一 |
| 黄芩 | 黄柏 | 藁本 | 防已 |
| 桔梗 | 知母 | 生地黃 | 獨活 |
| 防風 | 當歸 | 連翹 | 各四 |
| 蘇木 | 陳皮 | 澤瀉 | 人參 |

甘草各三 右煎服

内托羌活湯 四十分りやろ

内托芪朮湯 六十分りやろ

内托酒煎散 六十分りやろ

補中益氣湯 廿八分りやろ

チヤン膏 卅二分りやろ

○鬚疽 両のこひんに

夫鬚疽ハ肝氣こころり腎虚そ

血まの脾ほくま或ハ風熱どけ

生ハ其初り寒熱して頭痛耳目

りふ腫いふたり療治れ法いこ

針灸すくす虚弱なる人ふん

く針灸といひ付茶ハ琥珀膏付

べ初發寒多く熱少く口渴きて熱

湯と好むハ真氣虚して邪氣實

する人から脈虚數めて力なく瘡

痛まの潰ど膿ざるハ瘡根流し散

ふかり托裏消毒散清肝湯を

用ゆ。氣實して邪虚なる人の初

熱多く寒少く頭痛口舌乾き水

と好む大小便さる脈沈實して力

ありて瘡なりき腫るべき身熱し

腐まらぬみやとれた瘡の根ひらうど

ふなり荆防敗毒散梔子清肝湯

鼠粘子湯と用ゆべ。鬚疽頭痛

面頰らね或ハほくま或ハみて元

氣虚弱のふん清肝養血湯と用

ゆべ。鬚疽となりてかきして

瀉（ど）或ハ瀉（て）ねしほくは久しく
さし氣血（きけつ）の虚（きよ）し身冷脈細（みづか）
て不食（ふじき）形瘦者（かたやせ）ハ参苓内托散（じんたくさん）を用

○菜方（さいほう）

清肝養血湯（せいかんようけつとう） 地黄（じちやう） 陳皮（ちんぴ）

當皈（たうはい） 芍薬（しやくやく） 川芎（せんきゆう） 茯苓（ふくろう） 白朮（びやくじやく）

半夏（はんげ） 貝母（ばいぼ） 柴胡（さいこ） 人参（じんじん） 甘草（かんそう） 甘州（かんしゅう）

牡丹皮（ぼたんぴ） 山梔子（さんし）

右生姜（みぎしやう）三片（さんぺん）入煎（いせん）用（よう）

人参内托散（じんじんないたくさん） 當皈（たうはい） 芍薬（しやくやく）

川芎（せんきゆう） 熟地黄（じやくじちやう） 黄芪（くわんぎ） 陳皮（ちんぴ）

白朮（びやくじやく） 山茱萸（さんしゆ） 茯苓（ふくろう） 牡丹皮（ぼたんぴ）

地骨皮（ぢこくぴ） 人参（じんじん） 甘草（かんそう） 肉桂（にくけい）

附子（ぶし） 右生姜（みぎしやう）入煎（いせん）用（よう）

柴胡清肝湯（さいこせいかんとう） 當皈（たうはい） 芍薬（しやくやく）

川芎（せんきゆう） 生地黄（せいじちやう） 柴胡（さいこ） 黄芪（くわんぎ）

山梔子（さんし） 防风（ぼうふう） 天瓜粉（てんかふん） 牛房子（ぎゆうぼうし）

連翹（れんせう） 甘草（かんそう） 各一（かくいち）

梔子清肝湯（し）せいかんとう 牛房子（ぎゆうぼうし） 柴胡（さいこ）

川芎（せんきゆう） 芍薬（しやくやく） 石膏（せうこう） 當皈（たうはい） 黄连（わんれん）

山梔子（さんし） 牡丹皮（ぼたんぴ） 甘草（かんそう） 煎服（せんぷく）

鼠粘子湯（しゆぢし） 鼠粘子（しゆぢし） 桔梗（ききやう）

當皈（たうはい） 甘草（かんそう） 芍薬（しやくやく） 地黄（じちやう） 地骨皮（ぢこくぴ）

連翹（れんせう） 玄参（げんじん） 防风（ぼうふう） 天瓜粉（てんかふん）

木通（もくつう） 大黄（だいかう） 右煎服（みぎせんぷく）

鬢疽單方（びんじゆたんぱう） 頭髮（かみ） 黑（くろ） やきと胡麻（ごま）

油（あぶら）とてとじて付ふなり

托裏消毒散（たくりしやくじやくさん） 世三丁（よせさんてい）めふち

荊防敗毒散 廿九丁ゆふ物

琥珀膏 五十二丁ゆふ物

○瘰癧

瘰癧又ハ蛇瘡ともいふ多くハ手足の指ニ生じ或ハ腕或ハ臀又ハ口齒肚腹其出所さへあらず初発ハ粟粒のごく豆のごく大なるもの梅李の大さありまのハ手足の指乃間ニ出て初ハ赤々次に黒く又青白く色變じ其根なく筋骨をほろぬき肌肉ハ腎に走り腫あがり毒血ごころり肉をたらし骨をあらり血と出ること多し痛甚しきハ狂言をつたなり痛と心に入めハ則死す外腎がら出るは

死と此腫物ハ風をひくと成いじ瘰癧の法れ如くすまばはらば瘰癧初発に痛くはよくて止ざるふハ先付茶を用ゆ

○茶方

敷茶の方 朱砂半兩とらて灰に

寒水石朱 枳核ニ朱黒や 右粉にて酢にてはく

又方小麥藁 黒やき 輕粉 五分 右粉にて付ふなり

又方茄子の花黒やきにて胡麻れ油にて付べし

又方枚の緑豆や 輕粉 酢にて付べし

又方大黃根葉 黒胡麻れ油にて付

外科

七十五

洗菜 荊芥 白芷 山椒各二
葱白 干白塩三 右煎下日以三度

で洗ひて付菜とぐ
酒洗の方 瓜蔓根を酒にて煎下

乳香 没薬 五灵脂 皂角刺
右四味等分粉に前粉のせんどたる

酒を用ひてその毒を下となり手足
の指小出たる其指根をきり

くぐり毒外へひろくまじり
蠟 礬丸と用ひて明凡四兩鹿射香

三黄蠟二とくろく移り合せ梧子の
大丸に冷酒めて用也

膏菜 天南星 半夏 白芷
硫黄 雄黄 右等分粉にして

黄蠟と移り合せて付るなり

○石榴疽 ひぢのとき

凡石榴疽の時のごく一寸を上に生じ
ふみのわり初に粟粒のごころなるもの

一 出次第に大小して根ごとく色赤く
腫る事石れどく後皮や

ぶまてあつた石榴の皮をむき
るごころ粒ごとくはあつたり

なまらるるまてつくたものなり
初にむけたらして瘡のくくはらう

のわり初發のころ茶と二十粒を
すべし濃るもの荊防敗毒

散を用ひて汗を發して毒と散と
べし濃漬てたさほらるものなり

菊花清燥湯を用ひて

○藥方

菊花清燥湯 菊花 當飯

芍藥 川芎 知母 生地黄

貝母 麥門冬 地骨皮 柴胡

黃芩 升麻 甘艸 犀角各等

右竹葉燈心を加へてせんと用ひ付葉

玉紅膏なごり

荆防敗毒散 七九丁ウヤ

玉紅膏 百々三ウヤ

○龍泉疽 上らびつの中に出

○虎鬚疽 下らびつの中に出

此の腫物ハ任督の二脈外邪にたつ

たして是と生じ龍泉疽ハ人中と

て鼻の下唇乃直中より出初ハ粟

粒を有て次第に腫つてみ寒熱

甚しきことハ腮より頂へんるる

此二穴尤灸と忌む治方ハ針を

あき破り腫物の上ハ蟾酥と粉

ひそにけ其上ハ太乙膏を付し

蓋ふ四方なり腫る処ハ如意

金黃散とぬぐふ初ハ寒熱あふ

ハ荆防敗毒散裏症のものハ内疎

黃連湯を用ひてそらみてうき

痛まば針をゆる付葉ハ芎歸

内托散を用ひて

○藥方

如意金黃散

天瓜粉十

黄栢 大黃 姜黃 各五 白芷 各四
厚朴 陳皮 甘草 蒼朮
天南星 各二 右粉ふて蜜ふて煉

了付る

内陳黃連湯 木香 黃連

山梔子 當皈 芍藥 薄荷

桔梗 枳榔子 連翹 各二 大黃 各三

甘草 右蜜を加へて用也

芎皈 内托散 當皈 川芎

陳皮 茯苓 天瓜粉 桔梗

黃芪 甘草 金銀花 各ホ

右生姜入煎服と

荆防敗毒散 北九下り不考

松乙膏 北五下り不考

○多骨疽 骨の節より

凡多骨疽の症腫物久く潰へ口

ねさゆる氣血虚しそ行出かまひ

す故に此症とありてうちらるる

骨多しぬけづる治方先脾

胃を補ひ元氣を調へ朝に十全大

補湯晚に六味地黄丸を用也初に

葱白艾葉干山椒甘草の四味を

てんと毎日腫物あひ次み附子

餅の灸法をとるなり・附子とよく

はきそ餅のやふして腫物の上へ

き毎日灸をとるなり付茶に玉紅

膏を用也

十六七歳の男初發に風毒腫に症

て三年膿血出てやほと痛む甚く衆
医皆死せんといふ後療治するに口より
朽る骨をへらり鋸を引切り其長
さ二三寸又ハ三四寸の物を出して
愈也療治ハチヤン膏と入中を丹丸
と水とて水に溶かして洗
ひ腐もてる肉を流し生肉を上げて膏
菜種々付て愈ゆ

○菜方

十全大補湯 卅九丁ウヤ

六味地黄丸 五十丁ウヤ

玉紅膏 百九丁ウヤ

チヤン膏 卅九丁ウヤ

○甲疽 手足の指の甲に
生じ代指に云

凡甲疽ハ手足の甲に生ず瓜甲の前
をうら毒氣手足の指をせめて努
肉はよて指甲のひらひら痛て
膿血を出し瘡の中に虫あり或ハ
甲を剔肌をやぶるから腫痛
ハチヤン・洗菜の方 芒硝 烏梅
各五分 醋よりてあつら腫る指に其
内に入るとたらしむるに止む
甲疽及び一切の腫物努肉ハ烏
梅をほきそ蜜を加へ餅の如く
て錢の厚さを以て付る又硫黄
を粉にしてまじはる。又方猪
の油に蚯蚓を入れたらうて
ほくはなり

○藥方

綠礬散

綠礬五兩 石膏一分

麝香二分 右ハ粉レ絹袋ニ入痛

ひ指ヲ袋ノ内ニ入指ノ爪線と

くろりツゆハはをなくス

○天蛇頭手足の指乃頭に

天蛇頭ハ心火成血にここと此症ト

かる手足ノ指ノ頭大きふと蛇ノ

頭にわらう腫痛とくらき心にと

る治方ハ灸を五壯をじて後ニ雄

黄散とあり玉紅膏を付テ内

茶ハ荆防敗毒散と用ベ一

○藥方

玉紅膏百九十三丁あり

雄黄散

雄黄二分 蟾酥二分

龍腦一分 輕粉五分 右粉にして貼ス

荆防敗毒散廿九丁あり

○療瘰

夫瘰癧ハ症に筋歷風毒熱毒

氣毒乃からりあるとも療治

大々同トあとかり其出処頭ノ

の前頂ノこりれ或ハ耳ノしら願

領ノ下にくらく銀杏ノ實を乃

結と生と又胸脇ノ下に生とくら

くく石ノぶくかたと馬刀瘡

とい多氣少血ノ病より發るらり

●風瘰ハ尖りて小さく風濕と散す

ふやうに防風解毒湯と用ゆる一

熱瘰癧血瘰癧の腫れ腫て色赤
脾を清くし熱を下とせり連翹
消毒飲を用ひし・痰瘰癧の推
ごすふらうしとやうしり痰と
ごうし氣を行らすやふ本連三
陳湯を用ひ・氣瘰癧丸くし
く血をこの氣と和しとやうし
藿香正氣散を用ひ・筋瘰癧の肝
清く鬱をゆるくせり柴胡清肝
湯を用ひ・又寡なる男女尼僧
と内にありてありて志と遂と精
力とあつて此瘰癧を發したるは治しが
飯脾湯又益氣養榮湯を用ひ
し尤二方共青皮香附子山
子貝母木香を加へて用ひし・外治

れ方へ結塊をけず久しく潰るる
は先灸とし次日針しとせり
づり血を出し三仙丹をぬりて其上
に紫霞膏を用ひ此膏茶の潰
るに散り潰へるに愈と又膿瘡
かみふも妙なり

○茶方

三仙丹 白凡 黄丹 雄黄

右等分粉ふしてぬるる

紫霞香 松脂 一升 緑青 二
胡麻油 四 先胡麻の油四兩を銅
の鍋にそせんと水を加へて煮る
時松脂を入れてせんと又緑青を入れて

せんト白きクツツテ膏とるる志
 入紙に引込入て風を引ざるやうに
 用ゆる時ハ湯の内よてやわげ付
 太平膏 片腦 輕粉 乳香
 沒薬 麝香 右粉に胡麻
 の油十兩葱七根鍋に入せんト葱の
 色黄なるを葱心とて黄丹五兩
 と入柳乃筈此と手とをりてまじし
 せんト膏とるるを右粉と入紙
 入合とるやう
 蚕繭散 蚕繭 白朮 信石
 右三色く火とてつるるか粉か
 てたれぬる上はくろ三日ほどして結
 ねはるやう

代灸散 癰癤潰へたもくもくし
 て久く愈ざるは治と

輕粉 雄黄 銀朱 麝香
 右粉にて槐の皮一枚針を孔を
 あけて腫物の上よたき其上に右の
 粉菜を一撮ひきり炭火とてあぐるも
 なるら菜氣自然に瘡の内よ通るやう
 痛熱と止かり重ハ三度かく輕ハ
 二度かくと愈ふやう
 一方 癰癤痛とたへるやう
 黄連 黄柏 鬱金 片腦
 朱砂 乳香 沒薬 白芷
 各等分粉ふして水とて揉るやう
 陰干して孔の内へ入ると痛止也

紫金散 瘰癧久しく愈えぬ者

と治るるなり

枯凡五 砒霜一 石胆五 右粉ふして

黄丹二 入瘡の口れ中にひきり入て

上はけらうやくと付るりやぶれんば

灸を二火と津と粉茶をくわ

瘡の上はけらうやくと付るりやぶれんば

とらて愈えたり

防風解毒湯 防風 荊芥

桔梗 牛房子 連翹 甘草

石膏 薄荷 枳壳 川芎 蒼朮

知母各多 生姜二片 灯心を入てせん

用いべし 連翹 陳皮

連翹消毒散

桔梗 玄参 黄芩 赤芍 射干

當飯 山梔子 葛根

天瓜粉各一 甘草五 右せん用い

苓連二 陳湯 黄芩 黄連

陳皮 茯苓 半夏 牛房子

甘草 桔梗 連翹 天瓜粉各三

木香三 夏枯草二 右生姜三片入

せん用い

藿香心氣散 桔梗 紫蘇

茯苓 白芷 半夏 陳皮 白朮

厚朴各二 甘草五 藿香一 前服

柴胡清肝湯 川芎 當飯 芍薬

生地黃 柴胡 黄芩 山梔子

防風 天瓜粉 牛房子 連翹

外科 六十四

甘草 各一 右で下食後服用
 益氣養榮湯 當故 人參
 茯苓 陳皮 貝母 川芎 黃芪
 香附子 熟地黄 白芍 各
 甘草 桔梗 各五分 白朮 五分
 右生姜末入煎服之
 歸脾湯 八十九丁りふゆ

咽喉のどの病

夫咽喉の病ハ八種といふも十八種有
 皆風熱痰火の邪為なり或ハ喉痺
 或ハ腫痛或ハ咽瘡或ハ紅腫なり但
 咽瘡ハ汗をすするハ忌むなり針をて
 血をするハ愈ふ若ハきんにて心脇錐
 して刺ぐとくハ痛大小便結とハい

やハ紫證散地黄散を用ゆる
 痰多ハ金鎖匙を用べハ腫痛ハ
 疔ハ先ハ醋をふらば少商乃穴
 より血を出し吹くると止此疔ハ腫
 りてハ紅をぬるるやハひて赤くな
 りきやくといふみて津もさうさう不
 とふふさがるなり針をとくべし
 こ針をれハ死と
 咽瘡咽に瘡出て或ハ腫ふさうりて赤
 く又ハ白きハ地黄散金鎖匙を用ゆ
 若瘡ハ甚しくハ硼砂牙硝各四分
 辰砂五分 青代黒三分 黃連 薄荷 各二分
 龍腦 右粉ふして瘡の出たる所へ
 管より吹入るなり

白蟻瘡といふ咽喉或は鼻の孔に生
と腫たるをかり 梅干一ツ黒焼
枯凡一雄黄 川山甲 玉とる
右管を吹入かり
咽喉腫痛其外咽喉一切を清
涼散と用ゆべし
酒に酔又は大笑ひし又のあびりて下
腮の腫あまらる落架風と云是
氣血めぐる筋れさゆるるゆかり
手あておあげて内茶を防風荆芥
羌活細辛當飯白芷甘州節
姜蚕 右せんしと用ゆ
又方先車前草のせんし汁をて口
をあひ又のふみ両の手をのめ

ろしすはら拍あふまは合たり

○藥方

吹喉散 膽凡 白凡 小豆
芒硝 龍腦 辰砂
右粉ふして管めて咽へ吹入かり腫痛
喉痺まよ
地黄散 訶首烏 羌頭と牡丹皮
仙女喬根葉 赤芍藥 黃連 各五
生地黄汁 右粉めて二をなげけ
切く茶をたそ用ゆべし
金鎖匙 川烏皮を去 矮烏皮を去
薄荷葉 右粉めて食後茶
にわさく用ゆ水をいひたり此茶を
用ひてわさく生薑汁を用ゆべし

外科
六六

清涼散 山梔子 黄芩

黄連 連翹 防風 薄荷

枳殼 桔梗 當歸 白芷

生地黃 甘草 右生姜燈心

引茶入せんと用也

加味四物湯 當歸 川芎 芍藥

地黄 知母 黃柏 天瓜粉 桔梗

甘草 右生姜竹瀝を入りに用

○瘰癧

凡瘰癧は氣血の滯より結まて出
たり肩頂に生きて皮ゆかく急な
ら垂さるる瘰癧といふ五種の名有
肉色かまらぬを肉瘰癧といふ筋れ
ゆる筋瘰癧といふ赤き血瘰癧云

氣にちこひて大きくなり小くなり

を氣瘰癧といふかきしてとらると

石瘰癧といふ又瘰癧血痰結まて初

梅李を有て皮やうふひる次第

に盃なり大なる瘰癧と云六

種の名あり骨瘰癧は色紫に黒く石

のどくかき脂瘰癧肉瘰癧膿瘰癧血瘰

石瘰癧と云なり瘰癧といふ痛こら

しとつともむらじくやあるらうは

やく切やぶると膿血を流すとて

死するなり肉瘰癧は療治すのうは

氣瘰癧は昆布丸を用ゆへ又粉瘰

と云は紅の色れさき耳頂の前後

に出る痰結なり又髮瘰癧は耳乃

後髪の下に出るやうくふりて按て
痛き分又黒砂瘤と云へ多く尻
股に出る色黒し又蛔虫瘤と云
脇下に出る後潰れて内より虫出
るなり・瘤は按てりて動へ灸す
べし或は針をさして抜糸を掛け廻り
ては藥煉散を付べし又おてりき
へ動らざる氣瘤と云ひさと破る
べしはこまは天南星の粉を酢
にて付べし・癭瘤或はやうくふ又
かきけて痛くて痒むやうは實
疔なり海藻散又堅丸を用べし
こく治方へいさし針をとるす
口灸のやく前葉丸茶なり・灸用

地黃 人參 白朮 茯苓 木瓜
山梔子 龍胆 煎服
血瘤は飯脾湯を用ゆたり
氣瘤は補中益氣湯を用べし
骨瘤は補中益氣湯に腎を
補ふ菜を加ゆべし總して瘤初て
出たるは十六味流氣飲久しきみ
の蠟丸子を用ゆ毎に用ゆは自然
に去はりて散わり外より南星
膏を付べしむさし破るべしは
脂瘤は紅乃色なり針を破り
脂粉を取出して愈かすやくを
付るなり・茄子のやうふ垂さぐり

根の細きあり抜糸を葉に付る茄子
たけふをばらして飲瘰膏を付て
出る血をふせり。●黒砂瘰(色
黒し尻股に出る針を破り黒粉
を按出し三品一條鎗を針の孔へ
こまみ入愈膏糸を付る。●髮瘰
髮の中はつる針をやううて脂粉
髮毛と按出しやうやくと付る。

○菜方

昆布丸 昆布 海松 小麥 冬各

右へつぎまきまき合と酢三日漬
て乾炒て粉にして蜜と。是が
に丸ト食後三粒一日に三度
づ用也又外へ麻の實をとりうぶ

絹を包と炭火うて温め瘰の上をこ
すべし。こめたるは温くこすべし。

海藻散 堅丸 昆布 龍胆

蛤粉 通草 貝母 枯凡 海松

小麦粉 各三 半夏 右つぎまき粉

いして蜜と。是がに丸ト三十

ア白湯とてはるるは用のべし。甘

艸魚鳥猪肉五辛菜の類と忌べし

蠟 礬丸 黄蠟 西明凡粉 西

にて急に丸ト。是がに丸ト三十粒

で、食前酒とて用の下戸は白

湯とて用の此菜は瘰瘰痔便毒と
治と一切腫物の血をちりて膿を

れら肉を生じ口とれら外科瘡

の第一菜やう

南星膏 天南星生と細ふとら

て紙をじよた酢を加へ膏と南星

生を乾らば粉め酢を移り

先瘡の上小針をさし氣とこして菜

をほゆる痒このべ切く付べ

飯脾湯 白朮 白茯苓

黄芪當 龍眼肉 遠志

酸東仁 人參各一 木香各一 甘州各一

右生姜束入煎服と

補中益氣湯廿八りや

拔菜 瘡初て出でいませやれど根

らいとして散ぶる時ほゆる

白朮霜 磁砂 黄丹 輕粉

雄黄 乳香 沒薬 硼砂各一

班猫二 田螺大りて切

右細末とせり米の粥と移り合せて

碁石れぶくにかきて日にやそ瘡

の上は灸と三火して右れ菜を付其

上に黄栢の粉と水と移り付て蓋

はとるこ十日余りして瘡自然に枯

せりふわへ歛瘡膏を付べ

歛瘡膏 鹿角霜 土龍鹿

牛皮黑 松脂各 右胡麻の油少

入て移りて付べ一日に一度二日に一

度やう湯は明凡を加へあひて付

ふ瘡切て後へ金瘡のふくもる也

三品一條鎗 明凡三砒霜石五

雄黄四分 乳香二分

右明凡砒霜二味を鍋に入炭火めて

煨烟よりけき雄黄乳香いり

すり細ふ糊と糸すらのどく

て陰干め瘡の孔へこまみ入上ぬい

膏菜とほるなり

十六味流氣飲 當皈 川芎

芍薬 白芷 桂枝 人参 黄芪

木香 烏薬 厚朴 枳殼 防風

紫菀 檀榔子 桔梗 甘草

○流注

流注とは流へ行たり注は住る也氣血

よまれ人瘰血痰火ありて風寒はた

も邪氣流行し此症となる初め胸

腹に發し手足腰尻と脊或は節

節形腫ひろがりて頭かく皮の色變せ

す按てるとる瘰癧のやいひとぞり

くして或はさうとつこふらけり

ゆくとあり又一つ出て後其經をたよ

ア小あやこころへ出ると有なり

又ハ跌撲の血凝てたり又ハ産後れ惡

血とこかりて生れあり初發は先

葱の白根をほきたり炒て腫

たる上を慰とべ實症あるふい

十六味流氣飲虚症は六君子

湯に川芎當皈を加ふ或ハ補中

益氣湯に木香枳殼を加ふ
潰て久しく愈うぬるふに托重益
氣湯十全大補湯を用ひて濃
なり針をさしてやぶり内より穴
あぶ人言雄黄を飯そ丸に入れて
腐らるるまで

○茶方

六君子湯 世八丁りふや

十六味流氣飲 世八丁りふや

補中益氣湯 世八丁りふや

十全大補湯 世八丁りふや

琥珀散 大黃 二兩 鬱金 白芷

各一兩 天南星 右粉ふして大蒜を

はきたたらか粉茶と入て又つた

体なる酒を少く入はきはせ腫物
一ふはけて紙を蓋り後痛
熱あつたは此茶のかまははで
付そ七次の日泡れど腫あつる
をほきやうり黄水を出しかき
と付まば愈ふなる。此茶一切の腫
物色のあつる腫ひろがり頭なく
いまだ膿とかがらるるよはけてる
しゆり

○痔瘻

痔瘻ハ男女小兒ふかきらすもの者
かりりくより濕熱をほくものい魚
肉好味酒色を過して発する女人ハ
經水をさる後冷をうけ風にやぶる

もて發はて小兒こへ多おほく母ははの胎熱たいてつねつをう
けておとる或あるは血脈けつみやくめううず風濕ふうじつ食じ
毒七情どくしちじやうの氣きをこりり肛門かうもんより
すりて痔ぢとなる先痔せんぢといふ物兜ものたうの
限かぎ或あるは穴あなの内うちに豆粒まめつぶ程ほどに腫膿しゅのうで膿のう
血ち出る切々きりきり發はてて愈よがず痔ぢの疔ぢ
五痔ごぢといふと七種しちしゆあり瘻ろうといふ
穴あなの口くちは四五寸四五すんの間あひだに出いて潰つぶへく
膿のうの出いるめなり・牡痔ぼぢは鼠ねぞこの子こ
を有ありて肉にく出いる物なり・牝痔ひんぢは先せん
のこゝに瘻ろうのどく出いて膿潰のうつぶへ愈よる
・脈痔みやくぢは朝夕あしたゆふにゆる血ち出いる・腸痔ちやうぢは
穴あなの内うちに結むすて有ありて廁せうよりゆるて脱肛だつかう
となるなり・氣痔きぢは恐おそむといふもいた

ころして腫はれよみ氣散きさんといふ愈よる・
酒痔しゆぢは酒しゆを飲のむ腫痛しゅつうと血ちいづる
・血痔ちぢは大便だいべんに血ちをうりてやほす冬ふゆ
ささくといふころ穴あなから漏ろうとなる
なり・治方ちほうは先内痔せんないぢ外痔がいぢよりゆる
す葱しゆんの白根はくこんをせんて洗あひ内痔ないぢの
喚痔散くわんぢさんを穴あなの内うちに入いれ次に五
痔散ごぢさんをほく外治ぐわいぢは葱白しゆんぱくのせに
ゆりてあつひ次に消毒散しやくどくさんをせに
あつひ次に枯痔散こぢさんを蜜みつうてゆる
ほくゆるさび湯たうと洗あはる
又喚痔散くわんぢさん三々さんさんと唾つばかきゆる肛門かうもん
に入いまば痔外ぢがいへ出いて外痔がいぢとなる
其時そのとき護痔膏ごぢかうと付つく但たゞし王子おうし

外科
九十三

の白くみて膏菜のごとく移りて四方
にあり次に枯痔散を痔の上に付
て痔を乾かして愈へ落痔湯をして
洗ひぬ落痔湯五痔湯ともいふ
灸法外へ出たる痔は艾と束を乃
大くして七火をいへ痔潰れて水出て
愈かり・俗に云孔痔は三品條
鎗といふやうふして孔の内へ入る
上へ玉紅膏を貼くべし・いが痔
に荆芥朴硝防風のせんゆめて
洗ひ後木鼈子鬻金を粉にして
龍腦少し粉にしてやせ合せ付ふ
又熊胆片腦を粉にして付ふは
●痔より血を或外へいでおさ

あつたる悪痔は痛むは西欄
あつたる冬瓜の皮を火をよよく
焙り粉にして古酒にて一盃を用ひ
●痔又へ漏きいれて痛むは
橄欖黒やき 熊胆ト龍腦ト右粉に
先冬瓜の皮をせんゆめて痔を
洗ひ粉菜を付ふ時いたらゆら効
あり・内痔を治する方黄連 枳
殼 川芎 漏芦 槐角 地榆
呉茱萸 芡實 川山甲 蒲黃
枝子 甘草 各等分せんゆめて又
すべしゆのせんゆるとかまら
用ひ菜を用ひ五日して外へ出る也
外痔はわりあるは菜湯をして洗ひ

蓮房散をひきりくへし。漏れ
 つら肝門のくま三四寸の間穴と
 生し膿血出るなり附子と粉に
 唾をせり餅にまじり錢の厚さ
 に瘡の上におけ腫物の大さなど
 に艾をくらし灸として少熱さ
 とこして痛まじく餅かき時
 に取て灸とるなり若急屈せば
 やりて次の日又灸して肉たらしむ
 きたる灸とやりて雲母膏と付し

○茶方

喚痔散 草烏頭一塩三五
 蝟皮一か 明礬五 麝香ト五
 龍腦下

護痔散 白皮三 石膏一 龍腦
 鹿射香ト三 黃連三
 枯痔散 白凡二 蟾酥二 砒霜一
 天蓋四々 右合して器物ふし二時
 乾きやきとる時に粉ふして
 用ゆるなり

落痔湯 黃連 黃芩 黃柏
 大黃 防風 荊芥 厚朴 苦參
 芒硝 甘草 各々 せんど洗ふ
 消毒散 連翹 忍冬 防風
 金銀花 荊芥 厚朴 黃連
 防己 黃芩 甘草 煎服
 蓮房散 木鱉子 文蛤
 右粉ふして先艾葉 蓮房 重茶

五倍子 温靑 右等分にして
ちん少入せんとあらしめて前の粉葉
を洗くを

又方 紫蘓 山梔子 沉香 各ホク

右ひき茶と加へ付るなり

蝸牛膏 蝸牛 龍腦 麝香

蝸右にきたらうして汁を取痔漏

乃上にほくは痛をやめるとい

うて妙なり

洗茶 蜂房 白芷 又腹皮

苦参 右せんと湯氣して漏瘡と

薰し水いげん拭ひさう東に向

ふ石榴の根の皮を粉にしてかき

てひわくけ虫をこらしてとら

くして樂を付べ

三品一條鎗 九丁りふち

玉紅膏 百九十三丁りふち

雲母膏 百七十九丁りふち

○脱肛 ちんぐり

夫脱肛の男女小兒ふらげ氣血

虚して氣下陷する症なり新しき

久しきふらげ加味参芪湯と用べ

○菜方

脱肛洗 葱白根をせんと洗ひ

芭蕉の葉ふてね入へてとる

くは蜜をぬりて入る。又方むく

げの葉とせんとてあらし五倍子明

凡の粉を付る

灸方 神闕その中 長強のそ

百會のそ 下膠のそ

脱肛久しく冷て入るる時のそ 赤

いんじやうびれのそ 花のそ 白角

豆の花のそ 石榴の花のそ 乳香

右五味蒲萄酒五合 水五合 合て 見

ト手拭い 脱肛を 温り 温り 温り

内へ 温まる 温まる 温まる

敷薬 白粉少 干たる 石榴の

花少 松脂少 明凡少 粉少

付て 押入 入る 入る

○下疳のそ 凡下疳のそ 色慾のそ 凡下疳のそ

實ハ肝經濕熱のそ

○茶方

雄輕硃砂散 白粉一 雄黃七

辰砂五 右粉一 付る

太乙膏五 久く 愈る 愈る

洗菜 葱白二 甘草一

黄連一 干山椒一 甘草一

右を 毎日を 洗ふ 洗ふ

荊防敗毒散九 龍胆一

龍胆泻肝湯 龍胆一 連翹一

生地黄 澤泻各一 車前子一

木通 當歸各一 山梔子一 甘草一

黄連 黄芩各五 大黄二

右生薑入煎服と

下疳の妙方 王子の皮焼少
 明凡燒少 右粉にてひきつかる
 又方 柘榴 三々 龍腦 五分
 朱砂 五分 猪髓 見合 右やかの
 油よりこのどいそけりや二五入
 移りやうほねりて

○便毒 便瘻ともいふ

夫便毒の血疔ともいふ股のほけぎ
 い又小腹乃間こく陰上れらく
 に出は是精血のこころり或は慾
 念きさうて泄まべきとありさる色
 を思てかなつて精ころて腫痛を
 かく厥陰の温熱かりありをれ
 ば久しく思ぬふかりみりに針を

とるて初り腫ていまごははる
 山甲内消散 又膿とわり六龍胆
 瀉肝湯又うみのぬはは灸と二
 百をすべしたらはら潰へて愈也
 又初らぬぬえの針をじて血
 を出茶をほははたらはらぬ
 ぶかる久く愈る漏らりて
 穴のたぬふの蠟燭丸を用て妙也
 又方 五倍子 明凡 右二味を
 酢ふて移りほらりやふんとた
 りや烏豆の皮とさう生うそはき
 たらう玉子れ白こふてわりはる
 一夜をぎてうのちるなり又方
 膠を酢て煮て熱き内はひく也又

方天瓜粉赤芍茶 黃栢 川山
甲 右等分粉にして酢にて揉
て付 子かりり膏茶の鶏蓮膏
を用 女人の下疳に麻をこてん
と腰湯にせしむ

○茶方

鷄蓮膏 腎癰門より 四十八粒也
山甲内消散 當皈 大黃 各二
川山甲 三枚 木鱉子 三 甘草 少
右酒を加へて空心に用由大便
二三度下をかり
龍胆瀉肝湯 下疳門にあり 九十七粒也
蠟礬丸 瘰癧門にあり 八十九粒也
○楊梅瘡の事

凡楊梅瘡の多くは肝脾腎の内風
濕の毒より生じ又其毒を外より
くるもの有りたりゆへに楊梅は似あり
ゆへ名にぞるわり初發は先防風通
聖散をせんと用由又ハ粉茶にして
白湯にて用由此茶一劑用て先内毒
と去胃氣をのりて又一劑硝黃
を去麻黃を加へて汗を出し外
毒と去て後加減通聖散と二劑
用由し始終第一茶かり楊梅
毒とは結毒ともいふ瘡毒はな
りたる成りし瘡愈るといふ久
しきとてハ風毒内入或ハ濕をこ
しとてハ或ハ氣血やぶきて漏と

かる或いひきと輕粉水銀等の入
る茶とのそ又いふ養生をい房
事をなすくと腫てたも膿汁を
かぐはふと瘡毒よかるきいりる
かる後うは眼鼻などやぶと玉莖
くまもたも手足ひきほり癩病の
やれかるるり

○茶方

防風通聖散
川芎 芍薬
連翹 薄荷
石膏 黄芩
山梔子 各二分
甘草 二分
滑石 一分
右せんと用也

防風 當歸
大黃 芒硝
硝黄 桔梗
白朮 荆芥

加減通聖散 防風通聖散の
茶味半斤に苦参を半斤くり粉
み酒糊又ハ蜜とて梧子の大き
丸に空心み食の取ゆ又温酒と
用也元氣不足かへ人參黄芩を
加ふ也

破邪湯 骨うづき筋氣万乃

瘡 防風 葶苈 杏仁 木瓜
白鮮皮 木通 各五分 皂角刺 四分
忍冬 土茯苓 各四分 右水五盃入
て三盃とせんと二番に三盃と二盃
にせんと用の禁物の茶酒魚鳥塩
何れも青葉の類
又方 紅花 防風 天瓜粉

金銀花 每服に土茯苓四兩同ト

くせんと空心に用也

付茶 杏仁 半夏 各輕粉二

右粉めて猪の油を移り付る

升麻解毒湯 骨うぼき久しく

愈を年を経るふてもらうきふ

も皮肉の破きたれらると咽れを

こぼるふしよし 皂角刺

升麻 各 上白土茯苓一升

頭面に出るふは白芷を加ふ咽の

肉は桔梗を加ふ胸腹は白芍薬

を加ふ肩背は羌活を加ふ下部

に出たるは牛膝を加ふ右ハ各一

升加水八盃を四盃とせんと四ツ小

まけて一日に四度と皆々用也一

のしどは胡麻の油を三と入

て用の瘡上にあふ食後と用ひ瘡

下にあふ食前と用の瘡甚しき小

一十服をて用也

鷲黄散 瘡潰へたれ膿汁多

出ていふ甚しき小はけてす

石膏 輕粉 黄栢 各分粉めて

あつらひてひわりくはとるはら

ふとぼるかり又たふまははくじ

毒氣尽て愈べし

五宝散 乳石 女の乳乃り 琥珀

珠砂 珍珠 龍腦 右粉茶と二升づめてうごんれ粉を八

升

女入て又よくとり合せさそと土茯苓令一
 斤に水八盃入五盃にせん五ツ母
 日毎毎日一盃五室散を一分と加
 一瘡下いあつて空心は用ひ上ふあつ
 食後二用十盃をて用てあつ外
 らい五倍皮硝のせんゆすあつひ
 生肌散のやうな粉茶をひゆり
 太乙膏 碧玉膏など付あ也
 碧玉膏 輕粉一兩 土白粉一兩
 乳香 三々 沒茶 同 章腦 同
 右粉ふして胡麻油五兩蠟三兩入
 生肌散 象牙の粉二兩 赤石
 脂 三々 天蓋 五 右粉ふして用
 洗葉 葱白 艾葉 甘州
 干山椒 右各等分せ洗ふ
 拈痛湯 瘡毒五年も十年もた
 痛く骨のこもふやふなりらる
 痛く行歩かゝるは用て
 防風 荊芥 連翹 麻黄
 皂角刺 生地黄 熟地黄
 牙硝 右粉にして土茯苓半
 毎日二貼用七日程して驗あつ
 仙遺糧湯 瘡毒又い風毒は
 誤て輕粉水銀をの筋ひきた
 骨うはき肉やふま行歩ら
 骨うはき 土茯苓 防風
 木通 薏苡仁 白茯苓

女入て又よくとり合せさそと土茯苓令一
 斤に水八盃入五盃にせん五ツ母
 日毎毎日一盃五室散を一分と加
 一瘡下いあつて空心は用ひ上ふあつ
 食後二用十盃をて用てあつ外
 らい五倍皮硝のせんゆすあつひ
 生肌散のやうな粉茶をひゆり
 太乙膏 碧玉膏など付あ也
 碧玉膏 輕粉一兩 土白粉一兩
 乳香 三々 沒茶 同 章腦 同
 右粉ふして胡麻油五兩蠟三兩入
 生肌散 象牙の粉二兩 赤石
 脂 三々 天蓋 五 右粉ふして用
 洗葉 葱白 艾葉 甘州
 干山椒 右各等分せ洗ふ
 拈痛湯 瘡毒五年も十年もた
 痛く骨のこもふやふなりらる
 痛く行歩かゝるは用て
 防風 荊芥 連翹 麻黄
 皂角刺 生地黄 熟地黄
 牙硝 右粉にして土茯苓半
 毎日二貼用七日程して驗あつ
 仙遺糧湯 瘡毒又い風毒は
 誤て輕粉水銀をの筋ひきた
 骨うはき肉やふま行歩ら
 骨うはき 土茯苓 防風
 木通 薏苡仁 白茯苓

防己 金銀花 木皮 蘇皮

皂角刺 各五 白芥子 四 當歸

右でんト用也又瘡毒愈て塊と

なり癰のおくなく右の茶を粉

にして蜜めて丸ト又酒をひこ

て用の生物魚鳥茶酒又房事と

いひ一月餘してはゆ

金蟾 腹中酒 巨諸の療治よて愈

ふまは此酒を酔て用ひ衣物を

とれたひ汗を出してある有此

茶を用ひて七日乃内へ少し風よあ

たふをいひ又房事へゆるはでいひ百

日ほど根をたらしてゆり 諸白乃

好酒五斤 大蝦蟇一とひて瓶口

をよ封じて二時ぐらりと煮てかきめ

をた次の日取出して用の酔が出ま

ばあるあり

○翻花瘡 かくいひま

翻花瘡といひ瘡のんととるこれ

元氣よまき者肝火くま風よあ

て生む腫物の大小長短不同なり

頭大よして根小し小きの豆粒ほど

大なる菌ありて痛むてかくと

アやぶれ血なぐる八珍湯補中益

氣湯五味子麥門冬を加ふ熱あ

らば八味逍遙散を用ゆり風茶

を用ひて死を汗多くいづるあやう

誤て針灸をとれば腫物いよく

大なるりてしめりきかり

○茶方

藜芦を粉ふして猪の油とせり
はくは一日に一度で付くもべり元
氣そのよほでほくは膿毒なり
てぬまば努肉自ら入るちくさるが
又たあらかり

氷獅散 田螺たがしにて粉ふる日

砒霜石ひしやうせきのこみとそやく龍腦りゆうのう 砒砂ひしやうト

右粉にして唾めて経り腫物よぬり

其上をやつらるる油紙とつて

瘡の蒂乃細き糸を糸してほく

くるとけべ十日にして菌の中らる

瘡おのをもとれたるなりぬる珍珠

散をぬまばつゆかり 門かの油

八珍湯 廿八丁りふゆ

補中益氣湯 廿八丁りふゆ

八味逍遙散 百三丁りふゆ

○鼻痔 鼻の内より俗ユハ

鼻痔の症ハ風濕肺の臓より

て肺氣にるゆへ生どその形鼻

の内ハ石榴の子の中らるるの生ど

次第大なる鼻の外へ垂さる

鼻れ孔ふさかりて息はうへく

ふしきかり重きもの鼻癭

治方ハ辛夷大細辛杏仁各

右粉小して猪の油とせ合せ火み

てかやくれどくに経らるる

雄黄明凡輕粉麝香を少々粉
にして入丸綿まじりて鼻をさ
ぐ六七日して腫物ぬるなりと
なりしき硃砂を加へる

○茶方

瓜蒂散 瓜蒂 四 甘遂 一 明凡

田螺殼 草烏頭尖 各五

右粉にして胡麻の油にて移丸
て鼻の孔へ入ふとるいら茶肉は通
る其肉水とわりたるも下にて愈
鼻瘡とてた鼻の内へみ瘡と
生じたるは辛夷を粉にして鹿射
香少入綿にほみ鼻をふさぐべし
辛夷清肺散 一切の鼻の病

辛夷 六 山梔子

黄芩 麥門冬 百合 石膏

知母 枇杷葉 升麻 甘草 各

右生姜を入せんと用也

硃砂散 硃砂 一 輕粉 雄黄

各三 龍腦 右粉ふし外はぬま

水とわりておのぼりしめ血

百葉の石榴花を粉にして鼻

吹入るまじりて立知るとはなり

方 山梔子の仁を炒て粉にして入

○内疳 口の上腮に生じ

内疳瘡口の腫生じこれ
元氣の不足虚してたる初は蓮
花のよく蒸らいさく下へ垂て大に

なる。治方の鎌を其根を切ら
せて火針をあて血をとら雄黄散
をほくろ槐木を枕し其瘡の生
トある方乃頬をさへ口を合と
かゞ一ニ時ぐらうして口たのづら
合たり次の日膿を出し生肌散
を付く。

○茶方

雄黄散 雄黄 輕粉 胡粉
白芷 白欬 右粉ふして付ふ
生肌散 赤石脂 龍骨 同
血餘 同 輕粉 五龍腦 鹿射香
粉ふして用ゆる。

○口舌瘡 口中舌にツグ

口舌の病或はたれ瘡を生ト或
は重舌木舌と名する其れ七情の
火うごき五味食やぶらうゆゆ也
口瘡の黄栢皮を両 青代黒二々
右粉にひきつるをぐくくみ涎を
吐いてさすべしとららゆるなり
又方 生明凡を口に二時ぐらう
ほせて涎を切く吐いてさすべし愈
る妙なり重舌の大人小兒とら
ありなむびに木舌の腫てかき紫
舌のむく色は腫てらみ物い
はくし。ふ針をさす。まぐ兩をき
のしり。腫たる上を細き針をさし
やぶる。血紫なる毒わら。黒い毒な

外科

百六

一、さく付茶をとりわたり木舌とて
腫てくたへは百草黒やき塩と粉
み朝くみそ乃水とそ移り付る
又蒲黄を粉めて舌の上とそ
まひ移りうぐべし内菜は黄連味
をせんと用ひて心火と瀉とぐべし
舌烈て多し痛はうはが草車
前葉各考右せんと查をさうとの
汁は白蜜を加へ口ふさみてう
木舌ハ舌の下れは筋のまたは
うら大なる舌の先乃てくはさ
出て咽へ移り腫ふさぐるものなり
針とそ移り前茶と付る也
舌ゆへは血むびたしく出あは

槐花を粉いてひ移りくもは
こふふたり・舌乃上たらはら
腫て口外出ふを蜈蚣毒と云
鶏の雄乃血を盃に入舌をひと
せはこふいれちて入ふなり
木舌風とい舌の尖角は紅く腫
て破もがし針とそ移り切地黄散
を用ゆるし又連葛湯も宜し
唇かまは烈破も瘡生むらにち
芦甘石火と焙文蛤一面黄栢一面
蒼朮五々三破苦甘石とのぞけてのこり
三味とつりて赤色み粉とほて片
腦三分入より合せ蠟油とそ
まはくたぐべし

○茶方

連葛湯

黃連

升六

桔梗 葛根

明凡

甘草 各等

右つづりもきざみ絹にけみふくむ
づのこてもよし先針をして

後に用也

地黄散

咽喉門不出

今六丁の

○牙齒

きびこのやほひやう

夫齒ハ腎のあはうなり下斷ハ大腸の
經上斷ハ胃の經なり腸胃乃
中に風邪濕あるに由りて虫と生ト
まご斷れんてみて口くされたる腸胃ハ
積熱なり又齒ハ糸といへうごころハ
腎乃虚なり。上下の齒はよく痛

頭腦ハ引面發熱ハ大は痛むハ過

食辛熱のよきなり當飯 生地黃

黃連 牡丹皮 各 升麻 一兩

右煎トよくさほして用也。り痛

にやば石膏ニ細辛ト黃芩一

細茶ニを加ふ腫るハ防風荆芥を

各一五加ふべし。齒の根くさたれ

黒き虫ありて痛むハ王子の黃

白芷五麝香 一 右粉はして付る

齒ハ痛くもよきい虫牙にや

蒼耳子 陳浮麥 苧花根

花椒 蜂巢 蒺藜

右等分合せ古き酢とて久しく

とんと紙を蓋ふし温うると口

そぐ二度三度め茶水と共
に痰たのぼろ口につぐ茶を
内(の)じぶうに用ふ時必と風(の)
あふかす・虫歯甚し
ひまは 乳香 山椒 鶴虱 各一
巴豆一粒 右粉にして●これに
丸ト痛む穴へ入てとどる●牙癰
俗に齒草とよこぐは瘡生と
ふわり内外とも針とて●地黄散
と用ひ痰のふ金鎖匙と紫證散
と用ひ

○茶方
地黄散 咽喉腫のり 各五分
金鎖匙 同 八十分

紫證散 紫金皮二兩 荆芥五
分 風一北辛二 薄荷 澤瀉 各五
右粉にして荆芥のせん汁を用
齒を抜茶 紅花實 兩 膽凡 礪
砂各五 右粉めて齒にぬり手と
うてべとらつらねのふなり

齒固擦牙散 香附子十二兩
甘松二 石羔火一 各粉めて
齒にぬまは齒こころ事妙也

○疥癩れとぐいの
疥癩の風熱濕痰なり冬あつる
る後より小寒なる時たぐいの
れと大さ両方の腮腫つみ寒
熱とほ柴胡葛根湯を用ひ外

外科

小豆を粉にして玉子の白とみ
てこきぬるべし内熱口うるま大便
通でざるべし四順清涼飲を用也

○某方

四順清涼飲 當皈 柴胡

白芍薬 地黄 甘草 黄芩各

二連湯 黄連 連翹 升片

牛房子 白芷 右厚味と食

して胃熱あり小用也

柴胡葛根湯 柴胡 葛根

天瓜粉 黄芩 桔梗 連翹

石膏 牛房子 各二升片三甘州

右ザンド用也

批裏消毒飲 腫痛とて用也

ととるに用也

柴胡葛根湯 百五下り出

○頭瘡

頭上に瘡を生じたるは黄連

五蛇床子に五倍子五輕粉五分

右粉ふしてこほの油を移りませ

荊芥を葱のせんじ汁をそめて

茶を付る湿りたるは燕窩土

黄栢を粉めてひきろくはわら

禿瘡久く之を膿出細うか

虫のふい潤肌膏を用也

紅餅瘡といふ小兒の頭生ず

胎毒なり生艾 白芷 大腹皮

葱の白と右のせんじ汁を洗ひ

きよめぬぐひかきしめて生藍の葉
に蜜を入にきてかきやくぶくま
しめて付へし。大頭腫又ハ雷頭風
と名にけ頭面痛と大きにこれ
甚きハ咽ふさがり死と冬のころ
なる後多し此症をやむ傷寒よ
して寒熱身痛む。大頭腫脈浮
いして表症か。清震湯又ハ
荊防敗毒散脈沈か。羌黄湯
を用也。

○茶方

潤肌膏

胡广油 罌 當 故 五

紫菀

右ききみせんと茶うへ
は絹ととら查をさう油を再

ひせし黄蠟五入き移りせし
らへて付る。

又方 木油 肥皂肉

右せし肥皂を取し油を

さばして付るなり

荊防敗毒散 九下り出

托裏消毒散 久く愈じて

膿なるふ用のどし方

六君子湯 潰して後腫あひり

で膿色白きた川芎 桔梗 當

飯を加へて用也

清震湯 升 六 蒼木 蓮

葉一枚 右せしと用也

羌黄湯 羌活 黄芩 各酒

大黃酒酒右せん用也。り一兩
目鼻面腫め乾葛升一升
芍薬石羔を加。咽のれてひまひま
善蚕一兩大黃二兩蜜一を丸ト
用てよ

○耳瘡 耳に生じる瘡なり

耳瘡ハ三焦肝の風熱より生じるハ又ハ
腎虚火動れ症あり先發熱ハ
煖き痛むハ柴胡清肝湯を用也
外ハ輕粉朴硝白凡右粉あり
胡ハの油を付る・内熱ハ痒く
痛く膿出小便ちげく胸脇ハ痛む
けの痛ハ肝火ハ虚なり八味逍遙
散と煎し用也・耳中膿ある腎

の實熱耳に生じる瘡なり
膿しなるハ又小兒湯ありて水耳ハ
入膿するハ黃龍散を用也
合梨風ハハ兩の耳の下より
くを生じるハあくともて口のうらまを
すハ糸のうらまをねひきくともて
ときて地黃散ハ紫證散を合し
てせんト管を口へそぎ入る
耳の内ハ痛むハ菖蒲附子
つみやき皮と各二兩 粉にて油をとり
耳の中ハちぢれバ立処ます
百虫耳ハ入らるハはの油を耳へと
とげハ虫づるハ又方桃の葉と
りみでて耳とふさげばとららる

かり。又方葱乃汁を耳の中へそ
 べおのぼる。づるかり。耳に終はる
 つまきこめぬは通穴湯を用べし
 ●耳の内へ何れをも入て出ざる小兒の
 絃を切て切口をひろげやううめて
 膠をとりうして付耳の内へ入て
 して引出せばづるかり。小兒の耳
 たるうみ血出痛む。五倍子二兩
 全蝎二兩 右粉にして耳の内へ
 移りこむべし。

○茶方

柴胡清肝湯 柴胡 山梔子各一五
 黄芩 人参 川芎各一 連翹
 桔梗各八 甘草五分



八味逍遙散 當歸 白芍 茶

茯苓 白朮 柴胡 車前子

牡丹皮 甘草 枝子仁セソド用

黃龍散 明凡 黃丹水子

龍骨 一 胭脂 麝香 少

右細末して用也まの綿をかき
 たりはきして耳中の膿をとりて茶を
 耳の内へひわりして毎日用也風と合ふ
 かうぞ。耳の内へふふ大きふつて虫の
 やうごころ。或は血水出或はかた痛
 たかたは蛇退皮を黒やきふし
 粉ふして管めて耳へ吹入し
 地黄散 咽喉門あり 八十六丁め
 紫證散 牙齒門あり 百九丁め

通穴湯 地黄^分 黄栢 麥門冬

各二當飯 桂心^分 右煎服と

○骨槽風 耳の前より

骨槽風ハ肝脾やまじ厚味を食ハ膿

となる初ハ耳の前頬をくくひハ筋

骨をみ久きとたハ腫ひろがる寒熱

瘡のぞく口くひとくみて食くハ

初ハくハゆる服くくハ口あけて愈

ハくハみはくくハくハくハくハくハ

治方先口をあくべき所をあてて

外ハあててくハくハくハくハくハ

灸二十疋をすべし又腮くくハくハ

針とくハ悪血をいじ腫たる上ハ生

肌玉紅膏をくハくハくハくハくハ

ていハくハくハくハくハくハくハ

散火湯を用ゆべし 百九十三下ハ出

○茶方

清肌玉紅膏 白芷^五 甘草^一

當飯^{二兩} 乱髮 輕粉^各 白占^{二兩}

紫草^二 右白芷甘草當飯紫草

の四味とごはの油よひくハ二日後ハ煎

トて茶をくハくハくハくハくハくハ

三味を入蠟を加へておるなり

清陽散火湯 升麻 白芷

黄芩 牛房子 連翹 石膏

防風 當飯 荊芥 甘草

白疾黎 右生姜を入せんと用也

○鵝掌風 手足のくハくハくハくハ

鷲掌風の手足陽明の火かり以外
寒冷をうけ皮をさす或は瘡れ餘毒
いよいよはきざしと此症をいふん
初はひらき色はさして白くは
ぶくと出久き時ハ皮をさすやれ
さうはとやほど・治方ハ杏仁皮を
とさ輕粉各各粉ふして猪の油を
移り付て炭火の上を二三度
さして艾を麥粒をこぼして搦指
のかしらの中に入れて灸を三壯と
しとびたてとす
手癩瘡ハ手の内より豆粒を
あつてとちりたてとす
癩瘡ハるも水で洗つたり重き

荷を持者にけなく生るなり
石灰二兩火を赤く炒濃酢を
入水銀二匁加へてせ鳥の羽を
ていへ

○某方

二礬湯 明凡 綠凡各各 細茶五
側柏葉五 右水十盃入八分に煎
トねら外は桐の油を手の内よぬ
ア前のせんト汁を薰ト洗わり
○腫瘡
夫腫瘡ハ兩のひらきと生る
なり初はひらき腫ていふとさ
寒熱とるもの外邪濕熱なり
擯蘇散加味敗毒散を用へ

毒さるる寒熱膿をらじ口うた
不食をらるる益氣湯に茯苓
芍薬を加ふ

治方の常の洗茶に胆凡と大加
皮のむくるをどあひ没茶乳香
茯苓甘草各等 右焼明凡と少
加粉ふして上よりひくけ上

かやくとくる翌日かやくとくる
こいば膿茶こころはきこくるり
其あつ赤し其し紅駒引草の花
の油と酢を少加あてめて瘡の上

わらかやくとくる付ふなり
膿瘡はよく痛むは金花隔紙
膏四應膏一日二度付ふ

水こそあつら瘡風をわてはて
はくべし若膿くまき愈肉あつら
かへどしそりのかやくとくるだ

あつら生薑の汁をぬた所あつら
べし又かやくはねむを付べし又生
薑葱のせんと汁を瘡をわひて

後にかやくとくる又瘡虚ふして痒
かば痛まざるも附子肉桂を粉
にして少し瘡の口はぬて上にか

やくと付ふ又年久き膿瘡内外
肉たれぬるもはまら大根一斤を切
て葱四両を入り煮熟しその

湯を瘡と洗ひ大根と葱とほき
たらしそほき一日に一度あつら

けし油紙をてて絹をけみまじり
 五日たてて後四應膏を付だ
 腫瘡久しく口愈む或はた痛
 甚臭きものは隔紙白玉膏を付内
 茶の蠟凡丸と用の足をあげて端座
 ありあがりあがりすべからざる也
 脚腫物出痛と痒して抓破
 汁をさうし又うらりものところ瘡
 とかりは猪屎火を棋柳子釜
 片腦の花椒 龍骨各三濃の六
 輕粉を加へとろりこたひひ移り
 かき時いほの油とてとたててけし

○茶方

檳榔散 棋柳 紫蘇

木瓜 香附 陳皮 大腹皮 各一
 木香 羌活 右生薑 三片葱
 白三根 水煎し 空心に服す
 加味敗毒散 薄荷 瓜薑
 白芷 烏梅 生黃 黃芩
 飯尾 半夏 桑白皮 茅根
 燈心 右せんト服と
 益氣湯 此方りよ
 金花隔紙膏 黃蠟 西胡油
 西乱髪少入て同トくヤント髪のと
 ろろり炭うらひ大黃 黃連 黃
 芩 黃柏 各五 小いりりりり
 と死粉りて乳香沒薬 各五 粉に
 同トく肉をいれまぜり

ト汁

百十七

腫もせぬ痛もなく膿もせぬ熱の
 して口かひき小便もろく陰疔の悪
 疔も中々治る事なり治方陽
 疔かきながら蒜を敷て灸とて
 さて活命飲を用て毒を解し次に
 補中益氣湯に茴香白芷とく
 六味丸を用ひ精氣を補ひ若色黒
 く痛はざらば桑木をうすくして
 灸をして陽氣をめぐらしさて其
 後十全大補湯八味丸等を用ひて
 脾胃をうるかすに源さんにはる
 るへ多く生を得たりあるは誤
 して腫物もろくを外治とるにた
 生氣をやうりて死とるなり

○茶方

補中益氣湯 廿八丁りふ出

八物湯 廿八丁りふ出

八味丸 五十丁りふ出

大乙膏 廿五丁りふ出

活命飲 卅三丁りふ出

六味丸 五十丁りふ出

十全大補湯 廿九丁りふ出

○山散 甲瘡

此症多し履物せむくして指の甲
 を損ト四方かめ腫てたり五
 の指に次第しうつり濕りたれて
 後に足の甲よ上て火傷のやうな
 たりてあるはさうさうなるは方先

陳皮の煎湯にひじやひさし
して甲肉をさしひくくものた手
軽くして肉中の努肉を切ら蛇退
皮ツ霜ふし雄黄羅粉にか
りて瘡上へひ移りくはかりあま
瘡まごはのあづらそまきそ付べ
上まはかりやくはかりとさり
又當分のかうたさる感どしは
明凡大 黄丹少 輕粉少 細末は
てひ移りゆを

○下疳 俗にさくこふ

凡陰頭玉莖腫痛とて瘡を生
ずる氣血の濕熱によつて風有
毒ありより發せ玉莖赤く

を痛くしてたま濃汁をじ日夜
かまをばえん甘草をせんして志
きういあひ羊角の霜を粉か
古酒うそ三五分づ用ひしり
さまゆふいそまば八正散を用ゆ
腎虚して瘡を生じたるは黄
柏蛤粉等粉にしてぬふる
久し房事なく淫慾うそきて
精をやう初り粟粒のく赤く
腫潰へたれてくぐり入痛と瘡
を妒精瘡といふ治方地骨皮蛇
床子をせん其湯とて玉莖を
薰下めし後黄連 欬久花
等粉ふして垂りて付る

銅六散 男女老幼の陰瘡ふじ
五倍子五明凡乳香五輕粉少
銅六少粉いして瘡をよくめい
てい移りのふなり

○婦人陰瘡 玉門ふらふ

女の陰瘡下疳はあられれり
七情の鬱火肝脾の破も濕熱
のりとなり腫物の形子宮外へい
で蛇の下く又菌乃びく又雞
冠乃やうなるもあり内入虫と生
腫て痛く痒く小便あつたは
朝に補中益氣湯晚に龍胆瀉
肝湯を用ひ瘡をば苜飯湯と
洗ひ雄黃藜蘆散をいわり

ふなり 陰中より虫をい
生くくくして虫のぶくくするめ
其虫膿よりつてとらいら死と人を
して發熱せむ其さら勞瘵のど
くすう蛇床子をせんして洗ひ後
梓樹皮をすりまか粉に一畝
明凡を四一ぶん金麝香少一加
て是とめりてめんとし効驗あり
陰門より入桃乃葉をほきた
どくくして陰中よりよ
玉門腫てめらんと石のどく痛
とたへく大小便通せん死
とすらめ枳實陳皮各四つて熱
きを絹ま包し偏身上より下まで

ト斗

その一別して陰門の上をささり
 に慰んでさむるこたへ取るもべし
 實の香咽に入事を覺ゆまへ痛
 や腫ひきて大小便も通さるなり
 婦人乃陰痔の草烏頭七ツ湯
 やきふして瓦釜に酢を入ひらよ
 せんと桶の内へ蓋を孔をばあけ
 其上に陰門をあてて薰ぐべし
 陰内ひゆるは呉茱萸を水で
 洗ひ二十粒分とくふ粉ふして木
 綿にほみ常に陰内へ置き
 へれのほうよく治さるなり
 月水ちぶらて腫あつたは菖蒲
 當飯各一 吳茱萸半 右三種剉

葱乃根を入れて常に如く煎用ゆ
 難産の子宮外へ出ておぼ
 らざるは烏賊三 黃石五倍子一
 右末にして石灰を沸湯またてする
 して子宮をあへいさそ右の烏賊
 乃末を付てねし入ふなり。一方
 にさ糸あつたをほきたらじ
 まで其汁をあらうもよれり
 交合して陰門やぶらるるは
 芍薬 黑豆各五 地黄 干姜 半
 甘草 少 葱の根十本入三服に分
 ちて常れよくせんと用ゆ

○藥方
雄黃 藜蘆散

雄黃

外科 百七三

輕粉 竜腦 各一 鱉頭 一五三
右粉小して付べし

又方麻子仁をほきと出ふる

さ糸乃のらふねんばのぼく

吸入ふとまいらあひさるべし

補中益氣湯 廿八丁クホ出

龍胆泻肝湯 龍胆 連翹

地黄 澤瀉 各一 木通 當皈

車前子 山梔子 甘草 黃連

黃芩 各五 大黃 右セウガ燈心と入

芎皈湯 川芎 當皈 白芷

甘草 龍膽 各各 せんト洗ふたし

ゆりも各々け目五々がとつ用也

婦人脚了 足のきかり

婦人乃足に瘡を生どるハ三陽乃

風濕下れどころうて散せざるゆゑ

痒とほて後たりふいとたるとあり

又まふはどあるひいさうさぐへも生

とるから先わのき湯とせあひて

枯礬散を付べし

○藥方

枯礬丸 明凡 石膏

黄丹 各各 右三味粉あて用也

○瘡發 手足其外肉の

瘡發内より毒づるいあは天地

不正の氣風邪をうけて生ど多く

手足の真中めやまらるる所又ハ

腿腰腎下帶しよめいの亦也

外科

生腫ひろがりて頭かくさむけ
から發熱し手足たぐひきれ
る事甚し治方癰疽の類
とあへてととくし初め方
丹を用ひて汗を出し表氣を散
どべし●若十日や過ても腫ひ
く膿とかりんとするに托裏消
毒散を用べし付茶の癰疽の志
くみかして玉紅膏雞連膏と
をほくを

○茶方

萬靈丹 蒼朮 全蝎
石斛 天麻 當歸 甘草
川芎 羌活 荆芥 防風

麻黄 細辛 草烏頭 皮を
川烏頭 訶首烏 雄黄 六
右粉にして蜜めて鉄炮の玉やとみ
丸辰砂を衣と葱の白根の煎
汁を二粒用ひあつ物をみき
て汗をさすなり

托裏消毒散 世三下り出

玉紅膏 百九下り出

○蝸牛瘡 手足に生じ

蝸牛瘡は多く手足に生じ初め
菜黄乃ごとく痒みぬなり痛
をさしかけむたもるかかれ孔有
久きとれ虫を生じ
杏仁 乳香 各三 硫黄 輕粉 各一

粉に胡广乃油三黄蠟五セド
ころく前の粉茶を入りやくれど
く移りよきはしてほるなり

○疥癬瘡 ひざのこころ

五疥五癬風濕内湿五藏み毒
をほむより生じ又外よりうつり
あり疥俗よりせがごと又内湿と云
とのわりゆくして上皮わりくと
れはる乾疥といふ腫て痛く水な
がると湿疥といふ細ふしてつらめ
くしていら赤き砂疥といふ
肥癬疥癢癬あつこきも同ド
て熱燥風毒皮肉にこり生じる
なりけりなりと白き粉わつり

肥癬なる乾癬ともいふ虫のそと

とくむらぐやくらけりるつらと湿
癬といふ痒も痛もなると頑癬

といふ皮厚くかたを牛癬といふ少
し痒く白斑なる馬癬といふ治

方いづれをも加味荊防敗毒
散を用べ體虚したる人々風毒

を用べうらば年久しく愈す体さ
やがる人々頑癬丸を用べ

乾癬の生姜一兩切へぎ内は塩
と塩梅を入紙に包も焼て灰とな

し人言乃粉を入ふかりとるいら
一とりに治を

濕癬の明凡 黄連各五

女科 百病

胡粉 黄丹 水銀 各三
右粉めて猪の油二兩入はいて水銀の星
をさうて錫の器に入置てめく
牛癩 烏梅 各三 蜂蜜 一
又輕粉をひいてさうめく
馬癩 馬鞭草 鉄器を用ひば
きそえたり其汁と半盞用也 平日
の内は愈ふなり

○茶方

洗茶 荊芥 黄柏 苦参 各多
痛腫ふは山椒目 痒きは蛇床
子をかへてせんじあふなり
疥癩丹 此茶を用也 根を切也
白芷 白茯苓 白蔘 各三 苦参 水二日

二 枳壳 麦冬 連翹 羌活 各七

枝子 當歸 荊芥 各七

右各粉めて蜜と揉り梧子の大

丸ト一時に五十粒づ用也

便易散 香附子 半 檳榔子 三

胡椒 蛇床子 西明凡 一

右各粉ふして推の油と揉りて付ふ

きまめて功あり

合掌散 樟腦 水銀 蛇床子

白芷 胡椒 各五 明凡 大風子 十

右粉ふして乃油と揉り丸じて

手の内にてわきとらぬり鼻と嗅べ

加味荆防敗毒散 百十キウ出

土大黃膏 一切の肥癩新旧にか

百病

三黄散用いて妙なり
 硫黄 川椒各二 右粉めて土大
 黄乃根をほきて汁を志がうせんと
 てかやれどくにならんとて右粉
 茶を入軽粉を必加へて混ぜて
 のど一年ひききひせん酢を加
 下

○癩風

紫癩風血の滞なり白癩風氣の
 滞なり風湿なれど氣血めど
 ざるゆかりまの生姜の志がう汁
 してかほす成とろひき三黄散と
 生姜乃汁よひてぬるなり後よ
 黒く次乃日まぬる黒くかへるる

時いつゆかり

黒かほとろ

白粉五 硫黄三

右粉にて玉子の白とろと移り付る

白るほとろに硫黄輕粉杏仁

右粉ふして生姜の汁と付るなり

黒白とろ小青黄散を用ゆ

○茶方

三黄散 雄黄 硫黄各五 黄丹

天南星各三 密陀僧 明凡各二

青黄散 白土黒白とろ小用ゆ

青塊 黄硫 明凡 大黃各

右四味粉ふして風呂に入かほ

すをば胡桃の木皮をたごひこれ

よそとろひきそ右れ粉茶をほる

外科

附子散 附子 黄石各分

右二味粉ハなほどと布ハとてそののハなまどひのハとてとりひた

て付ふなり

桂黄散 白ハなほど不用也

桂心 硫黄各分 右粉ハ酢ハとて付

木香散 木香 老毒各分

大黄 黄栢 山施子各分

右常のハとてせんト用也

胡麻丸 黑胡ハ 防風

石菖 威灵仙 苦参各分 附子

獨活各分 訶首烏各分 甘草分

右九味末ハとて丸ト二五分で用也

○風癰 又血風瘡

風癰ハ脾胃肝の湿熱ハなり 荆防

敗毒散を用也ハのたじと塩湯

みて洗ハひ小刀ハめてりハとて

明凡硫黄 右等ハ分粉ハとて酢ハと

移ハりて付ふなり 風癰ハいハとて

ひハてて大黄を粉ハめて酢ハとて

移ハりあハまセ布ハとてみハとて付ハと

一方ハに膠ハを移ハとて付ハ紙ハとて

二時ハとてハたきハとてハとて 白銀屋

乃ハいて酢ハをハとてハとて

の草ハの根ハをハとてハとて

血風瘡ハなり 風熱ハとてハとて

きて生ハとてハとてハとて

とてハとてハとてハとて

外科

百七

や汗出さむけざり不食し身だる
きものなりむきそ風葉を用べぐん

○茶方

荊防敗毒散 廿九丁末出

簡易散 石膏各一 硫黄五

右末して猪乃油とせ付ふかり

大馬齒膏 馬齒 中あひくる

輕粉一五 右粉にして胡乃油と

て紙の紙をひろけて付ふかり

○湯火傷 火やけど

まの湯火傷とも小塩を酢とせ

きつけて酢をちげくぬまは當分

乃痛をやひるわり重きうは急に

生地黄をばき酢とせ紙の合せ厚

くぬるべしとみとどひかりあはり

ひる物水泥などぬまは熱う

つて冷氣をうけ筋骨をたらう

かり。玉子をぬるもは。さなうと水

うそとせ付べし大なるやけどは

さなうと湯たててあびては。又方ひ

ふも十五山梔子三五右粉めで蜜ま

てこねはくはさきいぬるなぐり

ちういつらて痛をやひるの名方あり

湯やけど火やけどなまきいひまは

生明凡を粉にして胡乃油と

てとせ付べしとみとどひかり

柳の

枝を灰もやきて粉にしてぬるかり

相よむせをがう汁を其病人の口

身おつし大小便通せざるは
加味八珍湯を用ひべし

○茶方

加味八珍湯 當飯 芍薬
川芎 生地黃 黄芪 黄連
黄芩 茯苓 山梔子 木通
甘草 右等分せんト用ひ

○跌撲

折傷へ外皮肉筋骨をうちやぶり
たひ治と内臟腑を損ざるあり
治せん・高き所よりねらて内は瘀血
有て腹脹脈堅かるへ治と弱なる
へ死と又血大分出て脈細かりは生

く浮大數實なるは死と・高き所
よりねらて昏沈して醒と二便通せ
ざるは大成湯を用ひて大小便通
せざるは麩子そりてもざるは
獨参湯輕きへ復元活血湯筋骨
をやぶる血をぬれ獨勝散とぬる
べし又たむこと痲の上にはなごへ
落馬して筋骨をさみぶくまへ
延胡索一兩はきて粉小豆と酒ふ
そぎこ一ふで用ひ

うち身くらき或は金瘡矢をもち
あらし筋き骨損しうづき痛
てやはど肉生せざるあり
乳香 没薬 羌活 紫蘘 細辛

草烏 蛇含石ひょうご 降真香

當皈 厚朴 白芷 蘇木

檀香 龍骨 天南星各二

麝香三 花蕊石ひょうご 五々

右極細末いと痲を葱のせんと汁い

てあひひきよめて茶をいれりい

乃上を古ききぬきききいて去らう日

に一度づ取ぬべし速に愈いる

總トてうらこの方芋麻乃葉莖い

とふよくや黒やきふと酒と酔い

どづ用也折傷いはへうとんのこと焼

酎いとてらて付る又方生姜麥

の粉水いとて移り付ては接骨い茶

山藨い山芋生いとてり合せ付柳

乃皮にてはきしては又方肉桂乃

粉を膠いとてらてはひい承いあひくぬ

と其うを嫩柳と箆いをあいは

みわくいかり

○茶方

復元活血湯 當皈 芍薬

川芎 蘇木 牡丹皮 枳殼

瓜薑 桃仁 枳榔子各六分 大黃二

右煎ト用也

大成湯 陳皮 當皈 蘇木

木通 紅花 厚朴 甘州各一

枳殼 朴硝各五分 大黃三

右せん蜜を加へいついきいな用

獨勝散 大黃一 石灰六兩

大蒜とほきはせて血を引く
付子其外一切れ血とめ小妙也
回春再造散 銅錢五文酢にい
木香一五 自然銅 麝香一分
右粉にして一匁に酒とて用ゆ先
病人の口に丁香一粒をうはせて
茶を用ゆ一匙上にのむ食後下
にのむ食前も用ゆ即日ちか
べ次乃日又用ゆちか筋骨やぶ
まざるもの用也べがす手足筋骨
うらむにけたるも用ひて妙なり
獨參湯 人參二兩 大棗一枚 生姜十片
右水煎し徐々と服とす
○破傷風の口を風をいれり

破傷風乃疔の金瘡或は腫物れ口と
合さず或は産後より前より風邪内
よ入或は湯をけしひ灸をしてその
湯火の毒内よ入破傷風なりと
の風邪經絡傳入裏よ入寒熱
甚しく口を嚙牙をくみ身とくみ
反張糸を糸沫をくみ陰よ入
い身の自汗破とる所くむ
入たりあくをれたり死する也
治方の傷寒と同其症表にあ
ら汗を出し裏にあらば正半
表半裏にあらば和解とす

○茶方
如聖散 蒼朮 細辛

川芎 白芷 防風 各一匁

右粉にして五七分酒にて用也
禁物の油けり類五辛生魚麩類
をいじやう・熱あへ茶にて用ひ
汗を出す・金瘡血止ごんべい
かしてひきりかくれ・悪瘡久しく
愈ざるは水をとろみ洗ひきぬ
てぬはひるまうひきりかくれなり
犬にうはまは蠍にきれるは口み
塩水とくろみあててきり付
やけどこそ皮たれぬるは新汲
水とて移る鳥の羽とてほくろ
ひざんはごはれ油とて付家也
○頭瘡

頭に瘡を生ざるは黄連 五匁

蛇床子 二匁 五倍子 一匁 輕粉 五分

右粉とるは胡麻の油と調先荊

芥葱のせんど汁とあてて茶と

付て湿りたきとるは燕窠

土黄柏を粉めていじやうくは

禿瘡久き髪落ひざんのま

白き皮ありてかきり瘡頭は満

孔より膿いで中い小き虫を生じ痛

るじてつるぬるは潤肌膏を用

小兒の頭は胎毒とて大分に瘡

ぼるやう紅餅瘡ともつたり生

白芷大腹皮 右四味細末一葱煎

ト湯と瘡をあらひうぬぐひは

藍乃葉に蜜を入ほきてかきやく
のぶくやくと茶と入て付ふなり。
大頭腫と云の雷頭風も名はくこと
濕頭に出るなり故に頭面痛も凡
甚しき咽ふごとくして人を害するなり
冬あつらるる後此症多し傷寒に似
て寒熱し身痛じとあり表裏に陽と
けらして治と云し若脈浮めて右れ症な
らば清震湯或は荊防敗毒散を用
むし脈沈みし裏症なりは羌黄
湯を用むべし

○茶方

清震湯 升麻 蒼木各二兩 蓮葉 一枚
右三味せんじ用む

羌黄湯 羌活酒と 黄芩 同

大黃酒と 右せんじ用む。若兩眼
鼻面へりて腫ふは乾葛升麻芍
薬石美を加ふ。若耳の前後額に
生じると瓜蒌仁牛蒡子を加ふ。若
咽腫痛じは姜虫一兩 大黃二兩蜜とて
丸と用む。若表裏ともに解して腫
消せざるは針して血をさす通關散
と鼻へ吹入て嚏させ其毒をのりば
通關散 細辛 牙皂 各々
菝葜 羊躑躅 各
右細末して鼻に吹り久く愈
膿とわらんとなば托裏消毒飲
を用む。若潰へて後腫赤じてら

す膿すの色白く出るは六君子

湯に桔梗川芎當飯を加ふ

潤肌膏 胡广油四當飯五

紫艸一五 右せんじ茶六細き絹

にてこしかど張らうて油をそそびせ

ト黄蠟五入てうたせせり

しゆら張すらてとり付べし

又方 木の油一肥皂肉八

同トくせんト肥皂をそらて油で付

べし

托裏消毒飲 世三下ふ出

六君子湯 世八下ふ出

荆防敗毒散 世九下ふ出

○面瘡

男女小兒の面は細なる瘡出て常は

なまらうるは桃の花を陰干し

粉をうしそめて用ひ外は杏の花

乃せんト汁を洗ふ 又ハ白粉

乳香各猪油一をそらて付ふ

面躰はふ赤く或ハ黒く若ハ丹

乃てくわたりたるは急は療治せ

とバ總身はひろうて死を急は鹿

角を灰は焼て猪の油をそらくべし

頭面に孔を生じくさるるを

ゆきんやあは遊面風とせらる

古き砂糖を酒よりききまぜ日に

三度ばあはらぬらるべし

面躰ゆるきて瓜のぶく皮破る

立ころろにありてくくいのるるなり。
面胞は川槿皮二硫黄日輕粉二
杏仁とろり皮麝香少

右粉めて卵の白とふてさらけ付る

○丹毒 くらりてなり

丹毒は小兒に多しこれ濕熱よ
り發し又肝乃臟の不足を血さ
たはらぬ或は母五辛厚味を食し
熱よりめて火さると總身赤白ま
だらにたり悶て腹くら其熱火れど
とくに陰丸入るるとの死を。
齒草は 雀虱 蝮竜 温青
右等分黒やきふして丹を少し

かへら柚乃葉と蜂房とあひく
等分を少し入てせんとあひひと
乃あへん此とらとほくらなり。
小兒の脐の穴たどて悪瘡とな
る汁いぐるは玉不留行乃実と
くらるる死よしてほくらなり。
脐草は暮れ黒やきふ輕粉少
し加へて湯とそさらけて付る

○茶方

錢氏通用散 朴硝 辰砂
藍葉 浮萍 水荳
右等分はきき其汁をあはじ
一方 朴硝二兩 大黃五兩
粉にして水と移り付るなり

栝葉散

側栝葉 五々あぶつて

蚯乃糞

大黃 小豆 輕粉

黃栝各益

右粉めて水うて付る

青泥散

鹿角 青麻

右粉めて水うて付る又此茶腫物

乃寒熱をころころふり付て

升麻葛根湯

升麻 葛根

芍薬

柴胡 黄芩 山梔子

甘艸 木通 生姜を合ん

ト用也其外痘疹夜啼も用の

人參敗毒散

牡丹生じて總身

化斑解毒湯

火丹生じて總身

の痛と痒とあるは治と

玄參 知母 石膏 牛房子

黃連 升麻 連翹 甘艸各分

淡竹葉を加ふ

除濕胃苓湯 丹毒たは痛

いよ用の 防風 蒼朮 白朮

茯苓 陳皮 厚朴 山梔子

猪苓 木通 澤瀉 滑石

薄荷 甘艸各分 燈心を加前用

凍風の寒氣と氣血がぐるぐる故

かり久きいたまてかめりなる痘白

茄蒂とせんしあふる

霜燒茶 牡蛎乃白燒を髪

油とてこめて付るわり

○漆瘡

漆瘡の漆の中はほとんば熱の

はく面目もくしてほくくするて
かゆた取を爪水なぐまなむたも
のい總身豆れどく膿てかゆき痛
をるんわり・生癬乃黄なる取と
アて瘡の大さを宛付べし・砥汁と
付るもよし・柳の葉をせんト洗
ふべし・汗瘡は青蒿とせんト
わりふべし・又束の葉と洗ふも
あり重き瘡の下にかりかり
菜豆粉 滑石各五 右粉ふて絹
にほみてよりりとりとて瘡と
かりたるは黄栢束葉各五片腦と
少く加ふべし・竹木刺肉よふく入て
ぬけがたは甘州乃粉と膠と添り

付てぞけだのぼくぬる也・又方
象牙の粉を梅の肉よほきまぜて
付べし・又方象牙の粉琥珀乃粉
を付べし・針釘などの折てぬける
は磁石琥珀と粉ふして添りて付ふ

○茶方

三白散 胡粉一兩 石羔 輕粉 各
右粉めて蕪汁を付ふ

○小兒軟節

小兒の軟節は父の精と母の血と毒と
蓋てこま生どろかり破まざる針
と破る雞粉散をほくを

○茶方

雞粉散 雞卵壳 蜂房

黄連 輕粉各五巴豆 其毒也
右粉にそこほり油を入てせんト巴豆
を取出し油を移して付べし

○小兒遺毒

小兒の遺毒といふは父も母も揚
梅瘡をりし其毒を子にほこた
る瘡なり初は赤くまじはるに
つる甚しき爛なり内茶荆防敗毒
散を用ひ外は玉紅膏と付べし

○茶方

荆防敗毒散 九丁り小出

玉紅膏 百九十三丁り小出

○小兒痘風瘡

小兒の痘瘡の毒のこり肌膚に熱とぞ

め又外より風をひきて此症となる也
先細うかり瘡をたしめくから次第
くま所にうらうらなる出でし加つ
るかゆにてこまじ治方先葱を煎
どてあひま錢散をぬべし

○茶方

麥錢散 小麥一升 硫黃四 山椒
明凡各二 右粉にそ胡の油を煉付る
加味升 葛根湯 升麻 葛根
柴胡 黄芩 山梔子 木通
甘艸各五 紫蘇 連翹 防風を加へ
生姜を入せんト用也

○小兒胎瘤

小兒の胎瘤といふは頭上胸乳の間に生

腫起して大なるは鰻頭の如く小なるは梅李の如くこれら胎内の瘀血をこめて此症と有り治方ハ針とて破じ赤豆の汁乃中ふ黒き血づるとんち治しやと

○茶方

五福化毒丹

小児の蕪積胎毒諸

瘡癰疹口舌瘡痰涎胎瘤ふり

玄参 桔梗 茯苓 各二兩 人参 三兩

龍腦 辰砂 各五分 黄連 龍胆

青黛 皂角刺 各一兩 甘草 金箔 各五分

右粉ふして蜜とて豆を丸九ト一度二粒

二粒薄荷燈心湯とて用也泡瘡乃後ハ生地黄とて用也外ハ玉紅膏を

ほくろ

○鵝口瘡

小児のちとあき

鵝口瘡ハ心脾乃二經の胎熱上りて

わ口に白雪れくはぐりたるものなる也甚き時ハ咽の間腫て乳を吞

てたりとて夜啼をとり也治方

ハ先古き絹切と指を巻舌の上の

白胎をぬぐひとて氷礪散或る丹

豆散をぬぐへ

○茶方

氷礪散

咽牙齒口中の病ひと

治と 龍腦 辰砂 各五分 礪砂

玄明粉 各五分 右粉ふしてはくろ

丹豆散 黄丹 二兩 巴豆 二十粒

右のぢうぢう巴豆をさうて丹ぢう

ふんはらふ

瀉心湯 黄連を粉に蜜こ

水と合せの汁やて用也

○小児痘癰

痘癰はり不足と脾肺の二經

とほり手足胸脊にこぢりこ

腫ひろがるなり大さ李の如し此症

多くあつたれはうて後またる身

るをすしてすぢちれをよりとす

保元湯 人参 黄芪 白朮

甘艸 右生姜東と入せん用也

外に太乙膏を付べし

太乙膏月 廿五丁り小出

○小児痘疔

痘疔といへ疱瘡の毒心肝の二經

こほり初ら發とる時入し紫色を

る物ちぢかしく出て次の日黒く變

じて見ゆる毒あつたれはうして高

くろむひあり毒うつたれはうして

色こがもしてえめらねる節に痂ぢ

前後わり身あてふ痂ぢるむひ

とむひし肚腹腰は出て身熱し

面色こがれてこぢりこぢり治方

先針を痘疔をさうやぶつて太乙

膏をほくべし内某の煎粘子湯

を用ひ愈て後ハ八珍湯を用べし

○茶方

太乙膏 廿五丁りふ出

八珍湯 廿八丁りふ出

鼠粘子湯 牛房子 桔梗

當飯 甘艸 芍薬 連翹 玄参

防風 地骨皮 木通 天瓜粉

大黄 各々 せんし用也

○小兒葡萄疫 ぶどうのやうなる

葡萄疫とて四季の不正の氣を

け皮膚にこころりて散せば此症

とたる大小異なり色青く紫黒ま

だらめて葡萄のおとく出服しとゆ

ず後胃にはとく牙の根より血出也

先灸をて太乙膏を付べし

○茶方

羚羊角散 羚羊角 麥門冬

防風 玄参 知母 牛房子

黄芩 甘艸 竹葉を加煎用

胃脾湯 白朮 茯苓 陳皮

遠志 麥門冬 砂仁 五味子

甘艸 各々 せんし用也

○小兒諸腫物

小兒秃瘡は先白水をのりひきよ

葱をにきたららひ羚羊角の粉蜜

と入る粉をばせて付ふなり

小兒頭瘡は亀の甲を灰にやき輕

粉を加へてはるなり

小兒疳積はこれるは黄柏の粉と水

とて移り足の土をばとよ付るなり

小児の髪遅くもろくは香需ニ反
水一斗入三斗ニ反せんどは家猪ニ反の
油を入れてかき混ぜ其汁を付る

小児口鼻赤らうたぐりニ反草烏頭
灰ニ反やき射香等分ニ反付る

小児口のくさる瘡出ニ反くさして冬ニ反愈
ざるニ反葵根ニ反をとりて付る

同口のくさる瘡ニ反は檳榔子ニ反とす
だき輕粉ニ反を入れてはく

同口中の瘡出ニ反て乳をのまるとは
密陀僧ニ反の粉を酢ニ反とく足ニ反の土ニ反は

どはくさるニ反かり
同口ニ反びる腫ニ反は菜木ニ反の汁ニ反をぬる

同口ニ反嚙ニ反て食ニ反るとかまニ反く死ニ反せん
とるは蛇ニ反の脱ニ反を灰ニ反やき口中ニ反のど

ひきニ反めてはくはかり
同舌ニ反は瘡出ニ反て乳をのまるとは明凡ニ反

を粉ニ反して雞卵ニ反入酢ニ反の中ニ反をき足ニ反の
土ニ反はどニ反の一七日ニ反これニ反はかり

同重舌ニ反鵝ニ反口ニ反は焰硝ニ反と竹瀝ニ反とと
はく又馬牙硝ニ反を舌ニ反の下ニ反ぬる

同咽腫ニ反ふは杏仁ニ反を黒ニ反く炒ニ反てと
たがりくニ反これニ反をふくはかり

同齒疳ニ反は胆凡ニ反は香色ニ反は麝ニ反
香ニ反少ニ反とて入齒ニ反は付ニ反て妙ニ反なり

同耳瘡ニ反陰瘡ニ反又癩疽ニ反たニ反火ニ反み
てやくニ反やうニ反は馬ニ反の骨ニ反を灰ニ反や

きて油ニ反を付ニ反る

同膿瘡身の内をろりかきぬるは
黄栢の粉に明凡少く入てはる

同瘡を生じ總身面火をやく如
かるた粟を粉うして蜜を移す

同瘡多ううは杏仁皮をうてす
またらうしてはくふやう

生じ子臍あるうは黄栢明凡
粉にしてはる

小兒臍腫あるは荆芥のせんぶ
てのひ葱をけみやきふして火毒

をばきうすくきぎて付る
同罌丸るうは土竜の糞と薄苛

の煎汁を移りて付る

同瘰癧うは榆白皮を生して搗泥れ如

くして付る

同陰たれ木をせんくひるうは礬砂

水とすりてはる又方蟬脱を水と

せんく是をあふる

陰腫て夜晝とるは古き杉の木乃

節を灰と白粉を加玉子の白と

移りて付る

同梅毒口中に出總身はひろるは

上草薺を粉うて乳で用や二月

うてはる

脱肛久しく愈むあるは黄なる瓜蒞

二つの中明凡五々入口を封じ黒燒

て粉うは糊と丸く食のうゆ

二十粒を以て用ひてはつゆかり
同疱瘡の痕は胡粉二兩 輕粉一兩
を以て猪の油と移り合せてつ
くまひ痕なり

○失榮のそびるまじふ

失榮の思慮多きふより脾胃と損
腎火のほして痰滯多し咽喉項
生し百死一生の病なり初發は少腫て次
弟は太なるの如く石のてりて
色は紅たれざるに動ず一年がじて
痲いみ氣血なる形や後六腫物
紫色にまじりたり破れたる血
水をじて昼夜もいやくぬれ也
○茶方

和榮散堅丸 當飯 熟地黄

茯神 人參 香附子 白朮

陳皮 略貝母 酸棗仁 遠志

天南星 栝子仁 牡丹皮 各 芍藥

沈香 各 鹿角 二兩 辰砂 六分 衣

右粉ふして蜜まで丸す小豆粒の大小
して毎日八十九で合歡皮をせんし

汁を以て用ゆるなり

化堅破傷膏 蟾酥 二 輕粉 五

明凡 寒水石 銅錄 乳香

沒藥 胆凡 麝香 各 雄黃 一

辰砂 三 天南星 五分 右粉ふし先蠟の
油をせんし蒸を入りやくに経る付る

○唇風

唇風 下くらひのよき

唇風より六陽明胃火上をせり下くら
ひるに瘡を生じ初めはむして腫れが
まやぶきて水と流しむはじて愈む

○茶方

銅粉丸 緑青五分 胡粉三分 明凡五分

輕粉一分 麝香五分 龍腦一分

右粉にして先黄連一兩をきこみせ

しほめてかやくねふして右粉茶

と銘合せて小豆の大さの丸を毎日粒

で湯そとめて腫物をあきらむ

内茶より荆防敗毒散を用也

○結核

結核痰核梅核といふ三腫物なる

同類也咽喉項は生じ赤く痛ま
ずはどこれと痰のゆかりて散せざる
より發せざるものなり

○茶方

加味二陳湯 陳皮 麥門冬

茯苓 半夏 大黃 連翹

黃芩 玄參 防風 甘草各等分

右生姜入せんで用也外治核はうらま

灸を十壯とて次に雞連膏付じ

○鏡毒天疽

鏡毒天疽は耳のじろ一寸三分はの

て至命といふ所生じざるやう右に

生じざるを鏡毒といふ也生じざるを天

外科 三四十一

痘疹の頂より腫物(皆六腑の陽毒)上り蒸り也治方(腫物の上に大蒜をちりて灸をし外に陰陽散を用ひ)

○茶方

陰陽散 芍薬 白芷

獨活 石菖蒲 五倍子 荊芥

紫菀 右粉にして酢にて付

上り太乙膏を以て加減内托散

と服用とす

加減内托散 七十四下出

太乙膏 七十四下出

○腦漏

腦漏一名鼻淵とて風寒腦に令

又大陽の濕熱上りむすところにして
紅に色りたる涕又いた汁のやうなる
物をながり鼻の下常にあつたか
久き時に頭いゝみまひ立ぐみ
止るなり

○茶方

天麻餅子 天麻 草烏頭

川烏頭 細辛 蒼朮 甘艸

薄荷 甘松香 防風 白芷

附子 雄黄 全蝎

右粉にしてえんれ粉にて赤豆を以て

丸と毎日廿五粒が藿香れせん汁

て用ひ久き瘡は補中益氣湯六味
地黄丸を用ひ

補中益氣湯 廿八丁ウ出

六味地黄丸 五十丁ウ出

○枯筋箭 腫物筋痛

枯筋箭削鬱氣肝とやう筋外を
發するなり初凡赤豆の大さめて
日ひときとれ裂て筋かららるる
出髪のもれらるるやうく又いりる
のび多く胸乳のさるるに生ど
治方へ砒霜石と粉めて移りありを
線にほけて腫物乃根はひを
けびあばらるるにるなり

○茶方

珍珠散 やらてのら付るなり

紅花分五 珍珠一 輕粉一兩

右粉いしてぬりなり

○癰瘡

癰瘡とい生とて頰項にるびらうて
豆梅のくくゆきて汁多くるる
両耳の内外志う是足の少陽乃濕
熱なり

○茶方

桑根 桑寄生 各一 白芷 黃連

各三 右せんト毎日三度ワ洗ふ

茨栢礬 皂莢 竹皮 黃栢

黃連 白芷 明凡 輕粉

右粉いしては乃油蠟を入せんト

右の粉茶を入かりに移して付る

小まがらるる

眼子 脾胃に風熱結びて
 はぐら腫ふなり風れやれ浮腫
 て散ぢて治方 金黃散と付るも
 ころら針をて太乙膏とほく
 べし表症より荊防敗毒散裏症と
 清胃散を用ひべし

○茶方

金黃散 龍泉疽より 辛八丁りふ出

荊防敗毒散 比九丁りふ出

太乙膏 廿五丁りふ出

清胃散 黄芩 生地黃

黄連 牡丹皮 升麻 石膏

右でんト用ひ

○肺風粉刺

酒鼓鼻

此三種三名同種なり肺風と粉刺
 の肺は属と酒鼓鼻は脾に属とす
 べて熱とこほり内より有て外より

○茶方

真君妙頂散 硫黄一斤 附子五

蕎麥粉 小麥粉各一斤 右粉に

一同よこ糸合せれ平め陰干し

油して綿の内茶に黄芩清肺湯

をせんと用ひ

黄芩清肺散 枇杷葉 川芎

黄芩 當飯 芍薬 生地黃

防風 天瓜粉 連翹 紅花

薄荷 右酒を加へんと用ひ

付茶 大黃 朴硝 雄黃
輕粉 右粉に酢して付る

○合谷疔 大ゆびとひびきさしゆびの
合谷疔は俗虎口百了とも云是
手の陽明の湿毒とてわつて發す

ふわり初めはふわりて泡のつくわ
いなり或は熱とるわつて先初め小

針をかげやぶ血を出して玉紅膏
を付る

○茶方

玉紅膏 百九十三字やふ出

○中毒 ぬくのどぐいあま

凡ゆる毒のあつて先脈洪大
ふい生く微細なり死と云洪大に

して遅なるい生く微細めで數る

い死とるわつ

信石れ毒を肉食の中にあつては
治しやと酒の中にあつては治

かす胸腹乃あつてふ有て苦
ふしやば危は且凡をとり水と

そげいといちく若腹中にあつて
下とく黄且甘草青代黒 酸

硝 录豆粉 右粉にて用ひ下腹
痛は黄且录豆粉を二倍して水で下

川烏頭附子の毒にあつて心い
かま死煩悶甚き時の頭とく

痛く物身黒くわつて死とる
かたり 录豆又ハ黑豆をせんで

さあして水のぶくいて用也又防風
甘草をせんどさほして用急かる
時ハかりん冷やかり水を大ど
のせて吐り下さすもばつめり
巴豆の毒あつては大便腹下
或吐きいさも渴き発熱を急
黄連黄栢をせんどさつて用い外
冷水そ手足の掌とひそる
又ハ黄連大豆菖蒲をせんど冷
しめりぬ熱湯熱性の物といひ
誤て毒艸を食しかりひり
一の毒にあつて死せんとする
板藍根四貫衆青黛黑生甘州
各一粉にて餅とて梧子の大き

丸ト別ハ青黛黒を衣い急に十
四五丸をわくをぬらみたての水にて用
半夏の毒は生姜の絞汁を用
菌の毒にあつた地をりて黄
土をとり水よりぬき少いさせて
その上水をのますべし是を漿水
と云又楓木乃菌を食せば人を笑
でてやむいさるゝは用てはま
荒花をそのま粉に一五杯の水
はく用也下せばよし
●然智鴨毒
にあつたよりの糯米の白水とあ
たせりひてよし
●牛馬の
肉を食し毒を生やん烏柏根
一大豆一葱根一両生酒三杯入

月也... 自ら死たる六畜の肉を食し毒に
 あらば炒黄柏を粉にして一二五程用
 河豚魚乃毒であらうた急に清油
 を用と吐出とかり或は槐花乃
 粉龍腦粉も可かり至宝丹もよ
 鱧魚蝦蟆の毒の中なる生豆豉合
 と新汲水に半椀に汁を急用
 班猫の毒にあらば急は菜豆或は
 烏頭或は米とせん用也一方に沢
 蘭葉をほきて汁を用也若乾は粉を用
 蟹の毒にあらば紫蘆の濃煮
 汁を三五盃用也治とらる

誤て銅鉄を吞とらるは
 萬病解毒丸 大黃 連翹 大戟
 寒水石 白玉簪 白芷 黄芩
 茯苓 石羔 滑石 天瓜粉 各三
 甘草 薄荷 乾葛 貫衆 各二兩
 山慈菘 六兩 青黛 黑五 右粉にして
 菜豆粉の糊めて彈子の大きき丸
 一粒薄苛のせん汁と用也其外
 一切の毒を解とらる毒にあらば手足
 面青くはをとりとらるもの死を
 誤て鉄針を吞たらは蚕豆と煮熟
 汁と用也同く用れば針と菜と大便出
 誤て金銀等を吞たらは鉛一斤漸く
 又食とらばは出或は石灰少李

核 硫黄 少 皂角 刺 大 右ひらるは

先きて粉とる湯に入れて用也
誤て百足と吞とる猪の血を服用
去らるく有て生酢を油と和し口中
に吐け出す雄黄の粉と水と用也
誤て水蛭を食し腹に合て冬き時ハ
腹中にて子を生し肝血を食故に
腹痛とせたくく面黄と瘦せて食
とらるく治せざると死と
治方ハ田の土にかつてると何とも死
なる小魚三疋と猪の油を合てきた
たり又巴豆十粒を洗きたじりて泥
の中に入れし田の中の水にて十粒を
煮りて大小れ蛭みりて下ると

後四物湯に黄芩を加へて用也
生と脾胃を補ふなり

○茶方

四物湯 五十丁ゆ出

○魚鳥骨硬のものを煮

砂仁 甘草 粉ふて絹に少く包

のひや久くして骨痰にあがらて出る

又方人の指れ爪をやき粉とほ咽ふ

き入ては又方礪砂とふくめ骨れ

のぼろつる

神仙釣骨丹 辰砂一五 丁香一五

血竭 五五 磁石 五五 龍骨 五 各細

黄蠟 三五 入丸 辰砂を衣とほ

一粒 酢して用也 若吐せんとせば

荷をやせし醋とて用ひ後に濃茶と
用むべし矮荷がくべ桐油を用ひ

咬傷

虫咬物

犬咬傷 馬錢子をとりて
乳を付ふ ● 蛇に咬むるも急
草繩を或ハ髪毛にて急迫縛りて毒
氣を上へのげぬやいどべし 癩癩梨
の葉を搗たらし酒とて者醉か
用ひ其查とふはまゝ癩癩付べし
りハはまゝ二三日とて毒經絡入
ハ 藺艾をかはねる 服とて灸す
べし 其痛しやむべきハ治と ● 又方
雄黄 五灵脂 白芷 貝母 各等分 粉み
て二ふりて熱酒とて用ひ ● 又方 明凡

半夏

粉にして酢に付る

馬咬傷 ころよは其咬とて腫る服
に灸すすぬ又ハ人の尿馬糞を灰と
かりて付べし ● 鼠咬むるもハ猫の
毛と灰とをばして麝香少加へ唾とて灸
す付ふ或ハ猫糞をばくふもはし
百足咬むるもハ雞の糞をのり
ては或ハ雄黄を酒とて用ひ外も
付べし或ハハ蓼をとりてぬるかり
塩をかき付む痛しやむかり
蜂咬むるもハ頭の垢をばくると
は又油を付ふもよく或ハ鹽を付け
又ハ雄黄粉を酢とて付ふもはし
蚯蚓の毒にぬるハ眉髪落る水に

石灰を入て身とひする。又、雞の
尿をめるし。又、方塩湯と腫
たる脈をあひひくす。人咬や
ぢれく、亀の甲又、蟹甲を霜
粉とる。油とて、おろけくるなり。

○急救 せんしのるをどうやう

自縊死たる者、朝より暮まで
とも心下火、あきらむる内、蕪生者
なり。死人をいざ、あけ、繩をゆる
め、死さるべし。必、急に繩を切らる
か、げ、げ、の咽より胸に、徐々
と、按たれ。一人の初より、後、抱き
し者、次第に坐し、前より、病人の
足を随分、一処よ、よ、せ、て、肛門、開け

ざるより、いして、下、付け、仰臥の形、あ
て、せ、一人、の手、とり、て、病人の、口、鼻、と
わ、か、ひ、又、两个、て、管、を、以、て、両の、耳、と、一
時、吹、又、一人、の、強、く、其、髪、を、ひ、き、て、
手、と、と、ら、る、と、か、げ、さ、そ、其、手足、と、少
づ、く、屈、伸、を、せ、て、ゆる、ゆる、ふ、さ、す、り、ん、
魁、ら、は、白、粥、を、あ、せ、る、べし。溺、死、た
ら、ば、小、刀、の、や、る、る、物、を、口、を
ひ、き、筋、一、本、を、は、せ、水、を、い、て、一、命、
後、衣服、を、と、れ、う、衣、を、臍、の、中、に、敷
て、灸、を、し、兩、入、管、を、り、て、耳、と、吹、く
時、の、魁、者、者、や、う、外、は、皂、角、粉、
を、綿、に、し、み、肛、門、は、入、る、出、て、と、る
いら、魁、也、又、鴨、の、血、を、自、鼻、より、吹

入るべし。凍死の者ハ手足を口をくひはゆるかり少し息はくひあつべ火は向へ危に布袋に熱灰を入胸上にたきさしむべ熱をとるもべし目をひきさるると酒をあそめて用也又粥の上湯を用也冬乃比の凍死も此方よしよろし。中暑死したる温湯を胸腹をのし又洗ふべし若路を急かすべ熱土を臍の中へ入て人をして其上小便とさすべしよみあつたると水を用也べしすちまひやせば又死と。墜死たるものは豆豉をせん用也り氣絶して物よてなうざるものは急に口をひき

て熱小便をそぎ入るべし。打擲て忙然と人を見しと手既に死せんとするものは威灵仙一味を研き水に入查をこしとら半盞を服用とらつら痰と吐出してよみさるなり

○金瘡

凡太刀瘋鏢瘋矢瘋鉄炮瘋其外何れも鉄の類を切たるは皆金瘡なり先浅き瘋を皮やふ血をふるふは金瘡丹桃花散の類を以て血を止太刀瘋ふたは血をこむべし又遅く留へるは如聖金刀散う花苾散の類を以て搽け頭の物はよりからせと動くべしす軟

かるものゝ括後膿をなごの膏茶
を付ふ總じて金瘡の風寒をよどみ
冷たる物を思ひ多く出さる物の獨參湯
八珍湯を補之金瘡血多く出
てその脈虚細かる者ハ生數実大かる
者ハ死と血を出し脈沈みかるハ生く
浮大かるハ死とるわり頭の鉢切を
たると洗ふとぬいひ腸出たる手肩を
起と(さう)三十日より前起とへ
又日數に限らず見合とへ・面目
同ト色なる者ハ生く・面赤く目黄
なるハ死と・面青く目黄なるハ死と
・面目共ハ赤きハ死と・面黒く目青
きハ死と・額より汗出泪あつて悪寒

唇ろろみ五体とろみ總身ろろみ
かしくハ死と・血をくたてるとん甘くさ
きは生く・手足かりた汗出ど口どあ
きて時々あつとろハ大事なる・痲の
口から筋は出す血出ど筋の色く
とてハ脈虚弱なるハ大事なり不食な
るも又悪く・手肩の近所(青蠅來
るも悪く)痲口内(はく)とこみはか
血出どとあつた薄黒き色あつて
足ひのいざ手足切ると物身毛
たつて鳥乃肌(の)如き者ハ悪症なり
凡金瘡ハ先痲の深淺をみまけ一分ハ
ヶ脈の生死をわたり入経絡の部とみ
さう洗ふと縫ふも手なる仕りけ

ふを肝要とん平生心づけて手負の
圖をうらいて色々にて針を以てぬ
ては手練と云く。●死症をさる事
心の臓に胸にあり胸と腹との膈皮胃
の腑小腸腎の臓膀胱肺の臓膽乃
府肝の臓左脇の下咽此經の痲を
とれ即時に死と痲淺き生るこ
と有るも多分の死をさるなり

先痲の大小よりす焼酒をあて宋
綿を手拭とてあつひたす
たる血ひく或は毛或は土何れも取を
血をさわり出さず血をたれ時切針
に麻糸を通し痲の真中と糸三重
うけて一針ぬひをさる間を五六分

をさてよくぬいて又焼酒をさるなり
あつひ清の付茶を玉子の白
椰子の油を等分合せぬと痲
乃長さゆて玉子にひじぬるよ
ほけ其上も木綿を付て二重
どろぶせ其上に酢と水とを合せ木
綿二重をふひじれたるひ其上と巻
てをさる冬一日に一度夏に二度
付ゆら一七日ぬいて付る痛
なく腫れさるるとみゆる時々一ツ
間をあきて糸を切てさる又二三日
てのころ糸を切てさる其後れ付
薬に玉子の黄と椰子油等分合
せてれらんとるぬ油を加へるかき

まぜるに木綿を付て瘰の口へは
あつらひをほけて其上に茶性寒な
る膏茶を大きに木綿のべて付て
の上を酢と水と合せ木綿をひじふ
せて巻ておろかり付てやう前と同ド
さして愈肉八九ふもあつてよりの寒
劑の愈茶を用ひて。●腹と切腸
いせりて先手に椰子の油とぬり
て出る尿の腸を手のひで瘰の上を
ぬみて腸とそこはど手負れをぬ
どい出たる腸と嗅で糞乃臭をぬは
前乃ぞと焼酎とをあひひ出たる腸と
ねり入て縫ふかりたりこれ間三四分はく
見合せぬべし付茶前れをぬかり

木綿の一端をふて腹を巻き手負と
少しじろ物にゆるむらせ置也瘰愈
て後糸を切へ。●骨など碎たる瘰
鉄炮瘰又高き尿より落る瘰は玉
子を付てぬりてくくくくくくくく
先てまろてゐる油を少くぬりて
せんは付てさすうはらう或はじ草花
の油に人油をぬりていづれをも付ては
其上に玉子の白に椰子油と合せ
木綿のべて付て其上は酢と水と等
分ふ合せて初めぬりてすかりてをぬ
りては花の油をぬり付て二日ゆりて
まろてゐるとせんと玉子の黄と花
の油を合せて付てぬりて瘰の瘰

人油を用ひて洗ふなり。人油な
き時、てしめんてゐる又、じ草れ油も
よく、痲くさらぬがたり、ふて、まゐりて
いると、あて、あて洗ふなり。●突痲も、右
の、く、焼酎、と、と、洗ひ油、茶、と、せん
一に、あつて、痲口、こ、入、其、上、又、玉子、乃
白、は、前、の、く、付、其、上、に、酢、と、水、と
合、せ、て、付、不、痲、より、肉、を、あ、る、や、う、に
と、と、一、突、痲、あ、つ、た、時、の、水、つ、と、ふ、て、肉
を、洗、ふ、なり。初、ち、血、を、よ、ら、う、ぐ、ん、に、出
る、が、あ、つ、と、る、く、と、あ、つ、つ、の、悪、く、又
た、と、く、や、む、と、悪、く、突、痲、く、く、血、を
と、じ、ら、う、又、あ、つ、た、痲、の、口、せ、と、く、して、血、出
ど、して、腹、せ、と、く、あ、つ、た、女、篠、の、葉

を、せん、と、て、飲、せ、し、ら、う、こ、ら、い、た、り、手、の、血
いつ、と、又、大、便、と、下、ふ、なり。總、て、手、負
の、血、を、と、く、止、め、が、ず、其、子、細、い、後、又、痲
れ、処、へ、血、を、よ、せ、は、ど、き、と、あ、つ、た、り、血、た、か
き、と、き、の、痲、乃、処、へ、血、より、て、痲、癩、と、なる
時、甚、し、い、く、き、か、り、血、を、あ、つ、た、痲、愈
て、後、あ、つ、た、小、血、を、は、と、茶、を、用、る、也
髓、筋、乃、痲、四、様、あり、一、つ、は、髓、筋、の
突、痲、二、つ、は、同、と、く、半、分、切、る、痲、三
又、一、同、と、く、皆、切、た、る、痲、四、は、同、と、く
堅、に、つ、ら、る、痲、乃、髓、筋、の、上、痲、乃、
も、こ、り、痛、く、あ、つ、た、頭、の、髓、と、と、る、に、よ
つ、て、氣、失、ひ、死、と、る、と、も、あ、つ、た、大、事、乃
痲、乃、其、子、細、い、口、せ、と、く、して、膿、出、が

外科

痲

たきぐ故なり髓にうつて無性に
なる事有時にうつて死するも有又
次は半分筋切たる痲なりこれら
残る半分より痛髓は通ふによりり
て無性になる事有故小半分のころ
より筋切らぬする堅にうつる痲
はさやどのやうにもは其子細い痲のい
ふみろくもななく膿もじやじ皆
さきころのやがはろし是は又髓は通ら
ず膿も出さず故は無性にうつて
しかたやう髓筋の突痲は二様あり
一つは痲の口見へと物ぬい針かどと
はきたる痲二つは痲の口見ると平
針かどみて髓筋を突は此より突

たる赤の痛むなり結句痛む甚し
くなる者なりとこが髓筋に有也
髓筋の突痲養生の痛をやまらば
膿を吸ふ茶とほらる故は髓筋の
底をぞとく茶とほらる
松脂 土竜の油各八是は童う女より
とれた者はほらる者なりバ蠟
ちんハ右やうふ移り付る又蜜
のわらどろり又ハ刺の油とほらる
合せてはる是髓筋の突痲とほら
強きもの小用ゆるかり又方小麦
粉八五てまめんていさ一両 鶏の油
大麦粉各四 麻仁油一両 右各煎り
こんれ粉と火い入せんと後玉子ねき

外科 卷之七

みツかへはるかり此茶と痛やはど
膿も出どば平針と口をあつかり
髓筋の堅にみゆるがふひくことよ
きかり●髓筋のみのでぬ間かま
く茶と用おへし膿出てよりたやり
げ散して吸ふ茶をばよ大麦唐大
豆多ん豆右三色粉にして酢水蜜
野菊小葵の汁をせんと糊のて
くけて付ふ●髓筋半分切さる養
生の大方はき痲と同前なり第一乃
茶うけてまゐんてゐるを痲はけ上
よへ玉子はまろりし花乃油又ハ蜆
の油をぬりて上の方へはせし茶と
付ふかり若くことして治せし益痛

ひ者ハ髓筋と切るとり●鼠筋
切らまてるとりハ髓筋を縫ハ
両口を合せ肉をうと縫たり痲の大
さくしてまゐんてゐると付よよは
玉子の白を付其上に酢と水と
合せはるし●髓筋の痲を洗ふ
時ハ酒と洗ふ水思ふり●髓筋切
りたる時ハよく巻きかり●髓筋
の痲はよく愈とへしはるるふ
痛くはやまげたるにや若しそ
も膿出ふかり吸出と養生專一也
○茶方
金性膏 一切金瘡に第一の膏茶
金のるるす 百目 明凡 三々 白粉 水干して

丹凡 やきて あせとらるの油 三合 はんてい
の合 蠟 三十五 右の二色乃油を入
せん 其後殘四味の茶種を入移る
たり 扱木綿とそく查を漉さる右の
蠟と入て移るあざるなり 又玉紅膏を
用ゆるもよー

玉紅膏 百九十三下り出

突痲の油茶 豕内油 一兩 椰子油 二
人油 一兩 龍腦 一々 生松脂 一兩 輕粉 一

右三の油は松脂を入せん泡沬を
やむに龍腦を今れた布にてに
こぼして輕粉を入せん合して用也

血を止る粉茶 血竭 乳香
右二味を末し兎毛をききさみ玉子

の白くはらませせて付る又ららるのわゆる
血をどひる時三日の内痲の療治とせ
す手負も又少くもあまなすべし

○頭痲

頭痲ハ三様あり一は切痲ニツラハ突痲
ニツラハ血出ざる打痲なり此三様内
も骨碎けるる銚を打くがじりり
又ハ髓筋をほひるすやう痛じり色々
ある銚のまねるり割るるはあつて大
痲へみゆる小痲なりハ探と入てみよ別
の形とらひ同トヤにわく高き低き
くらひあり但鋸齒のある形ハ銚
の口まをるすなはともあはれ其外ハ
銚の口まをるすはなり又ことによりて

割目少き時いぢぢるこも有又へ上の
 無痲と鉢のつてこもつ其まじの
 度々吐逆し眼あく目をほすこと
 有又牙をかき鳴ると有又塵二筋
 ろひ切こたげ又牙に糸一筋を引
 りふづれわろともひきて痛むの
 けまてるあむわろ此やうなるるに
 はぐまあればあむわろふて割
 るにきまじむわろ又あむわろ
 くして鉢のまろこもあり或は高き
 よろおつるまろ又へ木石を打つと
 人強力かるら此様なる推量して知
 有 乳香 蠟 豕の油 各名 右より
 合せ頭とそり是を温め一日何日

ろふまじむわろ餘の飛よるわろ者
 たり 頭の痲の時へ下し茶を用ゆべ
 かぎ必と吐逆するもの也 手肩は
 よれども食物の消しやをき物は初
 い冷たるものより熱の物悪し冷なる
 物の血の熱をさほとぬにやうたえ
 大麥の粘粥 苜 梨子 楳榔 石榴
 其後雞のひよこ 山鳥
 頭の痲の手肩はさきさき悪
 し又長く伏せると悪く寒き温
 ぐも又あきわろ 月水ある女とわ
 らくぐらぎ女の衣類を痲をほむ
 べんぢ

○胸痲

外科

三三

胸癩ハ胸ノ血乃落るるやうにさぐり落
つたるやう癩の方を下めて醋と水
と合せあつちてのまや吐逆させ胸
落たる血を吐出さず其後癩の
方の縫かところをうふしてせんと
玉子を付上を包こさう肺の臟
へあつらるる癩ハ呼吸自由なる
色は熱するやう是れ酢をのま
すべからず胃の府切たる時ハ唾血
あつた出る又癩口より食らるる者也
手足冷飢逆ハ氣をばかひ痛を
此癩ある所ハ胸の下鳩にあり肝臓
を切たるさぐり左の乳乃下にあつ
脾の藏切ある時ハ左の脇乃股付

ぎい也・腎の臟切たる時ハ水やうある
血出不癩ハ腰の三つゆい也・大腸乃切
たる癩の口より大便出る癩ある時
ハは絲のさぐり瘡治さず深手を胸
ハ血落入時ハ血をねり出でて癩と
ぬいて付葉の前のできて癩のはまら
ハ花の油蚯蚓の油を付ふやう腸と
はむ皮癩口へつらさう冷さるる
に入べりしとて冷ゆるやう酒と
あつち洗ひあつち縫なり癩の口せ
て入る時ハひろげて入べり骨續
切あるまある骨の間ハ灯心を入指合
して其上を榆柳の間を三分に
あけて編でぐるりと引まほし

ゆひて筋をこりて粉とる一筋道へは
筋をこりて粉とる一筋道へは
そくけきりたるとる方とて
とてつらとて其上をうす板とて
さみてすく扱内葉用ふ車肝要
なる・金瘡諸腫物若き者よ
ふははる療治をさくけては
たては手足の金瘡腫物はる破
すすみやふ治とてきこも專一也
胸の
ら頭癩の裏膿血のふるや
と第一なる中にも頭の癩ははよ
くあつるべからば腫物も同前
ははる急症たるものなり針を
はるも女又ハ幼少なる者

くばかす總として病今ハ前後中の
三あり老人小兒の病は始めてか
り中分にあらふべし疔など老人
小兒とて急症たるはる切て治
す中比より後いづる病今ハ
膽凡砒霜班猫の類を用ゆるべ
又るくやとてきこも專一也
症とて余病さう出ては
物なり又遅く治さくは
ばはみさうめとてくさる悪症とな
るなり・金瘡鼻血は生蒲黄
味を湯とて用ゆる吐血とるは
生姜甘草の二味と細末とてぬふ
く用ゆる・手負そりけあらば百

外科

百六十一

會臈中に灸するもよし。手負遺
精の塩を酒とて合せて土器に
入半日を焼て取出し、わねて三
度やきて粉し、茶一服を水とて用

○金瘡茶方

治血湯 手負するものきたるべし
足はうらたけし此茶を用也

芦毛馬の糞にて粉し、白鷄頭にて蛇
骨右粉し、てぬる湯とて用也

秘方 白朝散 一切金瘡に用て妙
なり 人參西木香西紫蘊 縮砂

大黃 白茯苓 當飯 芍薬 地黄
川芎 沈香 陳皮西 藿香 白芷

甘草 右十五味散茶とてんやくこ

いして用也 一服二々五分をいしてあり

薬のこたへ後に水八分入てせんと用也

春の當飯を太ふし、夏の芍薬を大
秋の地黄と大冬の川芎を太ふす、熱あ

るよ、黄芩、柴胡を加へ、大便結する
よ、芍薬をより、桃仁、枳壳と加へ、天黃

を大よす、小便通ぜぬよ、澤瀉、木通
と加へ、茯苓を大よす、胸さりたよ、麥門

冬、遠志と加へ、頭痛よ、川芎、白芷を
太よと、癩癧よ、桔梗、黃芩と加へ、癩膿

けりよ、黃芪、沉香、黃芩と加へ、より、
ら、獨活、防風を加へ、痛むよ、羌活

防風を加へ、不食よ、縮砂、枳壳と加へ、
嗽よ、陳皮を大いして、桔梗、半夏と

外科

加(腹)を(肉)豆(冠)を加(大)黄(を)を(ら)
 べ(痲)口(ひ)ろ(き)る(ら)當(飯)地(黄)を(倍)
 と吐(逆)を(ら)る(ら)干(姜)を(加)腫(氣)を(ら)
 ぶ(ら)大(黄)芍(薬)を(倍)と(胸)血(を)落(す)
 たる(ら)い(牡)丹(皮)柚(實)桃(仁)を(加)面(の)
 色(赤)き(ら)車(前)子(を)加(冷)痛(を)
 (白)木(干)姜(を)加(陳)皮(を)太(す)右
 の(茶)一(切)の(金)瘡(打)撲(産)前(後)に(用)
 て(妙)なり
 矢(の)根(拔)菜 磁(石)生(栗) 較
 裏(皮) 松(緑) 右(各)分(合)せ(痲)の(口)に(わ)
 ず(ら)ど(入)青(木)葉(を)を(ら)る(ら)て(ら)り
 付(置)べ(し)

粉(め)て 鷄(卵)黄 五(蠟)見(合)

右(や)り(ら)る(ら)ふ(ら)り(て)付(る)痛(を)を(ら)る(ら)や
 く(皮)と(愈)を(ら)り
 龍(骨)散 此(茶)一(切)痲(に)を(ら)る(ら)は(愈)を(ら)る(ら)す(ら)風(を)を(ら)る(ら)ひ(き)す(て)を(ら)る(ら)く
 愈(し)血(を)を(ら)る(ら)後(す)て(ら)る(ら)

龍(骨) 五(倍)子 半(分)の(ら)明(凡) 無(明)異 乳(香) 沒(薬) 黄(柏) 金(箔)

右(粉)め(て)ひ(ね)り(か)る(ら)る(ら)

金(瘡)林(好)物
 好(物)

っ(ら)こ。く(ら)あ(ら)び。ら(ら)と。あ(ら)ん(ら)ご(ら)う。
 わ(ら)び。な(ら)ま(ら)こ。こ(ら)の(ら)ら。ら(ら)ー。
 か(は)す。ひ(ら)ら。こ(ら)ら。あ(ら)ら(ら)ら。

くど。くま。ふき。さたり。

さへせう。みん。うねり。くじぎ。
肌ほけ物。ほろ。塩。ほぐみ。
あぶら。くも。大じぎ

禁物

頭腹たろ。物ひまひ。物おひ。
うぐた。男女交合

右の五つの大いびん

五辛。すめ。山のい。かまう。

きうり。さといも。なすび。ごやう。
めんろい一切あづけ。きれ。めら。
ふら。がら。ふな。あめ。もろごり。
うま。いん。づり。くらだい。さるめ。
いり。ぬこ。どせう。あま。はま。

さけ。のり。け。くら。い。い。い。

かき。き。ひ。ち。ち。た。ふ

○諸腫物禁好物

鼻疽。好物。柿。あま。い。

かすび。さすの。ほ。ひ。

禁物

みん。ざら。ま。ほ。

きう。そ。じ。ご。は。あ。ら。

くら。は。め。あ。

口舌に好物。ざら。む。あ。

くどのこ。魚鳥。た。

耳の病に好物。ごやう。あ。あ。

くた。みん。ら。せ。あ。た。

いり。な。ま。

禁物

な。ら。び。あ。ん。ど。

外斗

ざくら。ま。やはり。まらび。そば
きこう。ま。まらび

歯病そのやまひは好物よこひめ ざくら。らみ。らさ。
あざみ。とすれ。せんしやう。

禁物こんりち ざくら。ひめ。なほめ。うた。
あんご。やまの。山いも。ご

くしい。せん。そば。さたう。あざけ
川ののやまひと。がん。うま。うた。らざら

咽病ののやまひは好物よこひめ け。山のいも。ご
がう。とを。か。まらび

禁物こんりち め。その。ゆら。ちやう。
大らん。そば。きこう。か。すび

痔ぢの好物よこひめ あい。たん。あ。んぶ。
りや。らみ。たけのこ。ご。黒くろすめ

か。な。あ。び。き。あ。さ。の。り。は。り。
いちご。と。と。う。ま。ぎ。た。ご。ら。う。

ふ。み。たい。この。ま。
禁物こんりち 生菓なまめ。酒さけ。りん。ら。ま。

さん。やう。しやう。う。う。う。ま。らび。
きこう。ま。まらび。ひ。く。り。ゆら。

きざり。ま。ら。う。う。う。い。の。ち。
癩疽らそ疔丹てうたん毒瘡どくそう毒好どくよこひ物もの

大おほじぎ。あ。ま。あ。び。き。と。あ。ん。り。
あ。ん。ぬ。ち。さ。う。ご。ざ。くら。か。ら。ち。

うた。み。ん。白しろう。ま。き。う。う。いちご。
竹たけの。こ。あ。び。の。り。ご。ころ。山やまの。い。も。

ひ。う。ご。や。い。も。は。く。た。く。ご。ら。ご。
さ。た。う。ひ。め。が。し。ひ。め。り。ぬ。

の勢よつらかり

桑枝灸の法といふ桑の木乃枝を
火に炙り火焰を吹き火とけ
りくいを腫物の上へたしめて灸に
用也一日に三四五度とて瘡肉た
まらばとて腐肉さうて後新
肉より上ることとて腫物の四方に
灸とて灸の發背とて脊に
出る腫物膿潰とて下疳
流注瘰癧腫瘡久く愈さる
腫物又いまだ潰とてこれに
灸とて灸よ

葱熨の方といふはきたらして
炒て熱くと布木綿に包み腫物

の上をさきりぬきとて
取てあつらかり流注結核骨癭
窄膝風等の疔を治と先蒜を敷
灸とてし餘毒いまだ散せざるふ
是を用ひて熨とて氣血とめざ
らるなり又みくらみくらいよし
痛をやり腫をひく血を散どるの
良方なり

○敷薬 粉茶

礬黄散 明凡生 石膏中
朱中 龍骨小 大黃大 胆凡大 芎藭
のよはやきて中
ふさきめい生と大 右六味う粉に
しひ移うとて此茶の芎藭肉のうて
愈どるふは付てまらみとるりて

腫物の色赤くたるはで付てより
此菜はよれぬ腫物かゝるは痛む
さうかゝるは此の腫物ふも努肉
有て痛む此薬をひきつて上へ
やくと付てより努肉かたぬ
用也

黄栢散

黄栢大 靈天蓋大

明凡

輕粉小 榆白皮大 黄丹大

乳香

中 沒藥中 吉茶小 甘草中

金銀花

大 蛇骨小 右よ粉心

てい

い移りかゝる痛甚しきもの

乳香

沒藥 金銀花を大ふし

明凡

さう愈えんとおもひ

皮を大に膿をくらりておむ

朱明凡と大一寸肉をあらんとせり

馬蘭根と少入ふ上に膏菜を付

靈生散

靈天蓋大 明凡中

虎皮

小 鹿茸 虎皮の半分 甘草小 朱小

菊花

大 榆白皮小 右各粉少

てい移りかゝる此菜を愈え

るやうにせしむるは

栢散を大方に愈て後に此菜を

用と即時にいりわらう熱あ

い石膏を少く加へて愈肉高

かゝる黒梅を中に加へて其外加味

黄栢散

生氣散 此菜に金瘡をい

諸腫物産前後に用ふ氣付たり
蒲黄二兩 人参二錢 甘草二分

右粉ふしゆそ水とそ用ひ

黄金膏 大黄 黄栢 天南星

草烏頭 五倍子 酒曲各一兩 黄芩

鬱金 白芷各五 芙蓉花二兩

右粉りて玉子の白こふて移りて付

此菜ハ癰疽發背諸毒の症より使

ひす用也

陰陽散 赤芍薬 白芷 獨活

石菖蒲 五倍子各二兩 紫荊皮五

右粉りて酢すと移り付る癰疽腫

毒流注半陰半陽の症ふり

抑陰散 草烏頭 赤芍薬

白芷 天南星各一兩 肉桂五

右粉りて熱酒と移りはるる

癰疽元氣虚寒の症腫ひり或

潰て口れはふり又筋ひきたり

骨痛と其外一切乃冷症ハ用也

巴豆膏 巴豆一味を炒こ

はきたりりハかやくれハに

て用也當座にハらてはハかハすハ

らハすハ惡瘡腫瘡口れハふりハ毒肉

ハハ毒の根ぬけハりて即愈也

芙蓉膏 芙蓉葉 黄荊子各

右粉りて石臼に入ハきハらハり

雞卵の白ハこハて移り付る腫物ハ頭

をハのハとハはハりハりハ此菜

と付て腫物しゅぶつより烟けむりのやうにいけ立たい
 より此茶このちやの腫物しゅぶつをてにほふまふと
 不際ふさいに付て瘰癧れいれん疔ぢやう発背はつはい錐すいとさ
 とやうに痛いた堪たへぬに付て立処たつところ止と
 鐵桶膏てつとうこう 蕎麥稿せうばくこう乃灰のはいの淋汁りんじつ一いっ碗わん
 と一いっ碗わんよせんトは灸しゆて血竭けつかく乳香にゅうかう没ぼつ
 茶ちや各かく三さん 右粉みぎこなとほ右みぎの煎汁せんじつを入いて又煎またせん
 半はん分ぶんにわらうたる灰はいあけてよくひくると
 き黄丹わうたん雄黄ゆうわう辰砂てんさ各かく八はち石いし灰はい五ご
 右みぎより細末さいまつよせんト汁じつ乃内のちへ入いかすや
 のまゝに焼やつて焼物やぶつよ入口いりぐちをよくこりて
 たくり置おて腫物しゅぶつを見合みあせ三稜さんりやう針はり
 こそさやうり内うちへ此茶このちやを入いふふく底そこ
 へ入いる四五度四五ど用ゆる時ときよく慰なぐさの妙たぎを

○洗茶せんちや

當皈たうはい 獨活どくかつ 白芷びやくし 甘草かんさう 各かく二に 葱頭そうとう 五ご
 水みづ三さん椀わん入いてせんト右みぎの茶味ちやみ煮ゆたゞ
 むらゝたのけてらるゝ一いっ查しやをこり
 絹切きんせきをゆてふて腫物しゅぶつをあひひき
 よめてかやくとほくろ洗あらふと腫物しゅぶつ
 を風かぜにあてぬやうにすべし

○諸流家傳之膏茶しよるいけだんのかうちや

萬能秘傳膏ばんのうひでんかう 防風ぼうふう 荊芥けいがい
 何首烏かすう 草烏頭そううづづ 各かく八はち 獨活どくかつ 白芷びやくし
 木鼈子もくべし 紅肉稍こうにくしやう 白薇びやくゑい 川芎せんきやう
 當皈たうはい 白芷びやくし 杏仁あんじん 各かく五ご 天南星てんなんせい
 黃柏わうはく 大黃たいわう 各かく一いっ 威灵仙ゑいれいせん 蒲黃ぼわう 胡こ
 麻仁まにん 苦參くさん 各かく三さん 穿山甲せんさんかう 七片しちぺん 蜈蚣ぶこ 一いっ

算麻子 廿粒 油髮 少 さい女の

右の葉きざみてこほの油二斤一夜
ひじ次の日出炭火をゆくくしてせんと
八分めふちうて葉こがもててうた
あがりさるとの葉をあけ細き絹かて查
をじさうて水飛の丹一斤水粉三両
とふ油の内へ入又せんとはめて

龍骨 血竭 石乳 没薬 同

茶 礞硝 各五分 輕粉 二分 珍珠 五粒 麝香 五粒

香り龍腦 右の葉外よりうたれ
きて油の内へ入る右の葉はうたれ
どよく粉れを入るなる火よりあけ
て大たらいに水を入れて鍋をひじ
火氣をさぬに前よせんとてゆるる

桃柳槐枝を以て手ととみぬやに

してかやくにゆるる茶をこー
らゆるるとたよりあやくにゆるるまで
近所へ不孝なる人懐胎れ女雞猫犬
かどとちのよするといひわたり此葉弟
一瘰疽疔癰腫瘡癩毒風毒一
切の難腫惡瘡に妙なる

奇方神異膏 當版 大黃

玄参 白芷 赤芍 肉桂

黄丹 生地黃 各百 右れ葉あ

くときざみこほの油二百目にい
たとして春へ五日夏へ三日秋へ七日
冬へ十日ひるなりきて炭火をそろ
くくゆるるすりのこがくこたあけて絹

にてこゝろ一查をさう又せんとて祈るるは
丹を入れてよくかきませぬややくに祈るる
癰疽發背一切の悪瘡或は湯やけど火
やけど切癩又はけごりの小咬まてるはし
或は湯やけど火やけど切癩又はけごりの
に咬まてるはし或は女人の腰氣たが
血にこりてよ

太乙膏は方い癰疽の所に見へたう効
能をある所に發背は腫物と湯を
あゝひねぐい木綿にのべて付ふ外は丸
て水とすのますべし・血氣通せざるは
酒とて用也・女人の白ら長らゝは當飯
とせんと用也・一切の血風風眼は太陽の
穴をさう外は山施子れせんとて用也

膝の痛し付ては外は塩湯とて用也月
水とこり又血塊し付ては・濕瘡肥癬
の類はどは油と少し加へて付ては
・瘰癧及び漏瘡癰毒梅毒瘡はどは漬
おとたるは先塩湯とてあゝひねぐい
なびく温酒とて三五十粒用也・虫
獸の食まてる湯火打撲金瘡はどは此
かゝやく十年もたくりてとく小損せん久

雲母膏 川椒 白芷 赤芍薬
當飯 菖蒲 黄芩 白芨 川芎
木香 龍胆 白朮 防風 厚朴
桔梗 柴胡 蒼朮 黄芩 附子
白茯苓 良姜 百合皮 桑白皮

陳皮 槐枝 柳枝各二 右は油二
升五合に七日に其後炭火をせんと
柳の枝をて手をとれどかきほせて
と沸めるとき火よりれし又沸乃ち
ふこた再び火よかるとなりぬるごとく
三度して葉乃色かきて黒くならぬ
布にてこ査をさりとせんとて丹乳香
没薬塩火血竭鹿射香各五 雲母 磁
石各四 右粉にて槐の枝をて手と
ごりごり右の葉を入れて振り合せやき
に水を入れてかやくと一滴水たててみ
るに其一滴の水よまらびて玉となり
やうやうなげんぬるぬるあけて鉢
ふかぬる内は水銀二兩と絹は

つゝ手にてよくすせてかやく上蓋を
してねかり用ゆるとき水銀とくら
りて用ゆる一切腫物に妙也乳癩瘰
癧骨癧ははけて内に入るかやく一兩
と二兩に分て酒をて用ゆるは悪物
を吐かり腸癩ははけて内に入五兩
を五まきけて甘草をせんと用ゆるまざ
る散りみみる茶とこみか下る也
膿下りてのら毎日五粒は酒をて用ゆる
ふかり膿下りややくて用ゆるす
鬚疽耳癩臍癩牙癩瘤及一切腫
毒を付てす即時散り痛もややく
愈むる難産入温酒をて二分用
血暈をて死せんとするふ生薬の汁

天南星 蕺麻子 桂枝 各二

獨活 當歸 白芷 蒼朮 大黃 各二

右粉以之葱汁生姜汁二椀に一夜い

たり次の日ごは油八斤を入火をゆる

しくとせんとて葱姜汁かき混ぜる時

あけて絹うすじに黄丹 十四 松脂 一斤

入て又せんとてゆるに移る此茶一切

風寒暑濕にやうく骨節うつさ

筋ひきほろあつてかむひかえ

いり第一鶴虱風附骨疽ふ付ては

万病無憂膏 川烏 草烏

大黃 各六 當歸 白芷 赤芍 各六

白欝 白芨 連翹 烏茶 肉

桂 木鼈子 各八 槐枝 柳枝 桃

枝 桑枝 東枝 各四 苦參 皂角 各五

右ききりて胡麻油 右ききりて

胡麻油二斤に一夜ひに次の日炭火

をゆるくとせんとて茶焦色なるに

絹で査をこしとる又火よりけ水飛乃

丹十二兩入槐と柳の篋して手とどり

すむれば玉一一滴を水ととて玉

とろりこられたるして乳香没薬の粉

各四兩入移り合せたてたり置也

此膏茶一切腫物疼痛ととりて妙

かり心腹のいづみんはその痛む所に

付ては哮喘喘嗽より背心に付る

かり下腹ちう腹より臍にけり頭

痛眼の痛より大陽の穴に付て其

痛眼の痛より大陽の穴に付て其

外一切無名の腫毒癰疽發背疔疽
癰毒流注濕毒腫毒瘡と治すに
初ら痛く或はかゆみあつるに
いそのまう付く毒氣を散らす
若散として腫物とかなるも此茶と
付とは痛をやら膿をこそ肉を上げ
て愈すと妙なりとの能毒とく

くのか

青膏 唐蠟百目 白胡麻油百廿

家猪油半 椰子半 青葙菜半

二升くさへまう 右油を銅の鍋に入れて

よくせんたごこの汁を入れてせんた

水氣のやれ時は蠟をへてに查を

さらたくり用ゆるかり一切の腫物に

初より終まで用ゆるかりびに癰に付

てより方の痛く痒くとこむるわり

赤膏 蠟廿五 胡广油 猪油

椰子各十 右せんた合せ明凡を少

加丹をば見合せ赤くかり入絲

まうだんは春夏はかき秋冬はわり

ふとへ一方れ愈茶は用ゆる也中

に囊癰やうして愈と及び氣腫下

疔ふ

黄膏 蠟 猪油 椰子

胡麻油 前よりせんた合せ百

合草の黒を少く加へ黄雄を見

合小黄色よわるるを入る或は巴豆

莫广子と少く加へ此茶は方れ吸膏茶

かる膿と吸ひやぶる末をぬりその上
此膏茶を付まじり吸ひやぶること
りむり

白膏 蠟 猪油 椰子 胡广油

前のくまんと合せ輕粉五胡粉二十

右粉ふりかかんと見合せて入る也瘡氣

るまふ惡瘡やけど其外万れ愈茶也

黒膏 茄子百よあひぬぐひ

り旧に入てはきこらら一夜たきそ次

の汁をちぢりて鍋に入せんと苦辛十

忍冬日きこみ入てせんと查とこして

さりまゝせんと沈香粉ふり此茶金瘡

一切名のちれぬ腫物又いぢりくか乃

たきこらば治ると又此茶の汁はよ

つて諸病にやう・疫病に牛膝乃

せんと汁を・下血に薏苡仁乃せ

と汁を・疝氣に酒を・腹痛

に酒を・痢病に甘草の皮汁

を・用・目暈に川芎れせんと汁を

て用・痰に覆のせんと汁を・用・喘

息に川芎れせんと汁を・用・頓死に

い莖れをり汁を・用・氣違に南

天の葉乃せんと汁を・用・女のく

ちの麻仁の皮汁を・用・脚氣に

袋角のせんと汁を・用・一身ちひま

てひゆるに荆芥のせんと汁を・用・

下腹に水と用・咽氣に湯に

て水と用・難産に早稻稿

外科

百八

のせんと汁と用。口熱は青木葉
の汁と合ふとむ。瘡氣の熱洞入
らんとせば檳榔子のせんと汁めて
貼茶は輕粉を入合て女の右の手
の内より男の囊にぬる一兩日の内
に下りて愈るなり

○阿蘭陀流膏茶之方

金性膏 金のろくす 百明凡
丹凡 同 白粉 水ひいてあせたる油
合まていう一合 蠟 右油二色入て
せん茶味と入て移る也 查と木綿
てじさるなり 一切の疵はうら
くどきあるふい酢とてこたて付実
症の腫物よまの付ては落馬の酢

てこたて付て瘡疽の下の酢とい
きて上付る

菘若膏 青木葉 三盆 車前艸

三盆 ひはれ葉 椰子油 三盆

右茶味と油とひいて鍋とて

ト布とてこたて查をさう又せんとて

蠟と入かんと見合かぬに移るなり

此茶は腫物實症と膿多くと膿

とばらるこたては悪肉と痛と

さうの成念と虚症は用とて

犬山椒膏 犬山椒 阿仙茶

十五小麦粉 五 大黄 十五 黄栢 丹

まんでいう椰子油 胡麻油

右三味の油を鍋に入れてせんとのは

茶味をせんと出でて布にてかきぬこ
さう又鍋に入かんと見合せ蠟を糸
つめあつたり此茶の實症にて腫た
痛むる痛をやちりすなり

白寒膏 鹿角 鹿角 鹿角 鹿角 鹿角
鹿角 鹿角 鹿角 鹿角 鹿角 鹿角

輕粉 一分 白蠟 三錢 椰子油 二錢
右二色の油とせ

ト茶味を入りて蠟を分ぐんとみ
ふ此かやく第一肉をあげ皮と生ト

痛とさういやくとかりやくとんより

鼠色膏 金れろりす 銀れろり

す早々 白粉 白粉 樟腦 雞子白

十酢 二合 あせたるの油 三合

右油と酢とせんとさう茶味を

入るる蠟とてかんとさう一切實症を

不腫物痛によへ便毒腫よかみあつ

て痛むふより毒虫にされるにや

色赤痛むふより

枚脂膏 蠟百々 松脂百々

やぎさうの油百々 枚の油三十五々

てとれんている三十五 玉乳香 五々

右油とせんと松脂を入れてさう茶味を

入るる蠟ふてかけんと見乳香の鍋を

おろそ入ふ此茶の一切金瘡によへ

古き腫物愈るぬるにや虚症にさう

悪膿はくへ痛むるにや筋氣脚氣

によへ虚症乃者の下と痛には

外科 虚にむるに愈るぬるには

古き瘡こりて痛むにや瘡疽の
虚にやうるるにや大秘傳の方也

砂糖さとう ちん膏ちんこう ちん百ちんひゃく 蠟ろう 五十五ごじゅうご

枚脂まいじ 三さん 麒麟竭きりんけつ 五ご 阿仙茶あせんちや 三さん 白砂糖はくさとう

一いち ころんころん 三さん 松脂しょうじ 二に 胡麻油ごまあぶら

右油みぎあぶら とちん脂ちんじ ひらふ入いれ てでんでん ところ

り 其後茶そのちや を入いれ て移うつ り蠟ろう のらひを

とて入いれ りのる此この かややく瘡疽しょうじ の

虚きよ なる下した して痛いた んにや又また 志し づら

腫物しゅぶつ 上うへ のるふす痰たん して腫はれ るふ

う年とし 久ひさ きころちみふす瘡毒しょうどく 乃なり

かほりしむふす

万病秘傳膏ばんびんひつせんこう 蠟ろう 半はん 松脂しょうじ 三さん 百ひゃく

胡麻油ごまあぶら 七しち 合あひ 右油みぎあぶら とでんでん ころんと

ころん松脂しょうじ を入いれ けたるこれ蠟ろう と
入いれ たる見合みあひ せ布ふ してことなる

此この 膏こう やく第一虚だいいちきよ を實じつ するすむり

大熱だいにつ して筋氣しんき 脚氣きゃくき により筋しん とのべ

虚きよ して腫はれ めづはかほり痛いた んと

きほるふす寒疝かんぜん して腫はれ ちるる

小ほる温あつ むむはちるかり瘡疽しょうじ とこ

れまらなるにやてしりんとふるを加くわ

て付上つけあ げ木綿もめん をきせ巻ま くとこれい

即瘡しやう あるかり瘡虚疝しょうきぜん かりて

かてこれこれを付つけ て實じつ せしむるかり

疔先痛てうせんいた んにや此膏茶このこうちや に銅あがね をるの

不ふ ころを加くわ へて口くち にほるふ口くち をあて

妙たう かり瘡疽腫しょうじはれ ころんふはは

外科
其外虚しと大車トの物より世膏
茶を用ひて守

麻仁マニころは膏カウ 六ろは四シ 麻仁マニ四五

金のる子コ十五ジュウゴ 古きコキ一枚イチ脂シ十ジュウ 蠟ロウ十五ジュウゴ

乙切草ニシキウサウの油アブ十ジュウ 野菊ノキク乃油ノアブ二十ジュウニ

右二色ウニイロの油アブとせんどりちんチン松脂ソウシと入

ころけコロケるころけコロケる子コ麻仁マニころはと

入蠟ニロウかたんととるわり

此コノかやりの腫物シモノ虚クとなり下シモを痛

むと付ツキ糸イトに痛イタシをとり上ウヘへ引ヒキめど

かり骨痛ハネイタシはよりうらとこりり痛イタシは

より古きコキ痲マ久キウく愈イユう糸イト西セ膿ノウあつ

て痛イタシには金カネぶらみミをとり色イロとより

愈イユと古きコキ瘡毒ソウドクやあまて愈イユうぬる

よより又よと糸イト膿ノウうつて痛イタシよし

麻仁マニ膏カウ ころはのこコ 早サキ麻仁マニ四五

大葵オウキの花ハナ 早サキ生ナマすころを 乳香ニウキウ十五ジュウゴ

桃モモの脂シ十六ジュウロク 銀ギンのる子コ 三サン五ゴ粉コ びりやニ

ちんチン 白百合ハクハクの油アブ 廿ニ五ゴ 蠟ロウ 六ロク 广仁クワニ

の油アブ 二十ジュウニ とよりんニ 牛ウシの油アブ 二十ジュウニ

右ミダリの白百合ハクハクの油アブ 广仁クワニの油アブ 牛ウシれ油アブ 合アヒて

せんどりちんチンとをとりけケるころ銀ギンの

る子コ 蠟ロウとれりレているをのノに其ソノのち

乃ナ茶チャを入イレ移ウツり後ノチより子コ 蠟ロウを合アヒて

とて布ヌをそにてれりレているのち

に入イレるかり此コノ茶チャへ筋シム氣キ脚カク氣キ手テ足ソク

かんるふあり虚ク症シヤウ乃痛イタシとよし

癩カサのありありふあり痔シ膿ノウか

外科

三

きこねにやうし瘰癧を治るにやうし
骨痛のきこふ

土龍膏 土竜 黒やき 牛の油 黒や
猪の肉 三々 黒やき 猪の油 合半 蠟 七々

右より油をせんところて土竜をこの
と三の油ひきよしてそろりし入蠟
してかざんをして移りあつたり此
のやう腫物の肉とあげあへ愈む
中ふも古きす瘡毒下疳の愈うぬ
ふに付てより

鶏子膏 七々 鶏子の

黄蠟 二十々 ろうされ油 二十々 鶏子の

黄 右より移り合せ鍋でおろし
て後没薬を粉にして各二々づ入木

綿と漉かり此菜手足のへてまじり

にや筋氣にや虚症の腫物には

蜂蜜膏 緑青 粉にして

枯凡 粉ふして 明凡 やきと 蜂蜜 百々

酢 五十々 甘草 粉ふし

右酢をろりとせんところてあまきこる時
蠟と入る蠟のこけらるるにせ

この油を十五々入四色の菜と入る

木綿と漉かり此かやく一切腫物
に虚實ともい用ふかり

楊梅皮膏 柳の皮 生うて 楊梅

皮 粉ふし 石灰 廿五々 ろうこの花

二百々て 鮎のくげり 三々 丹 五十々
あせたるる乃油 椰子油 十々

外科 三

ちんらん 右の色を一度入
 せんト柳の皮軒ろこの油揚梅皮
 の四色を合せ移ろて柳の皮の香
 におろごた布をてし查をさう又鍋
 み入石灰蠟を入らげんは移ろこ
 ひるに蠟は廿五のほりふては
 此膏茶第一骨にぎに用ゆるこ
 だきこらおとにす

輕粉膏

猪の肉油 十々

椰子の油 十々 松脂 十々 人油 十々
 龍腦 一々 輕粉 五々 蠟 十々

右移ろさう前に同ト此の如く第一
 突疵穴疵其外腫物穴のてくふく
 して内に膿はうてとととととと此

茶と合熱甚しく膽凡の油と少
 一加べいづれ古き疵の愈るあり
 あり又痔の痛にや瘰癧乃穴
 ぶくくそと茶の入るこた付て
 あり下疳にやあり

蝸牛膏

蠟 平々 綠青 三々

野菊 二々 あせこらなるの油 三々
 椰子の油 十々 蝸牛の黒やき 三々
 右二色の油一度小入せんトのら茶
 と入移るなる乳香へ鍋をたうして
 へ系かり此の如く第一膿をさる痛
 をとら西肉は久膿ととととととせ
 びきる腫物ふにけとや

大黃膏 檫乃皮火をそく粉 くらぶて

こうろろ一五 せんとりときなりを明凡一五

こころの汁三五 右はの油三五 蠟十五

右油とせんとじつは某をひつらり

合せ一度に入そろくとうれませて蠟と

入かんととそろりあらる此膏某の附骨

疽によりいづこの腫物も虚症にり

又手足の痿るるにより脚氣ふより

回香膏 松脂三五 蠟十五 青木葉

茴香五 小麦粉二五 こまの油卅

椰子の油廿 右三色の油とひつふ

入てせんと松脂と入ころける時右三色

の某と入かきなせ蠟を合げんとそろ

後又布ことこと也此膏某の腫物虚

症もろみほろみらによりやぢれ久く

く愈ぶるふより總と膿を吸

出し肉とくやくあらるなり

甘草膏 松脂三五 ひよろろどり

この油十五 蠟廿五 薺乃汁五

たごこの汁五 甘州粉にて 椰子油

右三色の油と汁

をひつらりせんと水氣のるきを

脂を入まころけるこの蠟を入加

減をつらりその後布ことこれ下

此からやくへ金瘡腫物古瘡も出

ふら虫をどのまく其時に此からく

に胆凡の油を少く加へて付る能虫

を出とかり小瘡や西がり有ふ明

凡を少し加へて付まばたらはらかき
とやむ古き瘡外へ出どして痛むは

乳香膏

松脂六々 乳香粉 没薬五々 蜜十 薑陸粉 右の油をへて

あせたりぬの油卅々 右の油をへて

脂とへころけりるこは薑陸と入蠟

とを加減をころわり乳香没薬後

に鍋をかろして入を布をてころす

ところり此のや一切の痲愈かぬ

小よし又腫物の痛むはよし氣腫

瘰癧口あきそくくくく痛む

くて愈さるにや

琥珀膏

松脂甲々 鹿の角白 白粉二十 鉛のる 二十

銀のる 三々 枚脂三々 乳香五々

柘榴脂三々 没薬三々 琥珀三々

あせたりぬの油七々 右油をへて

松脂枚脂琥珀の三色れ粉と入て

鍋をわろして後乳香没薬の二味の

粉と入を蠟とを加減をころす

とぐ此かやく瘡古痲腫物は

どして痛むはよし久き下疳は

乳癧よ功あり

代針膏

瘡癧うみ熟して潰へ

さるふし 乳香二 白丁香細 直直

巴豆殻 各五 碱各 右末と 熱

水調て瘡の頭はぬるべし常に碱水と

以てこもて潤して乾をべからず

琥珀膏

頸項の瘰癧及び腋の

下に初め梅の子の如く腫結し其硬
くして次第に數珠の如く散りて散りて
潰す或は潰して膿水絶え久しく

して瘡をばいへ漏瘡と成ると治す

琥珀二兩 木通 桂心 當飯 白芷

防風 松脂 硃砂 研丁香 木

子 肉各 麻油二斤 木香 各三

丁香 桂心 木香 硃砂を以て細末

とす其餘の如く判油二斤四兩と

用て右の茶を浸して七日して蠟を入

熾火にて煎ど白芷の焦黄かりし

これ布を以て査をこしさらさらと丹

と入ると一斤柳の枝を以て手ととめ

どしをかきばせ黒くならし一滴と水

をたらしたるふ玉となさばそのとと

右琥珀 丁香 桂心 硃砂 木香 各五

味を入再びうたせよそのの(やき)と

のに入置べし用ゆるさら少斗を取紙よ

のてこまはほくたし

神異膏 瘰癧瘡毒を用ひて治す

かしく大効あり此瘡瘍と治るとる

の良方なり 露蜂房 見多者

蛇蛻 塩水にて洗ひ 玄参 半兩 黄芩 三

男子髪 玉子の杏仁 皮尖とす 黄丹 十二

この油 二斤 先玄参 杏仁 黄芩の

三味を以て油を入煎して黒くならし

うらひ蜂房 蛇蛻 乱髪を入再びせん

トて黒きにいろ濾し查をころころ
 く丹を入煖火にて煎し柳の枝を
 以て手とそめばかきませ水は滴手
 みてひろるにやうにやうにころころ
 ぶとゆつてあしとす

生肌玉紅膏

此膏專癰疽發背諸の潰たれ

うらみうちきびよ用のこぞ小膿
 へて膿とまると時ふまら甘艸湯を用ひ
 又甚き者ハ猪蹄湯とを痲をあ
 ひやうらうら縮してぬぐひら膏
 と手のうらふとらぬ新きたれよ
 とう付外太と膏と以てころころ内
 補脾の緩茶を兼服とるとた腐

肉をろく脆し新肉をみやふ生ト

瘡口自うかきある此外科收斂茶

中の神茶わらう 白芷 五 甘草 二

當皈 二 輕粉 瓜兒血 各 四 白占 二

紫草 二 麻油 一 先當皈 甘草

白芷 紫草の四味と油の中に浸さ

し三日火はゆるくして熬つて茶の

かろろと縮してらう又油を鍋の内

よ今を煎し血化し尽て次は白

と入まらるる火にて化し四つ分て水

入茶碗四つ小して輕粉一錢づきを用ひ

○諸茶種油の取様

白百合草花油取やう花の志をころ

とあせたらうの油はけてくころきど

かき日に其後湯せんしてとる
水氣のかんやうふとろあせたるの油
うたごころ生あめのごほの油を用う
此油の性の温いそ筋氣なり又難産
のこためてちて臍のまゝろ小腹のち
はくれ生あかる中風はよ女乳
腫あけよ小児の臍のちよより
こころ草の油取やう前小同ト癒
付て痛をとむる耳のちむとれあて
めて火くさすべ腹のちむ酒と
用やけどに付ては腫と散とと妙
麻仁れ油取やう粉れを蒸てあて
あかり取たる女の乳腫て痛む付て
は立処よりちり筋はよりたるに塗

茨の花の油取やうゆれ花と同ト
熱の痛と癩乃痛に付ては田虫
付てより虫ところ吐逆とる湯み
て用ひてよ
駒引草花の油取やう前同ト熱と
かゝらひなる丹毒やけど漆まけは
但虚の腫物に用ひす
接骨木の油取やう陰干れと酒と二七
日ひ其後ごまの油と入れたせで
ト酒氣のかんき布とこと打身
はう内より酒一盃に此油十志ぼく
か入て用ゆるかり
三七草の油取やうこほふきごみと
あせたるの油と二七日かけてせん

一として布うることなる癩熱の腫物又
 一先のたるにせんにうてす
 草烏頭の油取やう粉にそあせたる
 され油よひに某の精出るといふ
 けと取やう性大温からゆへ寒より
 生トたる腫物癰疽風毒又ハ手足冷
 てのひかりかやうびとにぬりて大に吉
 白欬の油取やうたふへ白欬の粉
 らべごまの油六合入て一七日とぎ
 びりくるやう咽のうら腫痛ひい少
 用や鼻の内乃瘡よ丹凡の油少
 付あへ此油をぬる鼻たけよわつ
 一木綿にぬりてさへ入る
 樞の實の油取やう樞と粉にいじ

てころなる金瘡腫物の肉をあふ
 かり第一癩をいり筋をやけ悪
 血をさるやう
 龍腦乃油取やう龍腦白蜜あせたる
 かの油各等分に茶碗入りとり
 合せよくまきして三日ほど置少い
 せんふして付る癩まらみある時少
 ぬる熱をさる實症とて痛をい
 よきふわりてす
 琥珀の油取やうよくまき末して
 あせたるの油は合鍋に入らゆりて
 水氣わらやけして布うて取り
 かり濕をさる中風脚氣齒草には
 石淋淋病は茴香とせんトその汁は

て此油少く用也婦人の帯下崩漏止
るゆき湯と用也産後の血あが
るたふ少く用也鼻の下ふもゆる
小便通ぜざるに酒と用也つま
は二三志ばくわらう

てとめていさの油取やうとまに
てむして取やう腫物も又何とま
らうがとたふ付てより第一瘰癧
湿とらう瘰癧をこら愈肉とら
げ悪血をこら中風脚氣骨の痛と
治とらわらう

小茄子の油取やうとほくはきさみ
りて油ひひじはがふ入百日を置
布ととじゆせんりて取やう第一熱の

腫とれらわらう

胆凡の油取やう粉はてごほの油ひ
たり日に三十日ほど干布ととじゆえ
りて取やう此油性はよれがゆ一味
へ用ひず久く愈くはら瘰癧下疳は
とほ其外悪肉はく腫物愈くぬ
る物ふり瘰癧のこあひり取冷て
膿そこありて痛ふり金瘡の膿
はくてもみづるより尻をす口とさか
つららららみあふ少く入てより
真蛇の油や首尾を切去らう
たぬ出きさみあせたるの油は
ひたし五十日ほどかき少く蒸て取也
一切の腫物の痛とら瘰癧をよら

古癩の色あかりて愈ふは
蜈蚣の油取やうあせなるの油廿
日かゆに其後ゆせんめと取る
諸乃毒虫毒獸よぢらる痛む
りて痛はる腫と引かろはけ
ふとよたかり又寒風よあつと
いひふ
桑の蝸牛の油取やう桑の木よ
かる蝸牛を取油ふひじとろけ
ゆるは布よてことかり筋痛
よ一切腫物の疼ととむ脱肝
とよあつて切付と痛なく
して其癩愈るなり
鶏卵の油取やう玉子乃黄ごう鍋

にせんとるふ初さうかりひひ
焼ば油出るなり又白く取
右のぶして後女の髪を金水
のぶと白くなる日なり木綿
はみ火よあつとろり
諸の痛をとろりぬるとろり也
小児の首をすのめは髪とろり
に付とびとろり面よけ有
に切付てよ痰の塊に付てら
るなり第一疝氣に腫物愈ら
るに付てよ
蠟の油取やう蠟一両油一両入皮
ころろ布よてとろりなり又
方蠟をさんどたて細る木綿に

てうけ水よたをべー即蟻ハカ
をとたりて沈^ち油^{あぶら}はくやうをれ
とよせてるなり一切の腫痛^{しゅうちう}にぬ
るてようふかふ手足^{てあし}ひきけるふぬ
るてよう^{あぶら}瘋^{まどろ}のあるにすー

外科調寶記大尾

文化三年十月求版

大坂心齋橋通南丁目

敦賀屋九兵衛

同心齋橋通唐物町南入

河内屋太助

同御堂前筋瓦町南入

小刀屋六兵衛



石田氏

